

靈界物語 第七九卷 天祥地瑞 午の卷

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍点が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第七十九卷』天聲社

1980(昭和55)年05月05日 五版發行

總説に圖表が二枚あるがテキストでは再現できないので省略した。

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。
図表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜変更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

）
）
）
）
）
）
）
）
）
）

目次

序文 じよぶん
総説 そうせつ

第一篇 たつ
龍の島根 しまね

第一章 こちゆう
湖中の怪 くわい（一九八二）

第二章 愛の追跡（一九八三）

第三章 離れ島（一九八四）

第四章 救ひの船（一九八五）

第五章 湖畔の遊び（一九八六）

第六章 再會（一九八七）

第二篇 龍宮風景

第七章 相聞（一九八八）

第八章 相聞（一九八九）

第九章 祝賀の宴（一九九〇）

第一〇章 祝賀の宴（一九九一）

第十一章 瀑下の乙女（一九九二）

第一二章 樹下の夢（一九九三）

第一三章	鱈 <small>わに</small> の背 <small>せ</small> （一九九四）
第一四章	再生 <small>さいせい</small> の歡 <small>よろこ</small> び（一九九五）
第一五章	宴遊會 <small>えんいうくわい</small> （一九九六）

第三篇 伊吹いぶきの山風やまおろし

第一六章	共鳴 <small>むたなき</small> の庭 <small>には</small> （一九九七）
第一七章	還元龍神 <small>くわんげんりゅうじん</small> （一九九八）
第一八章	言靈 <small>ことたま</small> の幸 <small>さち</small> （一九九九）
第一九章	大井 <small>おほみ</small> の淵 <small>ふち</small> （二〇〇〇）
第二〇章	産 <small>うみ</small> の惱 <small>なや</small> み（二〇〇一）
第二一章	汀 <small>みぎは</small> の歎 <small>なげ</small> き（二〇〇二）
第二二章	天變地妖 <small>てんべんちえう</small> （二〇〇三）
第二三章	二名 <small>ふたな</small> の島 <small>しま</small> （二〇〇四）

序文
じよぶん

昨日、天祥地瑞の「巳の巻」を口述し了り、引きつづき著述にかかる考へなりしが、非常時日本の現状を坐視するに忍びず、遙々綾の聖場を後に、關東別院に起臥し、國體擁護のため、昭和神聖會の創立準備に寸暇なく、口述中止の已むなきに到りしが、漸く少閑を得て本年七月十六日、午の巻の口述を始め、漸く完了することとはなりぬ。本巻は龍の島根の物語を以て終始したれば、朝香比女の神一行の活動状態を明細に記すに到らず、次巻を俟つて神業の一部を發表し奉るべし。

惟神靈幸倍坐世。

昭和九年七月二十日 舊六月九日

於關東別院南風閣 口述者識

此至大天球の中に遍在充滿する一切萬有は、其物の氣體たると液體たるとを問はず、何れも聲音（聲と音とは區別あれども、今茲に聲音と連ね書くは、聲にも非ず、音にも非ず、全く兩者を兼ねて不二なるものの假名なり）を發する性質を有せざるはなし。今如何なる物と雖も、微かに變動すれば、微かなる聲音を伴ひ、大に變動すれば、大なる聲音を伴ふは吾人が日常經驗する處なり。

さて其聲音とは何ぞや。通常理學者の教ふる處を以てすれば、音響なるものは一の振動にして、或物の振動は、其振動を媒介物（主として空氣）に及ぼし、媒介物の振動は吾人の鼓膜に及ぼし、鼓膜の振動は聽覺神經を経て腦に達するに因ると言ふにあり。而もこれ唯單に唯物論的形而下の解釋而已。吾人は斯かる半面の解説のみにては満足すること能はず。尚進んで物の振動は、何故に種々なる音響となり、又音響なるものは如何なる機能を有し、如何なる効果を有するやを知らむと欲するなり。換言すれば、吾人の聲は氣管を通過する空氣が聲帶其他の發

聲機關に觸れて發するなりてふ説明以外に、其發聲の因たる空氣の通過するは何の爲なるや。吾人の思料する處は、何故に發聲機關を藉りて聲となり、又他より來る聲と音とは、何故に吾人の聽管を通じて精神に影響するやを聞かむと欲するなり。更に之を究竟する時は、精神とは如何てふ問題に歸着するなり。

吾人は斯かる問題に對しては最早科學の説明のより以上の不可思議力、無礙自在の妙機を認めざらむと欲するも能はざるものにして、茲に全く科學の圈圍を超越したる形而上學即ち哲學的領域に入るものなり。古來の哲學宗教が或は聲音なる末流を遡りて歸納的に絕對不可思議なる本源を認め、或は無礙自在の妙機なる根底より演繹的に聲音なる枝葉を説くも、畢竟するに之が爲のみ。此無礙自在の妙機、絕對の不可思議力こそ實に所謂宇宙の本體、獨一の眞神、久遠の妙靈にして、一切の聲音は即ち其發現なれ。

大毘盧遮那經（第二具緣眞言品）に言ふ。

祕密主。此眞言相非一切諸佛所作。不令他作亦不隨喜。何以故。以是諸法法如是

故。若諸如來出現。若諸如來不出。諸法法爾如是住。謂諸眞言。眞言法爾故。

同經（同經の疏の七に曰く、

以如來身語意畢竟等故。此眞言相聲字皆常々故不流。無有變易。法爾如是。非造作所成。若可造作則是生法。法若有生則可破壞。四相遷流無常無我。何得名爲眞實語耶。是故佛不自作。不令他作。設令有能作之人亦不隨喜。是故此眞言相。若佛出興於世。若不出世。若已說。若現說。若未說。法住法位性相常住。是故名心定即。衆聖同即此大悲漫荼羅一切眞言一一眞言之相。皆法爾如是故重言之也。

又空海（又空海の聲字即實相義に曰く、

名教（名教の興りは聲字に非ざれば成ぜず。聲字分明にして實相顯はる。又内外の風氣
纔（纔に發すれば、必ず響くを名づけて聲と言ふ。響は必ず聲に由る。聲は即ち響の

もと
本なり。聲發して虚しからず、必ず物の名を表す、號して字と言ふ。名は必ず體
を招く、之を實相と名づく云々

と。是れ聲は絶對實在の發現にして、萬有一切も亦絶對實在の發現なれば、畢竟
ずるに聲物一如、絶對聲物一如なりと言ふに外ならず。又新約書の約翰傳には、
之を最も巧妙に言ひ現せり。云く、

はじめ 太初に道あり道は神と偕に在り、道は即ち神なり、この道は太初に神と偕に在り
き、萬物これに由て造らる、造られたるものに一として之に由らで造られしは無
し、之に生あり、此の生は人の光なり、光は暗に照り、暗は之を曉らざりき云々
……。それ道肉體と成りて我儕の間に寄れり。我儕その榮を見るに、實に父の生
みたまへる獨子の榮にして、恩寵と眞理とに充てり……

と。是れ聲は即ち道、道は即ち神、神即ち萬有なりと言ふに外ならず。(此點に

於ては基督教も多神教の一なり）要するに是等は釋迦、基督等が認めたる聲音即
絶對說にして、我言靈學の聲音根本說と相類似せりと雖も、其所說たる、漠然と
して據る所なく、朦朧氣に聲音の妙機を想像したるのみにして、我言靈學の如く、
絶對の眞を傳へ、各聲の靈機の明確にして整然たるが如きには非ざるなり。
抑此大宇宙を我國にては、之を至大天球と言ひ、大宇宙の主宰、之を天之峰火
をの神または天之御中主と言ひ、萬有一切、之を神と言ひ、此活動力、之を結び
といふ。（而して尚之を言靈學の上より言ふ時は、至大天球は一聲に【あ】と言
ひ、天之御中主は之を一聲に【す】といひ、【す】分れ發して七十五聲となり、
此七十五聲は結びの力によりて、更に發動すれば萬聲となり、歸り納まれば一聲
の【す】に藏まる）是一切法界の四大觀なり。此四大は即ちあらゆる聲音なり。
天之御中主の發動、之を神といひ、神靈元子と言ふ。神靈元子とは、【こころ】
なり、【こころ】とは絶對の靈機が、此處彼處と發作するの謂なり。此の【ここ
ろ】の發作が更に現れたるもの即ち【こゑ】なり。【こゑ】とは即ち心の柄なり。
此聲廣義一面に又【をと】と言ふ。【をと】とは外より【を】に結び當るものあ

るに對して、【と】を給び、對ふるの謂にして、緒止なり。

之を嚴格に區別せば、前者は有靈機物即ち動物（廣義）の心的作用による自發的の聲音なり、音に非ず。後者は無靈機物即ち植礦物等の他より迫撃するを俟つて後聲音を發するものにして、心的作用なき物の他發的の聲音なり、聲に非ず。然れども動物の下等なるものは植物と區別すべからず。植物の下等なるもの亦礦物と區別する能はずして、而も一種の聲音の質を有するものなれば、其の本に遯る時は、聲と音とは區別なく、其末に奔る時は人間の聲と雖も、其聲より心の活きる觀念を控除して考ふる時は、是れ音なり。之を要するに、聲と音とは天之御中主の心が發動したる聲音の程度の差によりて名づけられたるものにして、等しく廣義に於ける聲なり。此聲音は法界一切の萬有となりて形相を現じ、又幽冥に藏れて不可思議なり。

此卷舒發藏の活機は即ち所謂結びにして、此結びの力によりて、一切法界の生住異滅する状態を至大天球とは言ふなり。されば至大天球の組成元素は聲音なり。聲音無ければ至大天球なし。故に此聲音は至大天球と共に存在して、如來の所作

に非ず、眞神の所生に非ず、如來、眞神そのものなり。之を眞言と言ひ、之を道と言ふ。道即ち神にして、眞言即ち神也、佛也。（我國にては之を言靈と言ふ、言靈は即ち神なり、神は即ち天之御中主の心なり、此心を種々に動き結びて萬有を生ず。萬有は萬別あり、故に萬有の言靈亦萬別あり）

此聲音を大別すれば、則ち已に言へりしが如く、聲と音とに別る。而して此聲更に別あり。一は人の聲にして、他は動物の聲なり。人の聲は明朗にして數多く、動物の聲は溷濁にして數少く、又動物の下等なるものに至りては、僅に響を有するのみ。即ち靈機の減少するに従つて、聲亦減少するなり。尚又同じく、人間にても外人と我日本人との音聲言語を比較するに、外人の聲はすべて濁音、半濁音、拗音、促音のみにて、又鼻音〔ン〕を用ふるもの頗る多く、日本人の聲は直音のみにして（但し今日の人の聲は此限りに非ず）清明圓朗にして、各聲確然たる區別あり。外人の聲は數聲の連續拗曲せるものなるが故に、其元聲少く（悉曇五十三音、英語二十四音の如し）日本人の聲は一々朗明なるが故に、其元聲多し。（七十五聲なり）彼等は拗促音を本位として直音を出し、日本人は直音を本位として

拗音を用ふるなり。(但し上古は一も拗、促音を用ひず)故に外國人が直音を出さむとするも、日本人の如く圓滿朗明なる能はず、又日本人が拗、促音を發せむとするも、外國人の如き曲拗促迫したる音を出す能はず、兩者自ら主客の位定まりて動かすべからず。

例へば、悉曇の摩多(母音)了(ウに用ふ)エイ(エに用ふ)ウウ、ヲウ(アウに用ふ)の如く、また韻鏡の字母唇音濁の竝「ベイ」「ヘイ」(部廻「ブキヤウ」「ホウケイ」にして、バビブベボの韻を受く)、齒音清の精「シヨウ」(子盈「イヤウ」切にしてサシスセソの韻を受く)等の如し。是等は我國の聲に呼べば、「ヲウエイ」、「アウビヤウシヤウ」等なれども、本音は「ヲウ」、「エイ」、「アウ」、「ビヤウ」、「シヤウ」等なり。故に拗、促音を本據とせる外人より直音を出さむとするには、必ず數音を綴り合し、不足を補ひ餘れるを捨て、所謂反切の結果に非ざれば出すこと能はざるなり。況や又彼等が用ふる拗、促音を出さむとするに於てをや。即ちヲウはトウ、ツに用ふる時始めてウの如く活き(ツはタとヲウとの合なるが故に)、エイはセイ、セに用ふる時始めてエの

如く活き（セはサとエとの合なるが故に）、又竝「ベイ」「ヘイ」は、バビブベ
ボに活く字母なれども、下に附くイ、ヤウを除かざれば用を爲さず。精「シヤウ」
はサシスセソに活く字母なれども、下に附くイ、ヤウを除かざれば用を爲さず。
徳紅切東は徳のクと紅のコとを切り除かざれば、トウに成らず。戸公切紅も公の
コを切り除かざれば、コウに成らざるにても瞭なり。我國の直音を本據とするも
のよりすれば、毫も斯かる困難なし。尚此等の事、鈴廼屋大人の漢字三音考にも
論ぜられたり。

また外國人の音は、凡て朦朧と溷濁して、譬へば曇り日の夕暮の天を瞻るが如
し。故にアアと呼ぶ音のオオの如くにも聞え、又オオと呼ぶ音のウウの如くにも、
ホオの如くにも聞ゆる類、分曉ならざること多く、又カキクケコとハヒフヘホと
ワヅウエヲと相渉りて聞えるなど、諸の音皆皇國の音の如く分明ならず、又溷雜
紆曲の音多し。東西を今の唐音にトンスオと呼ぶが如き、トとンと雜り、スとオ
と雜り、又トよりンへ曲り、スよりオへ曲る。春秋をチユインチユウと呼ぶが如
き、チとユとイとンと雜り、チとユとウと雜り、又チよりユへ曲り、イへ曲り、

ンへ曲り、チよりユへ曲り、ウへ曲る。古の音も皆斯の如し。一音にして斯の如く、
瀾雜し、二段、三段、四段にも拗れ曲るは不正の音にして、皇國の音の正しく
單直なると大に異り、曲らざる音もあれども、それも皇國の正しき單音の如くに
は非ず。アア、イイ、ウウ、カア、キイ、クウなどのやうに皆必ず長く引きて、
短く正しくは呼ぶことあはず。短く呼べば必ず韻急促りて入聲となるなり。
外國の入聲は皇國の入聲の如きクキツチフ等の顯はなる韻はなくして、單音の
如くなれども、正しき單音には非ず。其の陶物に行きあたりたる如くに急促りて、
喉内に隠々として韻を帶べり。此方にて惡鬼、一旦、鬱結、悅氣、臆見、甲子、
吉凶など連ね呼ぶときの惡、一、鬱、悅、臆、甲、吉等の音の如し。故に今この
書（三音考）に入聲の形を言ふには、假に其音の下にツ點を施して識とす。日月
の唐音をジツエツと書くが如し。これ新奇を好むにあらず、其韻を示すべき假字
なきが故なり。此點を施せるは皆急掣る韻と心得べし。さて斯の如く韻の急促る
は甚だ不正の音なり。皇國の音は（い、ゐ）いかに短かく呼べども、正しく舒緩
にして急促る事なし。又外國には韻をンとはぬる音殊に多し。ンは全く鼻より出

づる音にして、口の音に非ず。故に餘の諸々の音は口を全く閉ぢては出でざるに、此のンの音のみは、口を堅く閉ぢても出るなり。されば皇國の五十連音、是誤りなり。此の五十連音は下に言ふ悉曇の出にして、濁音、半濁音を除きたるなり。我國には之を合して七十五音なり。鈴廼屋大人も之を知らざれば斯る論あり。

この五位十行の列に入らずして縦にも横にも相通ふ音なく孤立なり。然るに外國人の音は凡て溷濁して多く鼻に觸る中に、殊に此のンの韻多きは、物言に口のみならず、鼻の聲をも廁供るものにして、其の不正なること明らけし。皇國の古言には、ン聲を用ふるもの一もあることなし云々。

是れ主として支那字音に關しての見解なれども、他の外國の聲音も此の理に漏れず。之を要するに聲音は至大天球の主宰、天之御中主の心の發はれたるものにして、一切萬有が享有する靈機の程度に由つて聲と音とに分れ、聲は更に靈機享有の程度に由つて人の聲と動物の聲とに分れ、人の聲は又更に靈機享有の程度に由つて、日本人の聲と外人の聲とに分れ、茲に聲音の正不正と多少とは、明らかに靈機の正不正と多少とを示せり。

加^{しか}之^{のみ}我^{なら}國^ずには、其^{その}聲^{こゑ}各^{おの}活^の機^わありて機^き能^{のう}を有^{いう}し、我^{わが}國^{くに}に有^ありとあらゆる言^{こと}詞^ばは、皆^{みな}此^{この}聲^{こゑ}に依^よりて義^ぎを現^{あら}はし、心^{こころ}を顯^{あら}せるものにして、彼^{かの}外^{ぐわい}國^{こく}語^ごの如^{ごと}く、有^あり來^{きた}りの無^む意^い味^みなる符^ふ號^{ごう}には非^{あら}ず。例^{たと}へば漢^{かん}字^じ音^{おん}にて風^{かせ}を風^{ふう}と呼^よぶ、而^{しか}も「フウ」と言^いふ音^{おん}は何^{なん}の意^い義^ぎを有^{いう}するや。又^{また}金^{かね}を金^{きん}と呼^よぶ、而^{しか}も「キン」と言^いふ音^{おん}は何^{なん}の意^い義^ぎを有^{いう}するや。但^{ただ}し韻^{みん}鏡^{きやう}學^{がく}者^{しや}は種^{しゆ}々^{じゆ}理^り窟^{くつ}を附^ふするも、僅^{わづか}に少^{せう}數^{すう}の音^{おん}に止^{とど}まり且^かつ完全^{くわんぜん}ならず)

< 圖表省略 >

其^{その}他^た印^{いん}度^ど語^ごにても、又^{また}英^{えい}佛^{ふつ}語^ごにても、斯^{かく}の如^{ごと}く推^{すい}究^{きう}しゆ^けば、遂^{つひ}に捕^ほ捉^{そく}する處^{ところ}なきに了^{をは}るなり。是^これ世^せ界^{かい}の語^ご學^{がく}者^{しや}が最^も苦^く心^{しん}しつ^つある問^{もん}題^{だい}にして、我^{わが}文^{もん}部^ぶ省^{しやう}が國^{こく}語^ご假^か名^な遣^ぢのため^に焦^{せう}慮^{りよ}慘^{さん}愴^{たう}するも寸^{すん}效^{かう}を奏^{そう}せざるは、畢^{ひつ}竟^{きやう}是^{これ}根^{こん}底^{てい}無^なければなり。若^もし此^この根^{こん}底^{てい}だに有^あらば、我^{わが}國^{こく}音^{おん}、國^{こく}語^ごは忽^もちろ^ん論^{ろん}、支^し那^な、印^{いん}度^ど、英^{えい}、佛^{ふつ}、獨^{どく}語^ご乃至^{ないし}禽^{きん}獸^{じゆ}鱗^{りん}介^{かい}の聲^{こゑ}をも解^{かい}し、又^{また}其^{その}音^{おと}を聞^きけば草^{さう}木^{もく}、金^{かね}、石^{いし}、線^{せん}、竹^{たけ}の種^{しゆ}類^{るい}をも分^{わか}つべし。(聞^きき慣^なれ居^をるが故^{ゆゑ}に大^{おほ}凡^{よそ}は聞^きき分^{わか}ち得^うるなり)

釋^{しゃ}迦^かは之^{これ}が功^く德^{とく}を解^とき一切^{いっさい}衆^{じゆ}生^{じやう}語^ご言^{げん}を陀^だ羅^ら尼^にと言^いひ、我^{わが}國^{くに}にては之^{これ}を言^{こと}靈^{たま}と言^い

ふなり。

言靈とは言葉の靈なり。靈とは心の樞府なり、即ち吾（小我）心の樞府はやがて天之御中主（大我）の心の樞府なり。此の心の樞府を言葉の上より觀たるもの即ちわが言靈にして、此の言靈はやがて天之御中主の言靈なり。故に此の言靈を知る時はあらゆる一切の言語聲音を知り、一切聲音言語を知る時は、天之御中主全體即ち至大天球を知るなり。されば若し夫れ眞にこれを知りて言靈を用ふれば、一聲の下に全地球を燎くべく、一呼の下に全宇宙を漂はすべし。況や微微たる雷霆を驅り、風神を叱し、乃至一國土を左右し、小人類を生殺するに於てをや。如是言靈、如是大道、如是妙術は實に我國の具有なり。故に我國を言靈の幸はふ國と言ひ、言靈の助くる國と言ひ、言靈の明らけき國と言ひ、言靈の治むる國と言ふなり。（是等は我古事記を眞解するに依りて明らかなり）

抑我國が斯の如く靈機の淵叢地にして、如是大道を具有する所以のものは、至大天球成立の本然に由るものとす。猶吾人の一身を支配する精神の宿れる腦髓の如く、至大天球に於ける腦髓なればなり。彼藤田東湖が「天地正大の氣粹然とし

て神州に鍾まる」とうたへるも、朦朧氣ながらにも之を想像したればなり。今一步を降つて之を天文地的關係より觀る時は、實に我國が地球上に於ける位置、氣候、水土の關係より來るものなりと謂ふべし。香川景樹も水土の關係より聲音の正不正を論じて曰く、（古今集正義序）

聲音は性情の符、性情は水土の靈ならむこと更に論を俟つべからず。而も濁れる中にありては、善しと能く見し西土の、芳野の花の美善きを書せるに似たるも、百千鳥侏離のこちたきを免れざれば、彼いはゆる樂んで搖せず。哀で傷らざらむ性情の正を得むことは、ほとほと希なるべし。況や黄なる泉に染紙のいたく喧擾せる響をや。猶餘んの萬づ國原、其音すべて單直清朗なる事能はざるは、我天津日御靈の大御照しますらむ大御光の遍き際に疎ければ、水土自然に剛潔ならずして、彼の雜はり濁れる柔土弱水の中に涵育るが故なりと知るべし。されば其謠へるや譜節して、之を文どり、鐘鼓もこれをたすくといへども、なほ其の音清爽ならず、其調朦朧なるを、如何にせむや。獨我安積香の山の井淺からず。清濁る

影し見えねば、難波津の何をかわけて善や悪やをとほむ。
膂肉の空しく、内木綿の洞ろにして、天霧さはる隈しなれば、金石を假らずと
雖も咏ふを得べし。ただちに天地を感動し、神人和樂かく、何ぞ百獸の舞をうら
やまむ云々。

是れ、専ら漢詩を斥けて和歌を興さむが爲めに論ぜるなれども、其の水土による
聲音性情の關係を論ぜる大凡の意は聞ゆるなり。氣候水土の關係によりて、其
國人の性情風俗一切が各特異の點にあることは、吾人の日常見聞きする處にして、
又是等天然の勢力が、實に偉大なる不可抗力を有するものなることは、歐洲にて
も、モンテスキュー、スペンサー等其他社會學者も等しく認めて論明せる處にし
て、今此の聲音の如きも畢竟同理なりと言ふべし。我古事記に依る天體學に徴す
る時は、地球は至大地球の中心に位して、稍西南に傾度を有せり。（地球中心説）
而して我日本は其の地球の表半球の東北方面の上部に位するが故に、恰も我國は
地球面の中央の上に位置するものにして、温帶中にありて、寒暑度を失はず、土

壤沃腴にして水氣清澄なり。是を以て又我國を豐葦原瑞穂の國と言ふなり。

豐葦原とは、至大天球の事なり。瑞穂は滿つ粹にして、【ほ】は稻葉などの穂

又は鎗の穂先など謂ひて、精銳純粹の處を言ふものにして、滿つ粹の國とは地球

上に於ける粹氣の充滿する國の意なり。されば、其の國土に生ずる一切は、皆精

銳の氣を鍾めて生れ、靈機も亦精銳なり。斯の如く皆それ精銳なり。故に曰く、

眞にこれを用ふれば震天撼地の業も亦難からずと。さて斯く精銳なるものを用ゐ

むとする時は、其の用法も亦精銳ならざるべからず。而して其の用法は實に我朝

廷に於ける天津日嗣の大道妙術にして、所謂言ひ繼ぎ語り繼ぎつつ傳へ給へる我

國具有のものなり。

然れども崇神天皇の大御心によりて、一び韜藏せられてより以還、暫く其傳を

失ひ、天下紊れて儒佛教の傳來となり、これと同時に、又外國の語聲をも輸入し

來りぬ。所謂支那字音及び印度悉曇是なり。爾後我國の道益々に失ひ、言靈の傳

愈泯び、祭都潢成が如きすら我國上古文字無しと言ふに至り、萬葉集時代には已

に假名遣ひの愆れるもの多く、源ノ順朝臣が我が國古語の失はれむことを憂ひて、

和名抄を遺したれども、其の和名抄已に誤りあり。斯の如き有様なりしかば、現在今日まで使用してある五十音の此間に起るに至りしなり。是れ實に印度悉曇の轉化したるものにして、其が自然の理法に違へること甚し。今や崇神天皇以來二千年を経、時運りて乾坤一轉せむとし、茲に彼の祕せられたる大道は世に出でむとするに至りぬ。然れども馴致習慣の久しき人皆、彼の誤れるものを以て、大道の本然なりと信じ、却つて此を以て奇異を好める妄誕の説とせむ。

故に、今茲に之を闡明せむとするに際して、先づ現行五十音の基本なる悉曇なるもの宇宙眞理の正傳に非ずして、神隨の本道に非ざる所以を知悉せしめむとする。然れども亦往々にして現行五十音が果して悉曇に基づくものなるや否やを知らざるものあるべければ、又更に一步を退いて五十音の出所を論定し、而して後本論に入らむとするなり。抑從來の片假名、五十音圖共に吉備眞備が作なりと言ひ、又眞言の僧徒が天竺の悉曇章によりて、邦人に固有する音のみを擧げて作りしものなりといふ等、其他異説多くして詳ならず。吾人は今之が作者の何人なるやを尋求するは、必然の要件に非ずして、五十音圖そのものの根據を求めむとするも

のなるが故に、作者の穿鑿は姑く之を措きて問はず、直ちに五十音の故郷に入らむとす。

さて、今之を眞言僧侶の手に成れるものとせば、悉曇の出なることは、論を俟たず。而して又これを吉備眞備の作なりとするも、同じく是れ悉曇に基くものなり。何者か吉備大臣が之を作りしとするも、必ずや入唐歸朝後のことに相違なくして（唐に居ること二十年、我聖武天皇の天平七年歸朝す）學び來れる漢音によりて作れるものなるべく、而して從來支那韻書なるものは、悉曇より出でたるものに於て、畢竟同根の出なればなり。

張鱗之が韻鏡序に曰く、

餘年二十始得此學字音。往昔相傳類曰洪韻。釋迦子之所撰也。有沙門神珙。號知韻音。嘗著切韻圖載玉篇（南梁高祖武帝の天同九年成る）卷末。竊意。是書作於此僧。世俗訛呼珙爲洪爾。然又無處據云々

又また曰いはく、

梵僧傳之華僧續之云々

と。仍よつて支那韻書しななゐんしよも亦また悉曇しつたんより轉化てんくわせるものなるを知るしべし。故ゆゑに何れいづにしても、
我わが五十音ごじふおんは悉曇しつたんに根據こんきよを有いうするものなることは明あきらけし。韻鏡ゐんきやう易解えきかい大全たいぜんに曰いはく、

依開匳抄等。豎阿伊宇惠遠五字及横加佐太奈波末也羅和九字者在佛經中。餘所三十六字（五十音中父母音を除きたるもの）弘法大師所加也云々

或あるひは又また、

作者未分明矣

と。又同頭書に曰く、

云々三十六字雖大師加之。彼土本有轉聲法。有反音相通規則。故專見有口授傳來
非云新加之乎

と。今五十音中父母音を除きたる餘りの三十六字は、空海が加へたりとするも、
若くは否らずとするも、已に父母音にして彼に存し、其音字の配列順序にして兩
者同一なる點より考ふるときは、最早疑ふの餘地なかるべし。

< 圖表省略 >

悉曇には母音十二字あり、之を摩多と言ひ、父音三十五字あり、之を體文とい
ふ。而して我國の五十音圖の父母音は、皆右の中の同類音を一音に約したるもの
なり。即ち「」印を附したるは、其の約音を表する字にして、餘の字を除去すれ
ば、アイウエオ及びカサタナハマヤラワを殘し、此の父母音交りて、他の三十六
音圖は、此の悉曇圖を襲へるものなるは明白なり。(但し此圖は之を襲用せるも

のなるも、聲音は之を襲用せるものに非ずして、正しく我國の聲なり。上古よりは多少の變化あれども、之を襲ふも其類似の聲の位置を借りたるものなり、迷ふべからず。印度人の聲は到底日本人の聲とは同一ならざるなり)

第一篇 龍の島根

第一章 湖中の怪(一九八二)

天之峰火夫の神、大宇宙の高天原に生まれましてより、幾千年の星霜を経たれども、天未だ備はらず、地又稚くして、水母なす漂へる島々の中にも、別けて美しく地固まりし天恵の島あり。この島を葭の島と言ひ又葭原の國土とも言ふ。此島國は葦原の國土に比して約十倍の廣袤を有し、萬里の海の中に漂ふ生島なり。

この島の中央に屹立せる高山を伊吹の山と稱し、その麓をめぐる幾百里の湖水を玉耶湖と言ふ。この湖水は水清くして湖底の砂礫鏡を透して見る如く、清麗の氣自ら漂ふ。

伊吹の山には、桔梗、女郎花、撫子、萩、山吹、椿などの花樹繁茂し、春夏秋冬の分ちなく艶を競ひて咲き亂れ、芳香風に薫じ、さながら地上の天國を現出せるものの如し。數多の龍神と稱する種族、この山を中心として湖面に出没し、或は山に登りて安逸なる生活を樂しみつつありき。さりながら、龍神族はいづれも人面龍身にして、未だ人間としての形體そなはらざりければ龍神族の王は、如何にもして國津神のごとく人體をそなへたきものと、日夜焦慮しつつありける。

この湖水の上流に當りて、水上山といふ饅頭形の大丘陵ありて、國津神はこの丘陵を中心に安逸なる生活を送りつつありき。この里の酋長を國津神の祖と稱し、その名を山神彦と言ひ、妻の名を川神姫と稱へられける。

山神彦、川神姫の夫婦が中に、眉目形すぐれて雄々しくやさしき、男女二柱の御子ありき。兄を【あでやか】（艶男）と言ひ、妹を【うららか】（麗子）と言

ふ。二人の兄妹は互に睦び親しみて、影の身體に従ふが如く、いづれの土地に到るも離れたることなかりける。

大空に一點の雲もなく、月は皎々として東の野邊の草より昇らせ給ひ、星は黄金の光りを御空一面にまたたかせ、えも言はれぬ眺めなりける。

麗子はこの大自然の風光に憧れ、只一人吾を忘れて水上川の岸邊を下り行けば、清しき水面にうつる月の光り、星のまたたき、川水を銀色に輝かせつつ流るる状態のいとも床しくいと目出度きに憧れながら、月下の川邊に立ちて歌ふ。

あなさやけおけ

天之岩戸も開け放れ

御空の雲霧かげもなし

東の御空を見れば十四夜の

月は昇れり葭原の

國土の草木をいてらして

輝く野邊の露見れば

さながら星の光かも

水上川を眺むれば

水は澄みきり澄みきらひ

静に流るる月の光

眞砂にまがふ星の光

ああ天國か樂園か

この光景を吾一人

見るは惜しけれ父のみの

父も來ませよ母そはの

母も來ましてこの眺め

心ゆくまでみそなはせ

兄の君なる艶男も

吾後追ひて來りませ

ああこの清水川水よ
あこの清水川水よ
生きの生命の輝きか
汀に香るあやめ草
月の光に照らされて
濃き紫のやさ姿
あざやかなるかも吾兄の
君の粧ひそのままよ
吾足下を眺むれば
やさしき清き撫子や
黄色に照らふ女郎花
仙人掌の花あかあかと
吾立つ川邊に香るなり
ああ兄の君よ艶男よ

斯く歌ふ折しも、川底を眞晝の如く輝かしながら、ぬつと首から上を水面に現し、歌ふ男がある。よくよく見れば麗子が歌中の人物、艶男の兄であつた。

麗子は餘りの不思議さと嬉しさに、川中に裳裾からげて飛び入らむとしたが、片足をさし入れた刹那、脛もきれるばかりの冷たさに驚き、元の岸邊に馳せ上り、茫然として男の顔を眺めたりき。これはその實麗子が兄ではなく、此湖底に潛む龍神族の王であつた。

龍神の王は如何にもして國津神をとらへ、これと嫁ぎて人面龍體を脱し、國津神同様の子を産まむことを思索してゐたのである。然しながら、水中にある龍體は底の藻草をもつて包まれたれば、さながら青き着物を着たる如く麗子の目に見えてゐる。

麗子は日頃戀ひ慕ふ艶男と思ひつめ、嬉しさと愛しさとの聲をしばらくして歌ふ。

☞ 天晴れ天晴れ
御空は清し月清し

星ほしの光ひかりはさやかに

かかる畏かしこき天あまぞら空そらを

そのままうつし浮うかべたる

玉たま耶やの湖うみの清すがしさよ

その清すがしさの眞まんなか中に

高たかくそびゆる伊いぶき吹やま山

いぶきの狭さざり霧は早はや晴はれて

天てんもあざやか地ちもうらら

吾わが戀こひまつる兄せの君きみは

この湖みづうみに何い時つの間まに

遊あそび給たまふやいぶかしし

如何いかに清きよけく澄すめるとも

この湖みづうみの水みな底そこは

吾わが足あしさへもきるるか

思ふばかりの冷たさに

吾は震ひをのきぬ

如何にして汝は何時迄この水に

浸り給ふかいぶかしや

はや上りませ陸の上に

如何に水面は清くとも

花咲き満つる陸の眺めに

如何でしかめやうらなる

地上に早く上りませ

懐しの君戀しき君よ早や來ませ

いとしき乙女ここに在り

愛しき乙女ここに在り

はや上らせよ兄の君よ

と力ちから限かぎりに歌うたひながら艶あで男やかの上じやうりく陸へくをうながしてゐる。水中すゐちゆうの男をとこはこれに答こたへて、

☞ なつかしの麗うららか子の君きみよ妹いもうとよ

汝なれと吾われとはとこしへに

この葭よしはら原はらの國くに中なかに

玉たまの緒をの生命いのちながらへて

百年ももとせ千年ちとせ八千年やちとせも

生きて榮さかえて果はてしなく

伊いぶき吹きの山やまの主ぬしとなり

この地ちの上うへに天てん國こくを

建たてむと思おもふ眞ま心こころに

汝なれに先さき立だち今いまここに

吾われは來きつるよこの水みづは

心こころのままに變かはるぞや

冷たき心持つならば

この川水は冷ゆるらむ

あつき心を持つならば

これ湖水はあつからむ

熱くもあらず冷たくも

なくて楽しく今吾は

汝を迎へむ龍の都へ

心はげまし水中に

飛び入りませよ麗子の君よ

斯く歌ひながら麗子の入水をうながしてゐる。麗子は戀しき兄の、言葉を盡しての招きに心はをどり、忽ち水中に飛び込まむかと思ひしが待てしばし、腑に落ちぬ事あり。常に水中をきらはせ給ふ兄の君が、かかる冷たき水中に全身を没し、顔のみを上げて安々と言葉をかけさせ給ふはただ事ならじ。或は龍神の化身なら

むかど、うつぶして思案しあんにくれてゐる。

水中すいちゆうの男をとこは艶男あでやかの聲こゑそつくりにて、

☐ 天晴あはれ天晴あはれ

御空みそらは晴はれて月つきあかし

玉耶たまやの湖水こすいは底そこひまで

澄すみきらひつつ大空おほぞらの

月つきをうつせり千萬ちよろづの

星ほしを流ながせり汝なが眼めには

天津御國あまつみくにの莊嚴さうごんを

うつして清すがしき玉耶湖たまやこの

水みづはゆるやかにして香かをりあり

何をなにためらひ給たまふぞや

妹背いもせの契ちぎり今いまここに

汝なれと結むすばむ嚴御靈いづみたま

瑞みづの御みたま靈たまの仲なか立だちに

清きよく清すがしき夫めをと婦な仲なか

いざや來きたらせ給たまへかし

麗うら子らは磯いそ邊べに立たちて歌うたふ。

兄せの君きみの仰おほせはよしと思おもへども

家いへにのこせしちちのみの

父ちちの許ゆるしのなき身みとや

ははそはの母ははの心こころもまだわかぬ

今けふ日の吾われ等の如いかかにして

嫁とつぎの道みちをつとむべき

如いかかに戀こひしき君きみなればとて

父ちちと母ははとの許ゆるしなく

たとへ御許しありとても

この廣き葭原の國土に

せまき水面に嫁ぐべき

何はともあれ垂乳根の

家に歸りて定むべし

陸地に上らせ給へかし

斯く互に、水中に飛び込めよ、上陸せよ、と兄妹が水陸兩方面からかけ合つて
みる。

斯かる所へ一天にはかにかき曇り、闇の塊は四邊に落下し、咫尺暗澹、波狂ひ
立ちて優しき乙女の心は、狂はむばかりなりにける。忽ち暗中より一塊の火光現
るよと見る間に、艶男と見えし男は人面龍身と變じ、乙女の體をひつ抱へ、水上
高く捧げながら湖中に浮ぶ伊吹山の方面さして逃げ去りにける。

龍神の化身に乙女はとらへられ
行き方知れずなりにけらしな

(昭和九・七・一六 舊六・五 於關東別院南風閣 谷前清子謹録)

第二章 愛の追跡(一九八三)

四五歳の頃より、何時も御酒徳利の様に離れた事
のなき麗子の姿が、卒然として見えなくなりしより、
兄の艶男は俄に心いらち、物淋しさを感
じ、妹の在處を捜すべく、月下の野邊を逍遙しながら、
悲しき聲を張りあげて、淑やかに歌ふ。

久方の御空に月は輝けり
今宵はさながら天津國かも

草くさの葉はに置おく玉露たまつゆも月つきのかげ

宿やどして星ほしと輝かがやけるかも

そよそよと吹ふく夜半よはの風かぜにあふられて

草くさの葉はの露玉つゆたまと散ちるかも

わが面おもをなでて通かよへる夜半よはの風かぜの

ひびきは妹いもの聲こゑに似にたるも

葭原よしはらを吹ふく夜よの風かぜのひびきさへ

妹いもの聲こゑかとあやしまれける

わが妹いもはいづらなるらむ今宵こよひはも

姿すがた見えなくひたに淋さびしも

仙人掌さぼてんの花はなは路邊みちべにほへども

花はなの姿すがたの麗子うららかは見みえず

晝ひるの如月ごとつきの光ひかりはてれれども

菖浦あやめの花はなは色いろをかくせり

女郎花黄色く咲けど夜の目に

眞白に見ゆる不思議なる世や

女郎花路のかたへにむら咲けど

わが目にとぼしき麗子の君

麗子よああ妹よ汝は今

いづらに居るか言擧げせよや

かくの如月照る夜半も君なくば

わが魂は闇に等しき

村肝の心の闇を晴らしませ

雲を出でたる月の如くに

なつかしき戀しき妹よ麗子よ

汝はいづくぞわれ此處にあり

生命あれば吾にまみえよ麗子よ

わが行く野邊に百花匂へる

百千花艷を競ひて香れども

汝に優れる花の香はなし

葭原の國土は廣けれど汝なくば

われは淋しく死に度く思ふ

何故に君は姿をかくせしや

われは心をはかりかねつつ

萬代の末の末まで誓ひてし

君は吾身の生命ならずや

垂乳根の許しは未だあらねども

なれと誓ひし事は忘れじ

待てど待てど君の姿の見えぬままに

われは悲しく探ね來つるも

大空の月も雲間にかくれます

ためしある世と思へど淋し

君きみ無なくば吾われも生いのち命をは惜をしからじ

生いきて詮せんなきこの身みと思おもへば

なれのかげ見みえずなりけるたまゆらを

俄にはかに淋さびしくなりけらしな

君きみまさぬ淋さびしさ初はじめて悟さとりけり

やさしき聲こゑのはたとときれて

君きみが笑あみ君きみが言ことば葉はのやさしさを

今いま思おもひいでて一ひと入しほ悲かなしき

君きみ無なくばわれも此この世よに無なかるべしと

誓ちかひし言ことの葉は忘わすれ給たまふか

一ひと言ことの言こと擧あげもせず汝なれは今いま

一ひとり人さび淋さびしく離さかりましける

仰あふぎ見みれば星ほしはささやき給たまへども

わが耳みみ遠とほく聞きこえぬ悲かなしさ

水上みなかみの流ながれは如何いかに清きよくとも

汝ながよそほひに如しかじとぞ思おもふ

蟲むしの聲こゑ今宵こよひは悲かなしく聞きこゆなり

わが戀こふ心こころの色いろをうつして

何故なにゆゑに君きみはわが目めを離さかりますか

心こころもとなく迷まよひぬるかも

ちちのみの父ちちは更さらなりははそはの

母ははもさぞかし歎なげかせ給たまはむ

曲神まががみの伊いた猛たけり狂くるふ夜よるの野のを

彷徨さまよふ君きみに心こころひかるる

朝夕あさゆふに親したしみ交まじはり樂たのしみし

君きみは見みえなく悲かなしき夜よ半はなり

野路のぢを吹ふく風かぜも一ひと入しほ身にみにしみて

心こころ淋しみしき今宵こよひなるかも

ああ君はいづらにますか蟲の音も

ことに悲しく君をたづぬる

小田巻の絲長々と繰りごとを

くり返しつわねは泣くなり

片時も離れ給はぬ君故に

今宵はことに悲しかりけり

君の聲わが耳にまだ残りつつ

蟲の音さへもそれと疑はる

かく歌ふ折しも、萱草の生ひ茂れる中と思しきあたりより、麗子の聲として、

なつかしの艶男の君よ戀しさの

果てなき君よよくも來ませる

艶男の君の情に堪へ兼ねて

われは悲しく草野にひそむも

大空の月の光のあざやかさ

君のよそほひ其の儘にして

撫子の花の乙女はあざやかなる

月の光の露にうるほふ

艶男は蘇りたる心地して、

その聲は正しく妹の麗子よ

早や出でませよ草の褥を

風吹かば袖に散らむ萱草の

葉末の露は玉と亂れて

君のあと慕ひ慕ひて今此處に

われは來つるも悲しさのあまり

限りなく果てなきこれの大空に

光るは月の光ばかりなり

われも亦汝の姿を大空の

月と仰ぎてたづね來にけり

萱草の中より麗子の聲。

ありがたしもつたいなしと汝が言葉

われ叢に潜みて聞くも

曲神の伊猛り狂ふ世なりせば

心許すな艶男の君

天地に一人の君と思ふ故に

われ叢に魂をとどめつ

身體は今此處になし魂の

凝りて草葉の蔭に君待つも

今は世に身體持たぬわれなれば

生きてまみえむ術なかりける

龍神の醜の謀計にあやまられ

われはあへなくなりにつらしな

わが魂は龍の都の花園に

安く遊びつ君を忘れず

ただ一目君に會ひたく思へども

今はせむ術なき身なりけり

謀られし事のくやしさわれは今

君と現幽境を分てり

龍神にかしづかれつつ湖の底の

都にわれは今榮え居るも

艶男あでやかは此この歌うたに、麗子うららかには龍たつの都みやこに誘惑いろうわくされ、現世げんせにては再びふたたび會あふことのならざ
るを歎なげきながら、

☐ 汝なれは今いま淋さびしきわれを後あとにして

龍たつの都みやこに出いでますと聞きく

歎なげけども呼よべども返かへらぬ君きみなりと

思おもへばなほも悲かなしくなりぬ

この上うへは如何いかにせむ術すべなかるべし

死しして再びふたたび汝なれが行ゆかむ

草葉くさばのかげより、

☐ ありがたし情なさけのこもる兄せの言葉ことば

われは死しすともなげかざるべし

わがあとを尋ね來まさむ眞心は
嬉しく思へどしばし待たせよ
年老いし父と母とを後にして
來ますは天地の罪にあらずや
垂乳根の父も戀しく母も亦
いとしと思へば迷ひ晴れずも
せめてもの心なぐさめまつるべく
君は此世に止まり給はれ』

艶男はこれに應へて、

ㄣ
汝が言葉實にうるはしく思ゆれど
生命保たむ由なかりけり
玉耶湖の水に沈みてわれは今

汝なれが御許みもとに進すすまむと思おもふ』

麗子うらひかは、

『いざさらばわれはこれより龍神たつがみの
都みやこに歸かへらむ安やすくましませ』

と歌うたひ終をはり、一個いつこの火團くわだんとなりて舞まひ上あがり、玉耶湖たまやこの空そらをさして、長ながき火くわく光わうを帶おび
の如ごとくにひきながら、中天ちうてんに姿すがたをかくしける。

艶男あでやかは麗子うららかの事ことを忘わすれかね、假令たとへ幽界いうかいに入いりたりとも、自じ分ぶんも生いのち命めいを捨すてて彼か
女なれがあとを追おはむものと、玉耶湖たまやこ水すいを指さして草野くさのを分わけながら進すすみゆく。

『ああ淋さびし

ああ悲かなしもよ

玉たまの緒をの
生命いのちの君きみは罷まかりけり
生命いのちの君きみは今いまや世よになし
露つゆの生命いのちを保たもちつつ
戀こひと愛あいとに泣なかむよりは
われも男をの子こよ潔いさぎよく
この世よの中なかの絆きづなをば
斷たち切きり振ふり切きり一ひとすぢに
妹いもの後あとを尋たづね行ゆかむ
如何いかに波なみ風かぜ高たかくとも
闇やみはわが身みを襲おそふとも
猛たけき獸けものの中なかまでも
妹いもの戀こひしさ懐なつかしさ
進すすみゆくべし今いまよりは

父も忘れむ又母も

捨ててあの世へ進むべし

天地の神の御怒りに

ふるもわれはいとはまじ

戀故なれば何處までも

妹故なれば湖底も

われはいとはじ一道に

向ひて龍の都まで

百の艱みをしのぎつつ

行くはわが身の幸ならめ

玉耶湖の水は小波の

手をさしあげて招くなり

蟲の鳴く音もひそやかに

わが旅立ちを送るなり

月は御空に輝きて
死出の旅路を守るがに
われは思ゆも百千々に
砕くる心は星光か
思へば戀しく悲しもよ

かく歌ひながら、玉耶湖の方面指して急ぎつつ、漸く湖畔にたどりつき、月に
向つて合掌し湖水に向つて再び手を拍ち、

天晴れ天晴れわれはゆくなり水底の
龍の都の妹が側に

と歌ひ終り、ザンブとばかり湖中に身を投じ、あと白波と消え失せにける。

(昭和九・七・一六 舊六・五 於關東別院南風閣 林彌生謹録)

第三章 離れ島（一九八四）

麗子は人面龍身の湖中の怪物にさらはれ、黒雲の中を暫し何處ともなく、一瀉千里の速力にて運ばれつつ、とある紫壁蒼瓦の門前におろされ、ふと邊りを見れば湖水すれすれに浮べる龍神の都の表門前なりける。

數多の人面龍身の龍神族は、「ウオーウオー」と叫びながら、身體に藻の衣を纏ひ、顔面のみを出して幾百千ともなく、門の兩側に端坐し迎へ居たり。龍神の王は聲もさはやかに歌ふ。

あはれあはれ

百年千年相待ちし

國津御祖の愛娘

麗子姫を今此處に

迎へまつりぬ今日よりは

龍たつの都みやこの王こきしとなりて

われ等らが一族いちぞく悉ことごとに

人面龍身にんめんりゅうしんのこの姿すがたを

人の姿すがたに生うみ直なほし

龍神族たつがみやからを悉ことごとく

國津神等くにつかみらのみすがたに

よみがへらせて天地あめつちの

惠めぐみを湖うみの中なかまでも

照てらさせ給たまへ麗子うららかの姫ひめよ

ウオーウオー

あなさやけおけ

龍たつの都みやこの鐵門かなどは今いまや

天あめと地つちとの一時ひとときに

開ひらけし如ごとくさやさやに

開け初めけりあな尊ひらそ たふと

あなさやけおけ

あな面白の出でましよおもしろ い

と、各自くさぐさの音楽を奏で、歓迎の意を表し、龍神族は一齊に立ち上り、陸湖に出没して踊り狂ふその聲、天地も崩るるばかりに思はれける。

麗子はあまりの變りたる光景に、稍暫し不審の念晴れやらず、艶男の戀しき兄の事は忘れられず、父母の安否を氣遣ひながら默然と俯いて居る。

龍神の王は莞爾として、麗子の手をそつと握り、

いぶかしくおぼしめすらむ此島はこのしま

龍神族の棲める都よたつがみやから す みやこ

君なくば龍神族はいつまでもきみ たつがみやから

このあさましき姿保たむすがたたも

頭あたまのみ人ひとと生うまれて身からだ體たまは
このあさましき龍たつの姿すがたよ
』

ここに麗うららか子は最も早はや詮せんなしと決けつ心しんの臍ほぞをかため、人面にんめん龍身りゅうしんのあはれなる此この族やからと嫁とつ
ぎ、人間にんげんの子孫しそんを生うみ了おほせむものと、雄を々をしくも艶男あでやかに對たいする戀心こひこころを斷たち切きらむ
としたが、どうやら心こころの底そこに片いっぺんの名残なごりが残のこつて居ゐた。

『 思おもひきや艶男あでやかの君きみにあらずして

龍たつの都みやこの君きみなりしはや

かくならば何なにを嘆なげかむ今日けふよりは

龍たつの都みやこの君きみに仕つかへむ

垂乳根たらちねの父ちちと母ははとはさぞやさぞ

わがなきあとを嘆なげかせ給たまはむ

わが思おもふ心こころの中なかの生いの命ちなる

君もさぞかし嘆かせ給はむ

さりながら龍神族のもろもろを

助くる神業と思ひて慰む

水の中にかかる都のある事を

悟らざりしよ今の今まで

夢なれば早く醒めかしわれは今

見しらぬ國土に誘はれ來つ

千萬の龍神族に迎へられ

夢路を辿る心地するかも

龍神の王よもろもろ族たち

われは今日より國土の君ぞや

親を捨て戀を捨てたるわれにして

如何でひるまむ此島國に

わが言葉諾ふ力なかりせば

われは黄泉よみぢに旅たびだちなさむ
賤いやしけれど國くにの御祖みおやの御子みこなるぞ
汝なれ龍神たつがみを如何いかで恐れむ
〆

龍神たつがみの王わうは、麗子うららかの直立ちよくりつせる前まへに跪ひざまづきて、

有あり難がたしうらの君きみの御言明みことり

幾代いくよ經ふるとも違たがはざるべし

あさましき姿すがたを持もてる龍神たつがみの

救すくひの神かみは天降あもりましけり

百年ももとせの願叶ねがひかなひてわれは今いま

救すくひの神かみにあひにけるかも

今いままでは湖うみの惡魔あくまと國津神くにつかみに

貶さげすまれつつ禍わざはひなしけり

今日けふよりは本津心もとつこころに改あらためて

天地てんちの神業みわざに仕つかへまつらむ

伊吹山いぶきやまに續つづく龍宮りうぐう島しまヶ根がねは

われらが永久とほの住處すみかなるぞや

汝なが君きみは今日けふより龍宮りうぐうの弟おと姫ひめと

あらはれましてわれらまもを守まもらせ

龍宮りうぐうの弟おと姫ひめこれかぎにある限かぎり

此この島しまヶ根がねは安やすけかるべし

麗子うららかは歌うたふ。

□ 大空おほぞらは高たかく涯はてなし湖底うなぞこは

深ふかく廣ひろしも神かみの御み稜い威づに

もろもろの魚族うろくづ残のこらずわが徳とくに

まつろひ來れ安く守らむ

國津神の御子と生れて此島の

君となりしは神の心か

此島に見る月光も水上山に

見るも等しき光ならずや

月も日も隈なく照らせ龍宮の

島根の君はここにありけり

夜されば御空に月は輝きて

此の島ヶ根を安く照らさむ

朝されば天津日光は煌々と

湖の底ひも明し給はれ

月も冴えよ星も瞬け湖底の

眞砂も照れよ魚族も生きよ

みぐるしき龍神族の身體を

百年ももとせののち後にひと人となさばや

われは今いま龍神たつがみの君きみと嫁とつぎつつ

全まつたき御子みこを生うまむと思おもふ

此この島しまにわれ天あも降りてゆ木きも草くさも

俄にはかに光ひかり増ましにけらしな

かかる所ところへ、遙はるか向むかふの方ほうより龍神たつがみたちは、金きん、銀ぎん、瑪瑙めなう、瑠璃るり、碑しやこ、珊瑚さんご、
水晶すゐしやうとう等とうにて飾かざりたてたる神輿みこしを擔かつぎ來きたり、弟おと姫ひめの立たたせる前まへにどつかとおろし平へい
伏ふくする。

龍神たつがみの王わうは此この輿こしを指ゆびさし弟おと姫ひめに向むかひ、

いざ御お駕か籠ご召めしませ百年ももとせ千ち年とせ經へて

つくりし輿こしよ君きみのみために

一ひと度たびも用もちひし事ことのなき神輿みこし

君きみに捧ささげむわれの眞心まごころ

百年ももとせも千年ちとせも心用こころもちひつつ

所在あらゆるたから寶たからにつくりし輿こしはや

此輿このこしは君きみならずして地ちの上うへに

召めすべき神かみはあらしと思おもふ

麗子うららかは意外いぐわいの意外いぐわいに、驚異きやういの眼まなこをみはりながら、

思おもひきやかかると島根しまねにかくの如ごと

うるはしき寶たからの輿こしのありとは

龍神たつがみの心こころをこめし輿こしなれば

われもいなまじ乗のりてや進すすまむ

龍神たつがみの王わうは大おほいに喜よろこび歌うたふ。

有難し弟姫神の御言明

聞くは吾身の生命なりけり

生命にもかへて作りし此神輿

早く召しませ弟姫の神

百神もさぞ喜ばむ百千年の

心づくしも今報はれて

ここに麗子姫は、夢に夢見る心地して、神輿の鐵門を開き、さつと立ち入り、直立不動の姿勢をとれども、さりとして頭の天井につかふる憂ひもなく、最も高く廣き神輿なりければ、長柄の棒を擔ぐ龍神族は、幾百人とも數へ切れぬ多人數なりける。

龍神の王は神輿の前に立ち、幣帛を振りながら先頭をなし、遙か彼方の御殿をさして進み行く。

龍神等は、「ウオーウオー」と一齊に聲を揃へ、天地を揺がさむばかりの勢に

て、肅々と行列正しく前進する。

行くこと約二十町ばかり、ここに七寶を以て飾られたる大樓門が巍然として建つて居る。白衣をつけし龍神たちは、左右に鐵門をぱつと開いた。神輿は肅々として門内に潛り入る。迦陵頻伽の聲、彼方此方の木々の梢ゆ傳はり來り、その莊嚴さ言語のつくすべきにあらず、神輿は大龍殿の玄關に恭しくおろされた。

龍神の王は歌ふ。

「これこそはわが住む館よとこたちよ

いざ進みませ奥の殿まで

百年の匠になりし大殿は

汝が出でまし待ちて居たるも

漸くに建ち上りたる大殿よ

先づ汝が命住みて治めよ」

麗子は神輿の戸を開き、清楚たる姿にて、悠々清庭に立ち出で、龍神の王のしりへについて奥殿深く進み入る。

これより麗子は、龍宮の弟姫と稱へられ、龍神の王に大龍身彦の命と名を與へ、此島の司として輝き渡る事となりける。

麗子は思はず知らず龍神に

招かれ島の司となりける

此島に跡をたれつつ龍宮の

弟姫神と仰がれにける

此神のいさをしなくば海中の

魚族永久に榮えざるべし。

(昭和九・七・一六 舊六・五 於關東別院南風閣 白石惠子謹録)

第四章 救ひの船（一九八五）

艶男は月下の草の根に、麗子の最早靈身となりて現世の人にあらざることを知り、戀しさのあまり嘆き悲しみながら、麗子の後を追はむものと、玉耶湖の岸邊に辿り着き、

いざさらば湖の底ひもおそれなく

吾はゆかなむ妹がみもとに

世に生きて甲斐なき身なり麗子の

戀しき妹に別れたる今日を

と言ひながら、月の流るる湖面に向つて、ざんぶとばかり身を投げ、あと白波と消え失せにける。かかる所へ、白髪異様の老人一艘の小船を漕ぎながら、釣竿を垂れて居たが、艶男の飛び込みし音にあと振り返り、水面を月かげに透し眺めつ

つ、

「あ不思議今聞えたる水音は

魚族ならで人の音かも

何人か知らねど救ひ助くべし

わが身の力のあらむかぎりは

天清く水また清きこの湖に

飛び込む者は何人なるらむ」

と言ひながら暫し考へ込んでゐる。遙か先方に黒い影が「ばかり」と浮いた。老人は手早く小舟を漕ぎ寄せ、黒き影に手を差し延べ船中に救ひあげた。よくよく見れば國津神の子艶男である。老人は水を吐かせ、人工呼吸を施し、漸くにして蘇生せしめた。

君こそは國の御祖の御倅

艶男の君におはしまさずや

吾こそはいやしき漁師の身なれども

汝が兩親に仕へたるもの

何事のおはしますかは知らねども

生命捨つるは淺ましからずや

天地に生命を保つ幸を

君は知らずや悟らざるにや

生命より尊きものは世の中に

あらざるものを輕んじ給ふな

死はやすし生くるはかたし玉の緒の

生命かるがる捨てさせ給ふな

斯く歌ひて呼び生けたるにぞ、
艶男は、
漸く正氣に復し、

𠄎 訝いぶかしや生命いのち死しせしと思おもひしに

吾われ船中せんちゆうに生いきてありけり

汝なが君きみの救すくひ給たまひし吾われながら

生命いのち捨すつるを許ゆるさせ給たまへ

戀こひしかる人ひとに別わかれて世よの中なかに

生いくべき生命いのちと吾われは思おもはじ

戀こひゆゑに捨すつる生命いのちは惜をしからずと

吾われ湖うみにとび入いりにけり

汝なれこそは舟人ふなびとならめ何故なにゆゑに

吾われを救すくひしかうらめしみ思おもふ

翁おきなは儼然げんぜんとして、

𠄎 吾われこそは湖うみの翁おきなよ水火土しほつちの

神かみとあらはれこの湖うみ守まもれる

山やま神かみ彦ひこ、川かは神かみ姫ひめに仕つかへたる

吾われは水し火ほ土つち湖うみ守まもる神かみ

玉たまの緒をの生いの命のちを捨すてて何なにかせむ

再ふたび生いきて國くにをまもらせ

艶あで男やかはいぶかしげに、

おもひきや汝なれは水し火ほ土つち湖うみの神かみか

吾われはづかしく生いきたくもなし

さりながら汝なれに救すくはれ今いまここに

生いの命のち保たもつは幸さちなるべきやは

水し火ほ土つちの神かみはににこにこしながら、

玉たまの緒をの生命いのちを捨すつる愚おろかさを

君きみは知しらずや神かみの生命いのちぞ

主スの神かみの水い火きになりたる玉たまの緒をの

生命いのち捨すつるは重おもき罪つみぞや

罪つみを悔くい心こころあらため戀こひ心こころ

この湖みづうみに洗あらはせ給たまへ

縁えんあらばまた會あふことのあるべきを

心こころみじかき君きみにもあるかな

艶あでやか男おとこは翻ほん然ぜんとして、

ありがたし水火しほつち土神つちがみの御教みをしへに

わが魂たましひは蘇よみがへりぬる

麗子うららかの後あとを慕したひて吾われは今いま

この湖に生命すてたり
愚しき吾心よと今さらに

君の教に悔い心わく

仰ぎ見れば御空の月はにこやかに

ほほ笑ませつつ吾をいましむ

水底にうつらふ月もわがおもてを

照らしていましめ給ふが見ゆ

吹く風もいとやはらかに吾面

なでつつ心なぐさめ通ふ

玉の緒の生命惜しまぬものあらし

湖の底ひの魚族までも

戀ゆゑに捨てし生命とわが思へば

君の面みるさへ心恥かしも

愚なるわが身を照らす月光に

天地あめつちせまく恥はづかしみのわく
さりながら麗子うららかの姫ひめは曲神まがかみに
さらはれ生命いのち失せうせにけらしな
』

水火土しほつちの神かみはにこにこしながら、

㊦ 麗子うららかの姫ひめは生命いのちを救すくはれて

龍たつの都みやこの司つかさとますぞや

今いまよりは汝なれが命みことをみちびきて

龍たつの都みやこに送り奉まつらむ

龍神たつがみのあまた住すまへる龍宮りゅうぐうの

島根しまねは遠とほしいそがせ給たまふな
』

艶男あでやかは歌うたふ。

ㄣ

月は皎々御空を渡る

吾は艶男湖原渡る

空に星かげまたたく見れば

金砂銀砂を敷きつめし

神の御庭にさも似たり

湖の底ひを眺むれば

黄金白銀きらきらと

月の光に冴えながら

天國浄土の光景を

今日のあたり照らすなり

ああたのもしやたのもしや

水火土神に送られて

果しもしらぬ湖原の

中にただよふ龍宮島

麗子姫の鎮まれる

龍の宮居に進むかと

思へば嬉しおもしろし

月も流轉の影なれや

何を嘆かむ來し方の

夢をさまして吾は今

蘇りつつ湖原を

一瀉千里に進むべし

御空は清し月清し

星の光はきらめきて

わが行く舟を安全に

彼方の岸に送るなり

ああ惟神々々

父と母とはさぞやさぞ

二人ふたりの行方ゆくへを尋ねたづつつ

心こころを千々ちぢに碎くだかせて

嘆なげかせ給たまふことぞかし

ああかむながらかむながら惟神かむながらかむながら々々

神かみの御幸みさちのかげ清きよく

わが父母ちちははを永久とこしへに

安やすく守まもらせ給たまへかし

この世よになしと思おもひたる

麗子うららかひめ姫ひめは龍宮りゅうぐうの

島しまの司つかさと聞きくからは

勇氣ゆうき日頃ひごろにいや増まして

希望のぞみに満みつるわが心こころ

ああいさ勇いさましや勇いさましや

いよいようちう宇宙うちうはよみがへり

沈みし天地はぼつかりと
わが目の前に浮き出で
永久の生命を歌ふなり

おもひきや麗子姫は死なずして

龍の宮居にいますとぞ聞く

吾も亦一度生命救はれて

これの湖水を清渡りゆく

水火土の神のまさずば吾生命

絶えてこの世にあらざらましを

天地の神の恵みに抱かれて

吾は生命を捨てずありけり

風清きこの湖原に棹さして

行くも樂しき龍宮の旅
珍しき龍宮島に渡りゆく
吾は心も若やぎにけり
果しなき思ひ抱きてはてしなき
湖原渡る吾にあらずや

水火土の神は艦を漕ぎながら、

夜は更けて

吹き來る風もさやさやと

北より南に渡るなり

龍宮の島は遠けれど

この北風に帆を上げて

進めばあまり遠からじ

御空みそらの月つきはいや冴さえて

湖うみの底そこまで透すきとほり

魚族うろくづをどるさままでも

わが目めにありありうつつるなり

清きよき眞砂まさごの上うへを行ゆく

この玉舟たまふねは龍宮りうぐうの

神かみのつくりし御幸みさちぞや

ああ惟神かむながらかむながら々々

湖原うなばら守まもる吾われにして

今けふ日のよき日ひのよき時ときに

艶男あでやかの君きみを守まもりつつ

渡わたるも嬉うれし火水しほ土ちの

神かみの功いさをは今けふ日ふかぎり

萬代よろづよまでも輝かがやかむ〆

斯く歌ひながら力限りに漕ぎ出す。漸くにして龍宮の第一門に着く。大龍身彦の命は艶男の尋ね來ることを前知し、數多の從臣を第一門に遣はし、艶男の上陸を「ウローウロー」と歌ひながら歡迎の意を表し待ち居たり。

艶男は水火土の神に守られて

これの島根に渡り來にけり

水底に身を投げ捨てし艶男は

水火土神に助けられたり

水火土の神のいさをに守られて

再び麗子の妹に會ふらむ

兄と言ひ妹と名告りつ一度も

嫁ぎの業はなさざりにけり

戀ひ戀はれ互に生命をあづけたる

二人の逢ふ瀬ははなやかなるらむ。

(昭和九・七・一六 舊六・五 於關東別院南風閣 内崎照代謹録)

第五章 湖畔の遊び〔一九八六〕

四季共に花咲き匂ふ龍宮は

天津御國の姿なるかも

草も木も春の光をあびながら

この島國に永久に榮ゆる

常夏の龍宮の島は木の實さへ

ゆたかなりけり到るところに

山も川も清く清しく龍神の

心は見かけによらずやさしき

もろもろの魚族等はこの島に

いより集ひて生命榮ゆる

八千尋の底までうつる龍宮の

大龍殿のかげは清しき

大龍身彦に昔ゆ仕へたる

春夏秋冬四柱神あり

一人は春木彦と言ひ一人は

夏川彦と稱へ來にけり

又一人秋水彦に冬風彦

以上四人は御供神なり。

と、大龍身彦の命は弟姫神を伴ひ、四柱の重臣を従へ、伊吹山に花の眞盛りを見む
と、辨當をこしらへ、數多の龍神等に前後左右を守らせ、一日の遊覽を試みた。

伊吹山の中腹には稍大いなる湖水あり。日月星辰をうつして永久に鏡の如く光

りゐる、この湖水を鏡の湖と稱ふ。

大龍身彦の命は湖の邊に狹筵を敷き、果の實の酒等を汲み交しながら、

伊吹山峰よりおつる谷水の

清く流れて鏡湖となりぬ

この湖は弟姫神の御心か

清くさやけく永久に濁らず

山水をここに集めて湖となし

數多のやまめを生かし育てつ

手を拍てば競ひより來る山の魚の

やさしき姿君に見せばや

弟姫神は微笑みながら、

この國に吾渡り來て眼にふるる

もののごとごめづらしきかも

手を拍てばより來る魚のやさしさを

吾龍宮の姿とぞ見る

湖水に二人のかけをうつしつ

誓ひ奉らむ永久の縁を

今は世になき吾と思ひきや

かかる目出度き山に遊ぶも

女郎花風にゆられて咲き匂ふ

花の姿のやさしきろかも

紫に匂ふ桔梗の芳しさ

千代にしをるな吾飽くまでも

藤の花所狭きまで咲き匂ふ

この湖の邊のかけの清しさ

水底みなそこに咲さけるが如ごとくうつろへる

藤波ふぢなみの花はなは殊ことにめでたし
㊦

大龍身彦おほたつみひこの命みことは歌うたふ。

㊦ 遠とほき神代かみよの昔むかしより

主スの大神おほかみの御鼻おんはなと

つたはり來きたる伊吹山いぶきやま

生おふる草木くさきはことごとに

人ひとの病やまひをいやすてふ

薬くすりばかりと聞きくからは

これの尾をの上へゆ落おちたぎつ

谷たにの清しみづ水を集あつめたる

鏡かがみの湖いけの水底みそこまで

その一滴も薬とや
薬の水を掌に掬む
千代も八千代も玉の緒の
生命保ちて不老不死
常世の春を樂しまむ
この水變じて酒となり
薬となりて神人の
心を照しなくさめつ
げにも名におふ龍宮の
貴の聖地とひびくらむ
國津御神の御種を
降し給ひし主の神の
深き恵は八千尋の
鏡湖の底も曇るべきや

高き恵は大空の

雲井の外もしかざらめ

あな面白やあなさやけ

天の岩戸の開け口

龍宮の島は今日よりは

地上天国そのままに

人の生命も延ぶらむ

祝へよ祝へ百神よ

踊れよ踊れいさましく

大地の底のぬけるまで

この歌に警護の龍神等は鏡の湖を取り巻きて、種々の樂を奏でつつ右往左往に舞ひ狂ふ。その状態は、百千萬の胡蝶の一時に狂ふが如く、爛漫たる櫻花の春風に吹き散る如き有様なりける。

春木彦は汀邊に立ち、湖面を眺めて聲高らかに歌ふ。

有難し弟姫神の現れまして

吾等が生命守り給はむ

春の陽の光りをあびて龍神は

永久に花咲く御代に生きなむ

伊吹山春の木の葉は芽ぐみたり

神の恵の一片として

爛漫と咲き亂れたる山櫻

吾眼新しくよみがへらすも

春夏のけぢめも知らに咲き匂ふ

百の花香の匂ひめでたし

春の花秋の花香も一時に

御代を祝ひて咲くはめでたき

夏川彦は歌ふ。

☐ 吾も亦汀邊に立ちても申す

龍宮島の幸を祝ひて

葭原の國土より天降る姫神の

姿は世にも類なきかな

細女に見合ひましたる吾君の

幸とこしへにあれと祈るも

麗子姫は龍宮城の弟姫と

あらためまして吾等を惠ます

弟姫の神の天降りしなかりせば

吾等が子孫は永久に浮ばじ

あさましき姿を持てる龍神の

眼にめづらしき弟姫の神よ

夏川も水瀬涸れずに滔々と

鏡の湖に注ぐうれしさ

水清き鏡の湖の御姿は

弟姫神の姿なるかも

月も日も波間に浮ぶ鏡湖の

晝夜の眺めは世にもまれなる

魚族は君の出でまし歡ぎつつ

水面にあぎとふ百千のかげ

秋水彦は歌ふ。

打寄する鏡の湖の小波は

吾龍體を清く洗へり

鱗身の間に棲める水蟲の

かげはひそみて快き今日こころよ

今日けふよりは吾等われらが一族いちぞくことごとく

三寒三熱さんかんさんねつの苦くをのがるべし

三千年みちとせのなやみにたへて人ひととなり

この世よに生いくと思おもへば尊たふとし

三千年みちとせの月日つきひをちぢめて人ひとの身みを

保たもつ吾等われらは弟姫おとひめの幸さち

時ときを経て吾龍體わがりうたいはなめらかに

人心地ひとごころちすも樂たのもしの世よや

弟姫神おとひめがみの宣のらす祝詞のりとの言靈ことたまに

吾身體わがからだは新あらたまりゆくも

にぎりなき秋あきの水みづさへ魚族うろくづは

あまたの蟲むしになやまされたり

鱗肌うろこはだの間にひそむ蛆蟲うじむしの

かげはつぎつぎ消え失せにけり
萬里の海の中に浮べる葭原の
國土にもかかるなやみありしか
玉耶湖の廣きが中に龍宮の
島は愛しき島なりにけり
罪深きにごれる玉の集まりを
龍の島根と名づけ來にけむ
何故かこの島ヶ根に住む人は
人面龍身はかなかりけり
天の時今や來りて水上山の
麗子姫の幸に會ふかな

冬風彦は歌ふ。

伊吹山峰より風す寒風に

冬さり來れば塞す湖

冬されば湖の魚族ことごとく

水底にひそみて世を嘆くなり

主の神の恵いよいよ現れて

弟姫神は天降りましける

弟姫の神の言靈幸はひて

冬も湖凍らざるべし

草も木も冬さり來れば萎るるを

かなしく思ふ吾なりにけり

今日よりはこの島ヶ根に冬もなく

常春島となりて榮えむ

吾君の御供に仕へ鏡湖の

いそ邊に宴の席樂しき

百神ももがみは君きみの出いでましよろこびて

右往うわう左往さわうに踊をどり狂くるへり

あなさやけあなおもしろや龍宮りゅうぐうの

島根しまねは花はなにうづもれにけり

山青やまあをく谷水たにみづ清きよく湖いけの面もは

月日つきひ浮うかべて天國みくにただよふ

大龍身彦おほたつみひこの命みことは歌うたふ。

仰あふぎ見みれば伊吹いぶきの尾根をねに白雲しらくもの

風かぜにゆられて安やすく遊あそべる

尾をの上へには白雲しらくも遊あそび中原なかはらの

湖いけのほとりに吾われは遊あそぶも

白雲しらくものほころびすかして日ひの神かみは

清き光りを照させ給へり

白雲をよくよく見ればその中心に

紫の雲かくるへる見ゆ

紫の雲を開きて天津日は

この湖の面を照させ給へり

頂に曲津神棲むとつたへたる

伊吹の山も今日は清しき

天も地も一度に開けし心地して

吾弟姫の湖の邊に遊ぶ

麗子の弟姫は聲さはやかに歌ふ。

千早振るとほき神代の昔より

ためしも知らぬ龍宮の

龍たつの都みやこに渡わたり來きて

怪あやしき人ひとのかげを見みつ

心こころいぶかる折をりもあれ

金銀珠玉きんぎんしゆぎよくをちりばめし

眼輝まなかがやく高興たかごしに

吾われはかつがれすくすくと

鐵門かなどをくぐり又また一つ

高たかき鐵門かなどをくぐりぬけ

いや高殿たかどのに送おくられて

大龍身彦おほたつみひこと諸共もるともに

龍たつの島根しまねを護まもるべく

朝あした夕ゆふをつつしみて

神かみの依よさしの神言かみことを

聲こゑ高たからかに宣のりつれば

不思議なるかな島ヶ根に

生ふる草木は色深み

百花千花一時に

艶を競ひて咲き亂れ

四方に芳香薫じつつ

迦陵頻伽は言ふも更

百鳥千鳥の鳴く聲も

いやさやさやにひびくなり

吹き来る風もやはらかに

山の尾の上や裳裾まで

恵の露のうるほひつ

よみがへりたる目出度さよ

吾は三年をこの島に

生き榮えつつ島人に

永久とほの生命いのちと御榮みさかえを

神かみに誓ちかひて與あたふべし

勇いさめよ勇いさめ百もも神がみよ

よろこべ踊をどれ歌うたへ舞まへ

天あまの岩いはと戸ひらは開ひらけたり

闇やみの鐵かなど門あは開あけ放はなれ

御空みそらの月つき日は明あきらけく

この國くに原はらを照てらすなり

晝ちうや夜の區くべつ別べつなきまでに

月つき日ひこもごも照てらひまし

龍たつがみ神たち等らは言いふも更さら

湖うみの魚うろくづ族やま山のや野のの

草くさ木きの末すゑに至いたるまで

惠めぐみの露つゆの輝かがやきて

世はとこしへに榮ゆらむ

ああ惟神々々

神の依さしの生言靈を

朝夕宣らへ龍神等よ

と歌ひ給へば、尾の上に遊びし白雲はさつと左右に開き、次第々に影失せて日
月一度に並び輝き、忽ち第一天國の光景を現出したるこそ尊けれ。

ああ惟神御靈幸倍坐世。

（昭和九・七・一六 舊六・五 於關東別院南風閣 谷前清子謹録）

第六章 再會（一九八七）

水火土の神に送られて龍宮島に上陸したる艶男は、鐵門の前に立ち、

☐ われこそは國津御祖の神の子よ
早く鐵門を開けさせ給へ
麗子のあとを尋ねて今此處に
來りしものよ鐵門早や開け

門の中より、女神の聲として、

☐ いづ方の神か知らねど此の鐵門
主の許しなれば開かじ
今しばし待たせ給はれ弟姫の
神の御前に伺ひ來らむ

水火土の神は聲巖かに門外に立ち、

☞ われこそは水火土の神よ龍神の

王に知らせよ人送り來つと

龍宮の島を開くと大丈夫を

われは導き此處に來れり

女神は急ぎ、やや長き城内を馳せながら、大龍殿の奥の間さして參入し、弟姫
神の居間に拍手しながら、聲も靜かに歌もて奏上する。

☞ 何神かわれは知らねど水火土の

神に送られ門に立たせり

御名を問へばわれは艶男と宣らしけり

姫に會はむと待たせ給へる

汀邊の鐵門を開きまつらむや

御言聞かむとわれは詣でし

弟^{おとひめ}姫^の神^{かみ}は、戀^{こひ}しさと嬉^{うれ}しさと恥^{はづ}かしさが一^{いち}度^どになり、顔^{かほ}の色^{いろ}までサツと變^かへな
がら、何^{なに}喰^くはぬ顔^{かほ}にて、

☐ とにもあれかくにもあれやいち早^{はや}く

鐵^{かな}門^どを開^{ひら}き迎^{むか}へまつれよ

大^{おほ}龍^{たつみ}身^{ひこ}彦^はは生^{あいに}憎^く伊^い吹^{ぶき}の高^{たか}山^{やま}に

籠^{こも}らひ給^{たま}へばゆきとどかねど

ねもごろに待^{もて}遇^なして來^こよ其^{その}人^{ひと}は

水^{みな}上^{かみ}の山^{やま}の御^み祖^{おや}の神^{かみ}の子^こよ

女神^{めがみ}は、

☐ 畏^{かしこ}しや君^{きみ}の御^み言^{こと}に從^{したが}ひて

われ速^{すみやか}に迎^{むか}へ來^{きた}らむ

御庭おんにははいと廣ひろければ急いそぐとも

半時はんときばかりは待またさせ給たまはれ〇

の鐵門かなどに近ちかづき來きたり、中なかより門かぬきを取とり外はづし、滿面まんめんに笑ゑみを湛たたへて、
かく歌うたひ終をはり、御前みまへを罷まかり下さがり、人面龍身にんめんりゅうしんの體からだを前ぜん後ご左さい右いうにゆすりながら、汀みぎは

御祖神みおやがみの御子みこにおはすと宣のりしより

弟姫おとひめの神かみは喜よろこびましける

いざさらばわれは御供みともに仕つかへつつ

君きみを御前みまへに送おくりまつらむ

水火土しほつちの神かみも諸もろとも共とも進すすみませ

弟姫神おとひめがみは待またせ給たまへり〇

水火土しほつちの神かみは、

□ いざさらば姫の言葉に従ひて

艶男の君進みませ

われも亦御後に従ひ龍神の

司の館に進みゆかなむ

艶男は道々小聲にて歌ふ。

□ ああいぶかしやいぶかしや

大野ヶ原の草の根に

魂となりて言擧げし

麗子姫は今此處に

生命保ちてみまかりし

われと再び會はむとは

遠き神代の昔より

例ためしもあらぬ喜よろこびぞ

ああ夢ゆめなるや夢ゆめなるや

夢ゆめか現うつしかまぼろしか

如何いかに考かんがへすませども

あの世よの人ひととなり果はてて

われに言こととひすぐさまに

火團くわだんとなりて湖うみの上へを

たばしりゆきし麗うららかに子こに

又またも此この世よに會あはむとは

思おもひもよらぬ夢ゆめなれや

水しほ火つち土ちの神かみの御教みをしへに

生いきておはすと思おもへども

なほ解ときかぬる今けふ日の謎なぞ

さはさりながらわれとても

一度は此世を去りしもの

神の情に助けられ

再びこの世に蘇り

生きたるためしもあるものを

麗子姫も其の如く

何れの神にか救はれて

この龍島に助けられ

輝き給ふものならむ

ああ訝しや訝しや

夢の浮世と聞くからは

夢路をたどる心地して

夢の國なる夢の姫に

會はむ今日こそ楽しけれ

ああ惟神々々

御靈幸倍坐世^{みたまさちはへましませ}」

ここに第二の樓門を潛り、金砂銀砂の敷きつめられし庭の眞中を奥殿さして進み入る。

奥殿の入口には、二人の侍女白き上衣に紅き袴を穿ち、少しく龍體の尻尾を現しながら、慇懃に迎へ、

海原をはるばる越えて天降りましし

君のよそほひ尊きろかも

この島は弟姫神の出でましに

總てのものは蘇りける

水火土の神と諸共出でましし

御祖の神の御子を拜む」

艶男あでやかはこれに應こたへて、

☞ 海原うなばらを水火土しほつちの神かみに救すくはれて

珍うづの島根しまねに渡わたり來きつるも

金砂銀砂きんしゃぎんしゃきらめく庭にはをふみながら

心清こころすがしく蘇よみがへりぬる

弟姫おとひめの神かみと申まうすは水上山みなかみやまの

麗子姫うららかひめにおはしまさずや
『

侍女神じぢよしんはこれに應こたへて、

☞ 汝なが君きみの言葉ことばは正ただし弟姫おとひめは

麗子姫うららかひめと申まうしけるとか

麗子姫うららかひめは君きみのいでまし喜よろこびて

待たせ給へりいざ案内せむ

かく歌ひながら、水火土の神諸共に奥殿に導きゆく。

弟姫の神は兄の訪ひ來りしを喜び給へども、すでに大龍身彦の命の妻となり、此國の司と仰がるる身の上なれば、如何に戀しき兄なればとて、昔の如く安々と語り給ふわけにもゆかず、又侍女從神たちにも大いに憚り給ひつつ、胸とどろかせ給ひける。

兄妹は互に戀を語り合ひ、生命までもと誓ひし仲なれども、まだ父母の許しなければ一度の交りもなく、清淨潔白の間柄なれば、艶男も別に大龍身彦の命の妻となりしを恨む心もなく、釋然として簾の外より透し見ながら歌ふ。

汝が身のかくれ給ひしたまゆらに

心いらちてわれはさわぎぬ

叢に潜める君の御魂と

しばしのうちは語らひしはや

火の玉となりて走れる君があとを

尋ねて吾は此處に來にけり

みまかりしならむと思ひてわれも亦

玉耶湖水に身を投じけり

折もあれ水火土の神に救はれて

再び生命よみがへりける

今の君は妹ならずこの國の

司にまさばためらひ心わく

簾の中より、聲さはやかに弟姫の神は歌ふ。

いとこやの君の御顔すかし見て

わが胸の火は燃えたちけり

しかはあれど互たがひに清きよき仲なかなれば
世よに恥はづるべき事ことはあらまし
水し火ほ土つちの神かみのいませる御おん前まへに
清きよき心こころを互たがひに明あかさむ
□

艶あで男やかは歌うたふ。

□
姫ひめ神がみの御み言ことかしこし今いまよりは

龍たつの島しま根ねの君きみと仰あふがむ

村むら肝きもの心こころと心こころ清きよければ

われは歎なげかじ生いのち命ち死しすとも

この島しまに渡わたり給たまひて閒まもあらず

司つかさとなりし君きみぞ雄を々をしき

この状さまをわが父ちちは母ははに傳つたへなば

喜び給はむよみがへる如

水火土の神、

女神の清き心の雄々しさを

龍身の彦に詳細に語らむ

水火土の神は二人のあかしせむ

清き心の兄妹なるを

斯かるところへ、春木彦、夏川彦を先頭に、大龍身彦の命は秋水彦、冬風彦を後に従へ、悠々として歸らせ給ひ、この場の光景を見て、さも嬉しげに二人に目禮しながら、

汝こそは水火土の神一柱は

何れの神かよくも來ませる

龍宮の島根は漸く開けたり

弟姫神の貴の光りに

弟姫の神に尊を聞き居たる

艶男彦は君にまさずや

艶男は歌もて應ふ。

われこそは麗子姫の兄にして

艶男といふ國津神なり

ゆくりなく麗子姫の後追ひて

この島ヶ根に渡り來つるも

弟姫は汝が命の妻となりて

仕へまつると聞くぞ嬉しき

大龍身彦の命は儼然として應ふ。

☐ 親しかる兄妹二人この島に

天降りましたる事のめでたき
いざさらば奥に進ませ給へかし

うましきものを品々進めむ

水火土の神の功績伏し拜み

嬉し涙にわれはくれつる

斯かるところへ、弟姫神は簾をさつと上げ、
大龍身彦の命の前に慇懃に目禮し
ながら、

☐ わが君は歸りましけりわが君は
心ほがらに兄に語らすも

わが君きみの御心みこころ聞ききて今更いまさらに
嬉うれし涙なみだにくれにけらしな
いざさらば君きみに從したがひ大奥おほおくに
進すすみゆかなむ艶男あでやかの君きみと
』

艶男あでやかは直ただちに歌うたもて應こたふ。

御後みしりへに從したがひ行ゆかむ大奥おほおくに
先さきだちませよ弟姫おとひめの神かみ
わが前まへに進すすみまませ水火しほつち土ちの
神かみは生命いのちのみおやなりせば
』

ここに、二柱ふたはしらは弟姫神おとひめがみのしりへに從したがひ、
大龍身彦おほたつみひこの命みことと共に廊下らうかの階段かいだんをきざ
みながら、大奥おほおくさして進すすみ入いる。

艶男あでやかは水火土しほつちの神かみに送おくられて

汀みきはの鐵門かなどにつきにけるかも

姫神ひめがみに導みちびかれつつ又また鐵門かなど

潛くぐりて龍宮奧殿りうぐうおくでんに入る

金銀きんぎんの砂すなを素足すあしにふみながら

弟姫おとひめの居間ゐまにとほされにける

弟姫おとひめの神かみと言問こととふ間まもあらず

大龍身彦おほたつみひこは歸かへり來きたれり

大龍身彦おほたつみひこは二人ふたりの來訪らいはうを

いたく喜よろこび奥おくに案内あないす

弟姫おとひめの神かみのみあとに従したがひて

水火土しほつち、艶男あでやかは大奥おほおくに入る。

(昭和九・七・一六 舊六・五 於關東別院南風閣 林彌生謹録)

第二篇 龍宮風景

第七章 相聞（一）（一九八八）

萬里の海原に浮びたる 葭原の國土の眞秀良場なる

玉耶湖水の中心に 御空をついてそばだてる

大地の鼻ともたとふべき 伊吹の山の後方は

高光山に相次ぐの名山なり 此山の南端に突出せる

萬木萬草豊なる 珊瑚礁を以て凝まりし

風光明媚の島ヶ根を 龍宮島と稱ふなり

此島ヶ根はまだ新しく 人面龍身の龍族數多住居して

神仙郷の思ひあり 稍進歩せる龍神の

頭部と兩腕は 漸く國津神の姿に似たれども
 其他は未だ完全なる 人體ならず肩部より下は
 残らず鱗を以て人體を包まれたる 異様の獸族なり
 かかる新しき島ヶ根に 捕はれ來りし麗子姫
 容姿は艶麗にして天人の如く 龍神族は忽ち神と尊敬し
 龍神の王たる大龍身彦も 麗子姫を妻としながら
 神の王と仰ぎ 日に夜に真心の限りをつくして
 仕へまつりける かかるところへ麗子姫の兄なる
 艶男の來りしより 此島ヶ根の若き女たちは
 早天の驟雨を得たるが如く 隨喜渴仰して一目なりとも
 天人の顔を拜まむと 先を爭ひ集り來る
 龍神の中にも 眉目形うるはしき乙女は
 大龍身彦の神殿に 朝夕仕へ侍りて
 艶男の端麗なる容姿を 目引き袖引き眺めつつ

笑みゑみを湛たへ居ゐたりける

侍女神じぢよしんの重おもなる神かみは

桔梗ききやう、山吹やまぶき、女郎花をみなへし

萩はぎに撫子なでしこ、藤袴ふぢばかま

白菊しらぎく、山菊やまぎく、百合ゆりの花はな

椿つばき、櫻さくらに燕子花かきつばた

あやめ、石竹せきちくなどと

華はなやかなる名なの持主もちぬしなりける

これらの女神めがみはいづれも

龍體りうたいなりとはいへ

その容貌ようぼうは端麗たんれいにして

容易よういに犯をかすべからず見みえにける。

山吹やまぶきは恐おそる恐おそる艶男あでやかの側近そばちかく、裊うちかけすがた襠姿たけにて寄より來きたり、心こころの丈たけを歌うたふ。

久方ひさかたの天津國あまつくにより降くだりましたし

神かみにあらずや君きみのよそほひ

われは今伊吹いまいぶきの山やまの山峽やまかひに

雨あめに萎しをるる山吹やまぶきの花はなよ

山吹やまぶきの花はなは咲さけども匂におへども

手折る人なきわれぞ淋しき

君が手に觸れてこぼるる山吹の

露はづかしきおもひなりけり

はてしなきおもひ抱きてわれは今

尊き君の前にはぢらふ

龍神の館に天降りし君こそは

わが身の爲の生命なるかも

玉の緒の生命捨つるも惜しまむじ

君の御手にふるる山吹

山吹の花は情のつゆあびて

ほのかに笑みつ打伏す夏なり

水上の山より下りし君許に

ただ一夜さの露ぞ願はし

汝が君の情のつゆのなかりせば

あれは山吹やまぶき咲くよしもなし

湖うみの面もに姿すがたを寫うつす山吹やまぶきの

花はなの心こころを君きみは知しらずや

七重ななへ八重やへ花はな咲くわが身み山吹やまぶきも

吾きみのすがたに及およばざらめや

時ときじくに七重ななへ八重やへ咲く山吹やまぶきは

龍宮りゅうぐうの島しまの花はなにぞありける

われはまだ年とし若わかけれど君きみおもふ

心こころはあかし山吹やまぶきの花はな

黄こがね金色いろに咲く山吹やまぶきの君許きみがりに

立たちてし見みれば面おもあからむも

山吹やまぶきのあかき心こころをみそなはし

情なさけのつゆを降ふらさせ給たまへ

艶男あでやかはこれに答こたへて、

山吹やまぶきの姫ひめの心こころはさとれども

手折たをる術すべなきわが身みなりけり

人ひとの子この情なさけをさとりわれながら

花はなにかこまれ動くよしなし

百千ももちばな花な匂におふ龍宮りゅうぐうの島しまヶ根がねに

思おもはぬ花はなの色いろを見るみかな

いろいと花はなは匂におへど手折たをるべき

力ちからなき身みをわれ如何いかにせむ

伊吹いぶき山尾やまお根ねにかがよふ月つきかげを

見みれば恥はづかし艶男あでやか曇くもる

村肝むらぎまの心こころ曇くもりてわれは今いま

あやめもわかずなりにけらしな

花はなに酔よひ戀こひに酔よひつつ此この島しまに

さまよふわれの心こころいぶかし

如何いかにして君きみが心こころに叶かなはむと

思おもへど詮せんなし男をの子こ一人ひとりに

よしやよし山吹やまぶきの花はなを手た折をるとも

仇あだ花はななれや實みを結むすばねば

山吹やまぶきはこれに答こたへて、

わがおもふ心こころの丈たけを君きみ許がりに

明あかしまつりし事ことの恥はづかし

兔とにもあれ角かくにもあれや龍宮りゅうぐうの

庭にはに匂におへる花はなを手た折をらせよ

艶男は答ふ。

□ 兔にもあれ角にもあれや今暫し
わが返し事待たせ給はれ□

と言ひつつ、悠然として庭の白砂を踏みながら、曲玉池の木かげに向つて進み行く。

此處には、侍女神の白菊が物憂げに立つて居る。その優姿、海棠の雨に萎れてうつぶせるが如き風情あり。

艶男はこれを見て歌ふ。

□ 曲玉の池の汀に咲く花は

いづれの花か聞かまほしさよ

池の底に清しく寫る御姿は

世にも稀なるよそほひなるかな

白菊は歌ふ。

わが心いづらに行くかしら菊の

水鏡見る朝なりにけり

君こそは天津國人此の島に

天降らす日より打ち仰ぎつつ

仰ぎ見れば月の顔花の色

此島ヶ根に稀なる艷人よ

艷人の上をおもひて朝なさな

われは祈るも曲玉の池に

曲玉の水は底まで澄みきれど

われは曇れり心の水底

いや深ふかきおもひの底そこを打明うちあけて

君きみに見みせたき一ひとつのものあり

白菊しらぎくのかげのうつらふ玉水たまみづを

君きみは汲くまずや掬むすび給たまはずや

賤いやしかる身むくろ體ろをもてど人ひとを戀こふる

清きよき心こころに隔へたてあるべき

島しまヶ根がねに咲さく白菊しらぎくの花はなの露つゆ

掬むすばせ給たまへ一いち夜の枕まくらを

艶あで男やかは歌うたふ。

龍宮りうぐうの島根しまねに計はからず渡わたり來きて

情なさけのつゆの雨あめにあふかな

われこそは水上山みなかみやまの國津御祖くにつみおや

神かみの家いへつ繼つぐ彦ひこぢ遅ちなるぞや
永とこしへ久すに住すむべき島しまにあらざれば
手た折をる術すべさへしら菊ぎくの花はな」

白しら菊ぎくは歌うたふ。

𠄎
恥はづかしきわが身みなるかな汝なが君きみの
袖そでにはぢかれ花はな散ちらむとすも
わが心こころいづらに行ゆきしかしら菊ぎくの
花はなはづかしき朝あさなりにけり
うちつけにわが放はなちたる言こと靈たまは
巖いはにあたりてはね返かへされぬ
朝あさ夕ゆふの乙をとめ女こころ心のかなしさを
汲くまさぬ君きみぞつれなかりけり

いざさらば暫し別れて恥かしの
森の木かげにわれ休らはむ

と歌ひつつ、袖に面を覆ひながら、
て、何處ともなく出で行きにける。
艶男は太き息を洩しながら、

貴の乙女のしをしをと、
小暗き木下闇を潜り

ああわれは迷ひにけりな麗子の
後を慕ひてここに悩めるか

今となり麗子姫の心根を

ひしと悟りて涙ぐましも

龍神の王なれども龍の身に

抱かるる身は淋しかるらむ

麗子の後を尋ねて來しわれは

情なさけの雨あめになやまされける

かくの如戀ごとこひは苦しきものなるか

玉たまの生命いのちの死しなまく思おもふ

死しなまくは思おもへど故郷くにに垂乳根たらちねの

いますゆゑが故こゝろに心こゝろに任まかせず

水しほ火つちの神かみに救すくはれわれは今いま

同おなじなやみに悶もだえぬるかな

龍たつがみ神まなこの眼まなこなければひそやかに

船ふねをかざして歸かへらむものを

村むら肝きもの心こゝろにそぐはぬ龍たつがみ神かみの

乙女をとめの姿すがた見るもいやらし

さりながら其そのおもざしを眺ながむれば

涙なみだぐましき乙女をとめのみなる

乙女をとめ子の清きよきなさけの露つゆあびて

心こころ悲かなしくなりにけらしな

女神めがみのみあまた数す多す住すまへるこの此しま島に

男をの子こ一ひとり人のい如何かにた堪たふべき

一ひとえ枝え折をらばも百も花ば千ち花ば押おしなべて

手た折をらにやならぬは破は目めとなるべし

われいまはひと今ひと一ひとつの生いのち命たも保ちつつ

百もものいのち生いのち命たもをい如か何かにさ支さへむ

斯かくうた歌をりふをり折をりもあれ、ぜん前ぼう方の森しん林りんよりしち七にん人の乙をとめ女、白び衣やくのひ直た垂たれに緋ひのなが長は袴かまをう穿がち、

各てんで自すにしやう水すい晶じやうのつ壺ぼをい抱だきながら、ま曲が玉た池まいのみづ水を汲くまむとや、しとしとと入いりき來きたる。

艶あ男ではまた見み付つかつては大たい變へんと、たち忽ち踵きびをかへし、い伊ぶ吹きのや山の中ちう腹ぶくなるか鏡が湖みこの

かたへの樹こ蔭かげをめ目がけ、い急そぎに逃にげて行ゆく。

艶あ男ではこ樹こ蔭かげにい憩こひながら歌うたふ。

□ 漸やうやくにわれは遁のがれて來きたりけり

いざ休やすらはむ桂木かつらぎのかけ

女神めがみのみ數多あまた住すまへる此島このしまに

心こころいぶかしくわれは惱なやむも

今いま暫しばし心安やすらけく保たもてども

やがて襲おそはむ戀こひの嵐あらしは

翼つばさあらば水上みなかみの山やまに夜よるの閒まに

逃にげ歸かへらむと惱なやめるわれかも

麗子うららかの戀こひしき君きみのいます島しまに

翼つばさはがれし裸鳥はだかどりわれは

伊吹山尾根いぶきやまをねを包つつめる白雲しらくもの

晴はるるひまなきわが思おもひかな
□

(昭和九・七・一七 舊六・六 於關東別院南風閣 白石惠子謹録)

第八章 相聞（二）（一九八九）

艶男は女神等の戀の鋭鋒をさけて、鏡の湖畔なる百津桂木の樹蔭に太き息をも
らしつつありしが、忽然として邊の叢よりあらはれたる白衣、紅袴の乙女は、右
手に白萩の花の満開せるを持ち、左手に玉水杯を捧げながら、艶男の側近く進み
寄り、満面笑みを湛へて、玉水杯の水を艶男の前に差し置き、

珍しき艶男の君よ御水召せよ

今日の暑さは咽喉のかわけば

わらはこそは露にうるほふしら萩の

花はづかしき乙女なりけり

そよと吹く風にも靡く白萩の

かよわき姿を愛で給はずや

白萩の花は清しも鏡湖の

底^{そこ}まで透^すける眞^ま清^し水^{みづ}に似^にて
白^{しら}萩^{はぎ}の香^かりを添^そへて玉^{たま}水^も杯^ひに
御^も水^{みづ}奉^{ひた}る今^け日^ふの嬉^{うれ}しさ
眞^ま清^し水^{みづ}を掬^{むす}ばせながら白^{しら}萩^{はぎ}の
花^{はな}の香^かりを愛^めでさせ給^{たま}へ
夏^{なつ}冬^{ふゆ}のけぢめもしらに白^{しら}萩^{はぎ}は
伊^い吹^{ぶき}の山^{やま}に淋^{さび}しく匂^{にお}ふも
□

艶^{あで}男^{やか}はこれに答^{こた}へて、

□
あ^をり^とが^めた^きし乙^こ女^にの君^{きみ}の志^{こころざし}
わ^かれ^ついた^らだ^かか^む桂^{かつら}木^ぎの蔭^{かげ}に
湖^{みづうみ}の水^{みづ}は清^{きよ}しも白^{しら}萩^{はぎ}の
花^{はな}は床^{ゆか}しも乙^を女^{とめ}の姿^{すがた}か

百千ももちばな花さ咲き匂にほへどもわれ吾にして
手た折をらむ力ちからなきぞかなしき
□

白萩しらはぎは歌うたふ。

□ 汝なが心こころいづらにあるかしらはぎ白萩の

花はなはづかしわれき吾にもあるかな

さりながら手た折をらせ給たまへ白萩しらはぎの

花はなにおく露つゆこぼるるまでも

汝なが君きみの情なさけの露つゆにうるほひて

吾われは生いくべき白萩しらはぎの花はなよ

この島しまに百千ももちばな花さ匂にほへども

ただ一本ひともとの白萩しらはぎのわれ

風かぜ吹ふかば露つゆやこぼれむ花はな散ちらむ

早く手折らへ一本の白萩
□

艶男は歌ふ。

□
白萩の花美しと見る吾は

岩の上いへに生おふ無花實いちじゆくなるよ

花はなのなき無花實いちじゆくのかげに繁しげりたる

草花くさばなにして實みのなき吾われなり
□

白萩は又歌ふ。

□
なやましき心こころの丈たけをしら萩はぎの

梢しやうもみゆく汝なれは山風やまかぜ

山風やまかぜは如何いかにはげしく吹ふくとても

木蔭こかげの白萩しらはぎ散ちらむとはせず

わが持もてる白萩しらはぎの花はなに露つゆとめて

心こころのあかしと君きみにまゐらす

よしやよし露つゆの情なさけはあらずとも

君きみのみそばに細ほそく咲さくべし

人ひとの目めを漸やっやくここにしのび草ぐさ

しのびかねたるわが思おもひかな
□

艶あでやか男おとこは白萩しらはぎの情なさけのこもる言葉ことばに、ほつと當惑たうわくしながら、こともなげに鏡かがみの湖面こめん
を眺ながめてゐる。白萩しらはぎは水面すゐめんの小波さざなみを指ゆびさしながら、

みそなはせ鏡かがみの湖うみの小波さざなみの

底そこの心こころは動うごかざるらむ

鏡湖かがみこの底そこひもしらぬわが思おもひ

寫うつして匂におふ白萩しろはぎの花はなよ

八千尋やちひろの底そこひもしらぬ思おもひねを

君きみは知しらずやみそなはずや

君きみのために玉たまの緒をの生命いのち消きゆるとも

悔くいなき吾われと思おぼしめ召めさずや

斯かくならば生命いのち死しすとも動うごかまじ

深ふかき心こころをくみとらすまでは

伊吹山いぶきやま百草ももぐさ千草ちぐさ匂におへども

君きみのよそほひに勝まさる花はななし

玉たまの緒をの生命いのちををかけて戀こひ慕したふ

君きみは情つれなき薊あざみの花はなかも

艶あでやか男おとこは歌うたふ。

『さまざまの汝が言靈に打出され』

吾はいらへの言葉だになし

はるばると波の秀ふみて來ながらに

かかるなやみは思はざりけり

龍宮の島の乙女に圍まれて

吾は行手をふさがれにけり

足引の山より高き父母の恩

おもへば春の心起らじ

伊吹山尾根より吹き來る青嵐を

朝夕あびて戦く吾なり

龍宮の戀の嵐の強ければ

わが身はかなく散らむとするも』

斯く歌ふ折しも、鏡湖の波を左右に分けて、あらはれ來る三柱の女神あり。主

と思しきは前に立ち、おぼ まへ た 稍年若き乙女は後邊に立ち、ややとしわかをとめ うしろへ た 悠々として水面を渡りながら、いっいっ すめめん わた 艶男の憩ふ百津桂木の樹蔭に、あでやか いこ ゆつ かつらぎ こかげ 莞爾として寄り来る。白萩はこれを見るより、くわんじ しろはぎ み 忽ち大地にひれ伏し、「ウオーウオー」と叫びながら恭敬禮拜怠りなく、たちま だいち ふ さいげい たいりなく 頭を大地につけたるまま身動きもせず、かしら だいち みうご うづくまり居る。女神は樹蔭に憩ふ艶男に軽く黙めがみ こかげ いこ あでやか かる もく 禮し、紅の唇を開き、れい くれなぬ くちびる ひら

御祖神の御子あれますと聞きしより
みおやがみ みこ

そこひを分けて吾は來にけり
わ われ き

吾こそは大海津見の神の愛娘
われ おほわたつみ かみ まなむすめ

海津見姫とよばるる神なり
わたつみひめ かみ

龍宮の島根は未だ稚けれど
りうぐう しまね いま わか

汝が力をもちてつくれよ
なれ ちから

この島をつくり固めて御子を生み
しま しま かた みこ う

いや永久に守らせ給へ
とこしへ まも たま

龍宮りうぐうの島根しまねは戀こひの島ケ根しまがねよ

愛あいの花咲はなさく神かむさだめ島しま

姫神ひめがみの數多あまた住すまへるこの島しまに

渡わたりし君きみは助たすけの神かみぞや

人體じんたいをうまらにつばらに備そなへざる

女神めがみを救すくへ神かみのまにまに

天地あめつちの百ももの草木くさきをことごとく

この島しまケ根がねに植うゑ生おはしける

この島しまは海津見わたつみの神かみの眞ま秀ほ良ら場ばよ

われも折をり々り來きたりてあそべる

水清みづきよき鏡かがみの湖いけは海津見わたつみの

神かみの宮居みやゐの入口いりぐちぞかし

ここに來きて弱よわき心こころをもたすまじ

全まき神子みこを生うむべき島根しまねよ

八十姫やそひめの願ねがひことごとときき入いれて

この島しまヶ根がねをにぎはせ給たまへ〆

艶あでやか男おはおそるおそるこれに答こたふ。

如何いかにして百ももの女神めがみにまみえなむ〆

身體からだの弱よわきひとり身み吾われは

ゆくりなくこの島しまヶ根がねに渡わたり來きて

百ももの乙女をとめにおそはれにける

男をの子こ吾われひるまじものとおもへども

ねたみ心こころを如何いかにをさめむ

ねたましき心こころをもつは姫神ひめがみの

常つねと知しる故ゆゑためらひ居をるなり〆

海津見姫の神は淑やかに宣り給ふ。

心弱きことを宣らすな汝は男の子

雄々しく清しくあるべきものを

艶男の名を負ひませる君なれば

ねたみ心におそはるべしやは

この島の女神はのこらず神なれば

ねたむ心は露程もなし

稚き國土をつくり固むる業なれば

ためらふことなく進ませ給へ

艶男はこれに答へて、

姫神の心はよしと思へども

吾には及ばず國津神の身よ

海津見の神は、

日を重ね時をけみして次々に
心雄々しく進ませ給はむ

斯く歌ひながら姫神は静々と二人の侍女と共に、芒の穂の上を軽く渡りながら、
大龍身彦の命の宮殿深く御姿をかくさせ給ひぬ。艶男と白萩は姫神を肅然として
見送り、御影の見えぬ迄伸び上り伸び上り眺めて居たが、ここに艶男は不審の念
にうたれつつ、諸手を組み、太き息をもらし思案にくれてゐる。白萩は白衣の袖
の艶男の息のさはるところまで近寄り來り、露の滴るまなざしを涼しくひらきな
がら、あらゆる媚を呈し、艶男の左手を握らむとせしにぞ、艶男は青天の霹靂の
如く驚き、二三十歩後方に飛び退き、呆然として白萩の面を見つめてゐる。白萩

はかなしき聲をはり上げながら、

『なさけ
情なやわがおもふ君は白萩の

梢をもみゆく嵐なりけり

雨霰嵐は如何に強くとも

たゆまざるべし白萩の吾は

この島に渡り來ませる君なれば

如何でのがさじ彌猛心に

姫神の御言葉汝はきかざるや

たゆまずひるまず手折らせ給へ

いやしかるわが身體におぢおそれ

いなみ給ふか情なき君

身體はよし龍體と生るとも

戀てふ心に變りあるべき』

歌うたふ。

艶男あでやかは決心けつしんの臍ほそを固かため、しばしの虎口ここうを遁のがれむと、腕うでを組くみながら懽然ぶぜんとして

☐ はづかしさ戀こひしさあまりてただ吾われは

手折たをらむ道みちをためらひにけり

さりながらしばしを待またせ給たまへかし

吾われには一ひとつの病やまひありせば

この病癒やまひゆるを待まちて白萩しらはぎの

君きみにまみえむよき日ひあるべし
☐

白萩しらはぎは満面まんめんを輝かがやかしながら素直すなほに歌うたふ。

☐ 村肝むらきまの心こころつくせし甲斐かひありて

艶男あでやかの君きみの心こころうごきぬ

嬉うれしさにわが魂たましひは輝かがやきぬ

幾いくひ日ひまつとも吾われは恨うらまじ

斯かくの如ごとやさしき君きみと知しらずして

なやめ奉まつりし心こころはづかし

いざさらば御みとの殿とのに送おくり奉まつるべし

早はや立たたせませ桂かつらぎ木の蔭かげをら

艶あでやか男おとこの言ことば葉はの風かぜに白しら萩はぎは

心こころ静しずかに打うちなびきたり

村むら肝きもの心こころ満みたねど艶あでやか男おとこは

白しら萩はぎと共ともに御みとの殿とのにかへれり。

(昭和九・七・一七 舊六・六 於關東別院南風閣 内崎照代謹録)

第九章 祝賀の宴（一）（一九九〇）

龍宮島の王者たる大龍身彦の命は、水上山の麓なる國の御祖の神の愛娘、麗子
姫を妃と定め大龍殿に海原國の政を始め給ふに就き、大海津見の神の娘海津見姫
の神は、前代未聞の慶事を祝せむとして鏡の湖の水門を開き入り來り給ふと聞き、
あらゆる從神等は右往左往、欣喜雀躍し、姫神を歡待せむとあらゆる準備に着手
してゐる。大樓門の内外には金砂銀砂を新しく敷き詰め、杉檜の梢を伐り、御通
行の道を青葉にかためて、準備をささおこたりなかりける。
かかる所へ時うつりて、大海津見の神の娘海津見姫の神は、父の御使として現
れ給ひ、歡迎の準備全く調へるに稍驚き給ひつつ、

来て見れば龍の島根は清しけれ

この島人の面かがやける
塵一つかげを止めずこの庭に

主の神の眞心を知る

千早振る神代をかけたためしなき

この喜びをことほぎ奉らむ

吾いゆく道の面は檜葉の

青き蕙に満たされにけり

歩むさへ足音のなき青蕙

神の恵の露の色かも

かく歌はせ給ふ折もあれ、各自禮装を凝らし、大龍身彦の命を先頭に、弟姫の神あまたの御供の神等、肅々と列をつくりて姫神の前に進み來り、恭しく最敬禮を終り、先づ大龍身彦の命は、

久方の御空ゆ降る麗子姫

神の恵に妻となしたり

願ねがはくばこの有ありさま様をまつぶさに

父ちちおほかみ大神おほかみに傳つたへ給たまはれ

八やちひろ千尋ちひろの湖うみの底そこより出いでましし

姫ひめの命みことのつかれを思おもふ

今けふ日よりはこの島しまがねヶ根ねも榮さかゆべし

艶あでやか男おとこ、麗うららか子こ渡わたり來きませば

姫ひめがみ神かみはこれに答こたへて、

天地あめつちの開ひらけし時ときゆためしなき

慶けいじ事に會あへる君きみぞ尊たふとき

今けふよりは弟おとひめがみ姫ひめがみ神かみと親したしみて

海うみの食をすくに國くに護まもらせ給たまへ

弟姫神は拍手しながら歌ふ。

掛巻くも畏き海津見姫神の

いでまし吾は嬉しみ迎ふ

惟神の經綸の綱にひかれ

吾この島に渡り來しはや

吾目路にふるるものみな珍しく

また新しきこれの島國よ

力なき吾は是よりいかにして

この島國をひらかむとぞ思ふ

願はくば姫神力を添へよかし

まだ年若き乙女の吾に

夜はゆめ晝はうつつとこの島に

吾は迷へり島の白波

白波の打ち寄す島に吾ありて
神の力にのみぞすがるも

艶男は弟姫神の側に立ちて歌ふ。

今のさき高き教を蒙りし

吾は艶男よわき男子よ

ためしなき今日の喜び壽ぎて

來ませる姫の心畏き

とこしへにこの島ヶ根に吾ありて

國土ひらかむと思ひ定めし

白砂をしきまはしたり清庭に

姫を迎ふる今日ぞめでたき

海津見姫の神は之に答へて、

千早振る神もうべなひ給ふべし

この島ヶ根の喜びごとを

龍神や魚族たちも今日よりは

身もたましひも安く過ぎなむ

人間の形そなへし龍神も

いまだ全き姿にあらず

この姿月日けみして新たまり

まことの人と生るる日近し

國津神の御水火なければ龍神は

如何で生れむ人の身體に

何となく今日は清しき日なりけり

湖の底ひも明らかにして

父神ちちがみにこの有様ありさまを詳細まつぶさに

語かたらばさぞや喜よろこび給たまはむ

人間にんげんの全ま身みにしあらざれば

生言靈いくことたまの力ちからもおよばず

艶男あでやかや麗子うららかの君きみは國津神くにつがみ

生言靈いくことたまを宣のらさせ給たまへ

立たち、聲こゑも朗ほがらかに七十五聲しちじふごせいの生言靈いくことたまを歌うたふ。
こここに人體じんたいを全まく備そなへたる艶男あでやかなら竝ならびに麗子うららかの弟おと姫ひめ神がみは、
海津見わたつみ姫ひめの神がみの先頭せんとうに

アオウエイ

カコクケキ

サソスセシ

タトツテチ

ナノヌネニ

ハホフヘヒ

マモムメミ

ヤヨユエイ

ラロルレリ

ワヲウエヱ

ガゴグゲギ

ザゾズゼジ

ダドヅデヂ

バボブベビ

パポプペピ

一ひと二ふた三み四よ五いつ六む七ゆ八な九な十や

百も千ち萬よろ千ち萬よろのち神よ

守まらせ給たまへむ

と幾度となく繰返し繰返し、大龍殿の階段を悠々と上り、奥殿深く進み入る。

海津見姫の神は設けの上段の席に着き給ひ、稍下つて大龍身彦の命、弟姫神は左右に侍り、其他の女神は次ぎ次ぎに列を正し、數多の龍神魚族まで集り來り、「ウロウロウ」と今日の慶事を祝し合ひ、諸々の珍味佳肴に舌鼓を打ち、殿内もわるるばかりに踊り狂ひ舞ふ。

麗子は群集の中央に立ち、言靈歌をうたふ。

☐ 朝日輝く夕日は照らふ

輝く星のかずかずも

榮の色を示すなり

七夕姫の天降りまして

波の上に浮くこの島を

花咲き實る天國と

守らせ開かせ給ひつつ

八千代の末すゑに到いたるまで
樂らく土ど淨じやう土どと守まもらひつ
稚わかき國くに原はらまつぶさに
開ひらかせ給たまふぞ尊たふとけれ
生いのち命のちの清しみづ水ま眞ま清しみづ水は
貴うづの聖せい地ちに湧わき出いでて
限かぎり知しられぬ喜よろこびに
滿みつるも樂たのし神かみの島しま
この島しまヶ根がねは昔むかしより
黄こがね金はな花はな咲さく國くにときく
黄こがね金はなの花はなや白しろ銀がねの
花はな散ちる後あとに瑠る璃りや碑しやこ碣こ
珊さん瑚ご、瑪め瑙なうの玉たま實みのる
眞しん珠じゆや翡ひ翠すいの蓄つぼみたわたわに

揺るるも樂し神の島
龍の都は今日よりは
老と若きのけぢめなく
いやますますに榮ゆかむ
玉の緒の生命ますます長くして
世は高砂の松のかけ
鶴も來て鳴け雁も來よ
山はみどりに榮えませ
海もみどりにとこしへに
百の魚族うみおほせ
うら安國のうら安く
榮えはてなき海原の
國土とふ國土を引きよせて
龍宮の島の譽をば

いやとこしへにかがやかせ
ああかむながら神神の子の
ここにあらは現れ来し上は
いやとこしへの春夏の
花のはな盛りさかを見るならむ
踊れよをど踊れよをど歌へようた歌へよ
天地てんちの柱はしらのゆるぐまで
舞へよま狂へよくるいつまでも
一日ひとひ二日はまだおるか
七日なぬかな七夜もひ引きつづき
このよ喜びをとこしへに
祝いはひ歌へようた祝いはひ歌へようた
祝へよいは歌へようた島の子よしま

この音頭につれて數萬の龍神魚族は、大龍殿の内外に満ちあふれ踊り狂ふ状、
天地もゆるがむばかりの盛況なりき。

海津見姫の神は次席より聲さわやかに歌ふ。

☪ 天晴れ國晴れ面白や

この島ヶ根に天地の

恵の雨は降りにけり

百の龍神魚族も

今日の吉き日の吉き時を

千代のかためと歌へかし

歌ふもよろし舞ふもよし

踊るもうべよ天地の

開けし時ゆためしなき

この喜びはこの島の

外へはやらじと壽ぎ奉れ
主の神の御靈に生りし島ながら
顯津男の神來まさねば
まだ淺ましき國津神の
數にも入らぬ龍體の
あはれはかなき有様も
艶男の君、麗子の君は
ここに渡らせ來ませしなり
この島ヶ根もうき立ちて
まことの國となりぬべし
八尋の殿は築かれて
碧瓦赤壁美しけれど
住むもろもろの身體は
未だ全きを得ざるなり

今日けふの慶事けいじに相あひつぎて

艶男あでやかの君きみを守り立たてて

國津神くにつかみたち等ひと種たねを

産うめよ殖ふやせよ

天あめの眞砂まさこのかずのごと

御空みそらの星ほしにくらぶべく

産うめよ殖ふやせよとこしへに
𑌛

斯かく歌うたひて元もとの座ざに着つき給たまふ。
數多あまたの龍神等たつがみたちはこの御歌みうたに歡よろこぎ喜よろこび、
吾われを忘わすれ
て舞まひ狂くるふ。ここに大龍身彦おほたつみひこの命みことはすつくと座ざを立たち、
群集ぐんしふの中なかに進すすみ出いで、
聲こゑ
も朗ほがらかに歌うたふ。

久方ひさかたの空そらは晴はれたり荒金あらがねの
地つちは開ひらけり天津日あまつひは

射照り透らひ月讀は

この島ヶ根を隈もなく

恵の露を降しまし

御空の星は眞砂の如く

各自にかがやきて

今日のよろこび祝ふなり

吹き來る風もやはらかに

百津桂木のかげ清く

小鳥は歌ひ蝶は舞ひ

草葉にすだく蟲の音も

いやさやさやに聞ゆなり

ああ天國は生れけり

蓬莱島は現れぬ

吾は今日よりこの島に

神の御種を産み殖し

住む龍神や諸々の

家族親族を安らかに

守り生かさむ惟神

喜び勇めこの殿の

内外に集ふ諸々よ

歌へよ舞へよ踊れよ狂へ

大地の底のぬけるまで

と歌へば、百の龍神魚族等は、

麗子姫は弟姫神の資格にて、

今日限りとばかり右往左往に舞ひ狂ふ。
姿勢正しく階上より歌ふ。

葭原の國土の眞秀良場水上の

山の麓に現れませる

國くにの御祖みおやの大神おほかみの
御子みこと生うまれて十七じふしちの
春はるを迎むかへし吾われなるぞ
神かみの經綸しぐみの幸さちはひに
吾われは思おもはずこの島しまに
渡わたらひ來きたり龍宮りうぐうの
王こきしとなりて神かみの世よを
造つくり固かたむる身みとなりぬ
汝なれたつがみ龍神うろくづよ魚族うろくづよ
この島しまヶ根がねも今日けふよりは
樛つがの木きのいやつぎつぎに榮さかえつつ
八千代やちよの椿つばきうどんげの
花はなも時ときじく香かるべし
喜よろこび勇いさめ諸もろ々もろよ
』

と簡單かんたんに歌うたひ終をはり、元もとの席せきに着つく。

（昭和九・七・一七 舊六・六 於關東別院南風閣 谷前清子謹録）

第一〇章 祝賀しゅくがの宴えん（二）（一九九一）

ここに大龍殿だいりゅうでんの侍女神じぢよしんたる女神めがみたちは、こもごも立たちて祝歌しゅくかをうたふ。
白萩しらはぎの歌うた。

㊦ 永久とこしへに淋さびしき島根しまねと思おもひきや

花咲はなさき匂におふ御代みよは來きたれり

伊吹山いぶきやま斜面なぞへに匂におふ白萩しらはぎも

今日けふは惠めぐみの露つゆを浴あび居をり

山風やまかぜに吹ふきたたかかれて惱なやみてし

われ白萩も匂ひ初めたり
龍神の群に加はるわれにして

國津御神のやさ姿見し

言靈の貴の功を悟りけり

この島ヶ根に光添ふれば

桔梗は歌ふ。

桔梗の花も漸く咲き初めぬ

國津御神の貴の伊吹に

桔梗の花は淋しく匂ひつつ

今日が日までも風にもまれし

今日よりは伊吹山吹く風の音も

いとさやさやに響き渡らむ

紫むらさきの花はなをかざして島しまヶ根がねに

君きみ待まつことの久ひさしかりしよ

開ひらけゆく島しまの行ゆく末すゑ思おもひつつ

わが雄をし心こころはわきたちにけり

そよと吹ふく風かぜにもゆるる身みながらに

今け日は雄を々をしく心こころときめく

艶あで男やかの君きみの面おもざし伏ふし拜をがみ

露つゆの生いの命ちを惜をしまじと思おもふ

島しまヶ根がねにわれは久ひさしく生おひたちて

今け日の喜よろこびにあふは嬉うれしき
□

山吹やまぶきは歌うたふ。

□
龍たつが神みの島しま根がねに生おふる山吹やまぶきの

花は笑へり梢は踊れり

山吹の黄色き花も喜びの

宴の酒に面ほてりける

清々し艶男の君の御姿は

伊吹の山を出づる月かも

龍宮の王と現れし弟姫神の

貴の姿を見ればさやけし

久方の天津國より降りたる

女神と仰ぎ仕へまつらむ

何となく心樂しくなりにけり

麗子の君天降りましてゆ

天津日はあざやかに照り百花は

うららかに咲く島根となりぬ

池の面にしだれて匂ふ山吹の

花も眞直ますぐに匂にほふ今日けふかな

水鏡みづかがみ見みつつ思おもふも山吹やまぶきの

花はなの姿すがたも今日けふはさやけし

打ち仰あふぐ鏡かがみの湖うみの水門みなとあけて

あはれ姫神ひめがみ現あれましにけり

姫神ひめがみは湖うみの底そこよりあれませし

今日けふのめでたき日ひがらに生いくるも
』

撫子なでしこは歌うたふ。

龍神たつがみの永遠とこに住すみてしこの島しまに

若撫子わかなでしこの匂にほらぐ日は來きぬ

撫子なでしこのか弱よわき身みにも天地あめつちの

恵めぐみの露つゆにうるほふ今日けふかな

皇神すめかみの清きよき御手みてもて撫子なでしこの

わが身み嬉うれしき今日けふなりにけり

永とこしへ久へに今日けふの喜よろこびつづけかしと

撫子なでしこわれは天あめに祈いのるも

山風やまかぜに吹ふきまくられてなやみてし

撫子なでしこわれは蘇よみがへりける

魚族うろくづも勇いさみ喜よろこびこのにはに

伊寄いより集つどひて祝ほぎごと宣のるも

愛めづらしき魚族うろくづたちも撫子なでしこも

今日けふは勇いさみてあぎとひ拜をろがむら

女郎花をみなへしは歌うたふ。

♀ 女郎花をみなへしばかり住すまへるこの島にしま

男の子艶男渡り來ませり

野に匂ふ女郎花なれど天津風

吹きのよろしき今日は樂しも

伊吹山尾根に麓に咲き匂ふ

花も喜び歡ぐ今日かな

天津風吹きのよろしき今日の日に

心清しく祝言宣るも

なよ草のわれにあれども彦神の

水火のかかれば雄々しくならむ

雄々しかる艶男の君の御姿

見つつふるへり伊吹の裾野に

花のかげうつして清き鏡湖の

底より出でし姫神あはれ

水上山館にいませし美し神

尊たふとき神かみは來きたりましけり

水みな上なの山やまに榮さかえし君きみと聞きけば

われ一ひと入しほに懷なつかしきかも

山やま風かぜに吹ふきあふられてなよ草くさの

花はな恥はづかしきわれなりにけり

思おもはずも嬉うれしさ餘あまりて戀こひ心こころ

歌うたひしわれは恥はづかしきかな

椿つばきは歌うたふ。

百ゆづ津かつら桂と處ころせきまで生おひたてる

島しま根ねも今け日ふよりひらけ初そめたり

桂かつら木ぎの椿つばきの花はなも今け日ふよりは

紅くれなゐまして永と久はに榮さかえむ

紅くれないの花はな咲さく椿つばきの梢しずなまで

恵めぐみの露つゆに輝かがやく今日けふかな

永とこしへ久ひの御み代よの固かためと大おほ殿とのに

祝ほぎ言こと宣のらす神かみはかしこし

龍たつがみ神かみも常とこよ世よの春はるにあひ初そめて

開ひらき初そめたり心こころの花はなの香か

玉たまつばき椿つばきの八やちよ千ちよ代よまでもと祈いのるかな

君きみの嫁とつぎの華はなやかなるを

足あしびき引ひの山やまより湖うみより現あれましし

神かみの御み姿すがた雄を々をしかりける

八やちよ千ちよ代よまでと契ちぎる言こと葉はの玉たまつばき椿つばき

榮さかえ果はてなくおはしましませ

この島しまに國くに津つ神かみたち渡わたりまして

今日けふの喜よろこびひらかせ給たまへり

神津代の龍神たちも聞かざりし
喜びごとを聞くは嬉しき
雄々しくてやさしくいます弟姫の
神にならひてわれも盡さむ

白菊は歌ふ。

昔よりかかる例もしらぎくの

花かむばしき御代となりぬる

白菊の花にもまして床しかる

國津神等のかをる島ヶ根

あでやかに匂へる花の君なれば

龍神たちの匂らぐもうべなり

うららかに笑み榮えたる花の君を

慕したひまつりて百神集ももがみつどへり

大龍身彦おほたつみひこの喜よろこび如何いかばかり

われはしら菊ぎくはかりかねつつ

曲玉まがたまの池いけの眞清水ましみづ掬くむ朝あさに

わが見染みそめてし艶男あでやかの君きみよ

艶男あでやかの君きみのかむばせ伏ふし拜をがみ

白菊しらぎくわれは露つゆにうるほふ

水底みなそこに寫うつり給たまひし艶男あでやかの

君きみの姿すがたにあこがれしはや

水清みづきよき泉いづみに寫うつりし君きみが面おもは

白菊しらぎくの艶つやも及およばざりしよ

祝ほぎ言ごとを宣のるべき蓆むしろにたちながら

恥はづかしきかも戀歌こひかとなりぬ

湖原うなばらに浮うかべる島しまの清庭すがにはに

清すがしき君きみを見染みそめてしかなら

山菊やまぎくは歌うたふ。

山菊やまぎくの名なを負おふわれは一人ひとしほに入いり

水上みなかみの山やまの御子みこにあこがる

今日けふの日ひの喜よろこびなくば山菊やまぎくも

君きみにまみゆる幸さちはあらまじ

麗子うららかの姫ひめの嫁とつぎを壽ことほぐか

天津あまつ日光ひかげはうららかに照てるも

昔むかしより例ためしもあらぬ喜よろこびに

あふぞ嬉うれしき山菊やまぎくのわれ

伊吹いぶき山尾やま根ね吹ふく風かぜに靡なびきてし

われは果敢はかなく露つゆにくづれつ

山やま風かぜに吹ふきままくられしわが身みなれど
雄を々をしく清すがしく今け日ふより生いきむ
『

石せき竹ちくは歌うたふ。

なよ草ぐさのわれは女め神がみの身みなれども

花はなの心こころは雄を々をしかりける

ありがたき御み代よは來きたれりなよ草ぐさの

われにも惠めぐみの露つゆを賜たまへり

龍たつ神がみの島しまの道みち邊べに生おひ茂しげる

花はなのかげにも月つき日ひは照てらふ

月つきと日ひの惠めぐみの露つゆを浴あびながら

われははつかに花はなと匂におへり

今け日ふよりは尊たふとき神かみの出でましに

龍たつの島根しまねは榮さかえゆくらむ

草くさの根ねにひそみてすだく蟲むしの音ねも

等ひとしく清きよく今日けふは聞きゆる

波なみの上へに清きよく浮うかべるこの島しまを

心安うらやす國くにと開ひらく今日けふかも

麗うるはしき御子みこの出いでまし壽ことほぎて

今日けふの宴うたげのにぎはひにける

なよ草ぐさのわれも雄を々をしく勇いさましく

今日けふのよき日ひをうたふ樂たのしさ

神かみ々の歌うたの言こと葉はにひかされて

思おもはず知しらず踊をどりけるかな

山やまも野のも大湖原おほうなばらも清きよらけく

澄すみきらひたる今日けふのよき日ひよ

魚族うろくづも今日けふのよき日ひを壽ことほぎて

湖うみの底そこより浮うかび出でにけり

大魚おほな小魚な波なみの面おもてにあぎとひて

御代みよの榮さかえを祝いはふ今日けふかな

龍神たつがみの數かずの限かぎりを呼よび集つどへ

宴うたげの蓆むしろに招まねかす君きみはも

一柱ひとばしらも洩もれおつるなく大殿おほとのに

伊寄いより集つどひて御代みよを壽ことほぐ

雛ひな嬰げし粟しは歌うたふ。

雛ひな嬰げし粟しの吾われはか弱よわき女神めがみなり

いざたち舞まはむ今日けふの宴うたげに

雛ひな嬰げし粟しの花はなにも似にたる弱よわきわれの

心こころをたたす今日けふの喜よろこび

喜よろこびは外ほかへはやらじ雛ひな嬰げし粟しの

弱よわき力ちからのあらむ限かぎりは

波なみたてど嵐あらしは吹ふけど今日けふよりは

何なにか怖おそれむ雛ひな嬰げし粟しわれは

弟おと姫ひめの神かみ現あれますと聞ききしより

今けふ日のよき日ひを待まちわびにける

艶あで男やかの君きみは來きませり弟おと姫ひめの

神かみ輝かがやけり龍たつの島しま根ねに

菖あやめ蒲めは歌うたふ。

深ふか霧ぎりに包つつまれあやめも分わかぬ島しまも

月つき日ひ照てらひて安やす國くにとなりぬ

汀みぎはへ邊はへに紫むら匂なほふあやめ草ぐさも

今日けふは恵めぐみの露つゆに親したしむ

潺せん々と流ながる水みづに影かげ寫うつす

あやめの花はなは咲さき初そめにけり

時ときじくに匂におふあやめの紫むらさも

今日けふのよき日ひに色いろ優まさるらむ

果はてしなき御み代よの幸さちはひ思おもふより

わが魂たましひは飛とびたちにけり㊦

燕子花かきつばたは歌うたふ。

㊦ 水みづ清きよき川かは邊へに匂におふ燕子花かきつばた

捧ささげまつらむ今日けふのよき日ひに

水みづ清きよきこの島しまヶ根がねは永とこ久しへに

喜よろこび満みてよ幸さいはひあれよ

海津見の姫の現れます今日こそは

天地ひらく心地こそすれ

天地の神の恵みの幸はひに

今日は嬉しき宴にあふかな

言靈の伊照り助くる國ながら

今日始めての御聲聞きたり

萬代の礎固く築きまして

永久にましませ弟姫の神

艶男の君の言靈轟きて

湖の底までゆるぎ初めたり

果てしなき神の恵みに抱かれて

われは住みなむこの島ヶ根に

櫻木は歌ふ。

☐ 櫻木の花麗しく咲きぬべし

言靈宣らす神のいませば

山の端にうららに匂ふ櫻木の

花を手折りて君に捧げむ

大龍身彦の御代をば壽ぎて

朝陽にかをる山櫻花

夜嵐に果敢なく散らむ櫻花も

神の恵みに千代を保たむ

名にし負ふ大和心の櫻花

かざりて君の御前を祝はむ

この外、龍神たちの百の祝ぎ歌數多あれども、餘りくだくだしければ、はぶく
こととはなしぬ。

(昭和九・七・一七 舊六・六 於關東別院南風閣 林彌生謹録)

第一章 瀑下の乙女（一九九二）

大龍身彦の命は、水上山の聖場より、はるばる波の秀を踏み渡り來りし御祖の神の御子艶男を優遇せむと、種々焦慮の結果、龍宮島第一の景勝地たる鏡湖の方、琴瀧を庭園に取り入れ、大峽小峽の木材を伐り集め、碧瓦赤壁の寢殿を造り、此處に住まはず事となりぬ。琴瀧は鏡湖の水を集めて、ここに千丈の廣布を掛けし如く、晝夜間斷なく琴の音を響かせ、その莊嚴雄大なること言語に絶するばかりなりける。

艶男は朝な夕な此寢殿に、天津祝詞や生言靈を奏上して、龍の島根の開發を祈りつつありけるが、數多の女神たちは、その圓満清朗なる聲にあこがれ、その端麗なる容姿に戀慕して、この寢殿の廣庭に集り來り、言靈の練習をかたはら勵みつつ、天國の樂しみに浸りける。この瀧の落つる清泉を劍の池と稱ふ。朝な夕なに宣り上ぐる言靈の力によりて、地の面に散在する巨巖は、忽ち瑪瑙と變じ、瀧のしぶきに漏れし面を日光映じて、得も言はれぬ光澤を放ちたり。

艶男あでやかは欄干おぼしまに立ちて歌うたふ。

☐ 鏡かがみの湖うみの眞清ましみづ水を

此處ここにうつして落おちたぎつ

この琴こと瀧たきのいさましさ

天あまの河原かはらの落おつるか

思おもふばかりの光景くわうけいぞ

われは朝夕あさゆふこの瀧たきの

珍うづの水音みなおと聞きながら

心こころ清すがしく洗あらふなり

神かみの賜たまひし言靈ことたまの

水い火きを清きよめて鳴なり渡わたる

これの住處すみかのさわやかさ

天てんにも地ちにもかくの如ごと

清きよく樂たのしき清すがどころ

他ほかにはあらしと夜よな夜よなを

眠ねむらず起おき居ゐて見みつ聞ききつ

常とこよ世よの春はるを歡よろこぶなり

泉いづみの面おもを眺ながむれば

大おほ魚なや小さ魚なは群むらがりて

夜よるは波なみ間にあぎとひつ

天てん地ちの惠めぐみを仰あふぐなり

ああ天てん國ごくか樂らく園ゑんか

龍りゅう宮ぐうの島しま根ねかしら瀧たきの

漲みなぎり落おつる水み音なは

天てん地ちの神かみの御み聲こゑかも

ああ面おも白しろやたのもしや

百も年とせ千とせ年とせをながらへて

これの清所に永久の

生きの生命を樂しまむ

一二三四五六七八九十百千萬

千萬神たち守らせ給へ

斯かる折しも鷄鳴曉を告げて、翼の白き鵲は、劍の池のほとりに群れ來り、清
殿の屋上にカーカーと啼き狂ふ。

湖の白鳥は、何時の間にか劍の池に集り來り、艶男が言靈を聞かむとするもの
の如く見えにける。

ほのぼのと明けはなれたる庭の面をよく見れば、龍宮城に仕へたる數多の乙女
の中に、眉目形優れたる七乙女が、池の面に向ひて合掌し、何事かしきりに祈り
居る。

艶男は欄干に立ちて此の光景を眺めながら、

□ 烏羽玉の夜は明けにけりわが庭の

池の面清く乙女立たせり

よく見れば七人乙女の優姿

何を祈るか聞かまほしけれ

此の七乙女は、白萩、白菊、女郎花、燕子花、菖蒲、撫子、藤袴と言へる侍女

神なりける。

白萩は歌ふ。

□ うるはしき君の御聲にひかれつつ

思はず知らず此處に来つるも

御姿を見るにつけても魂勇み

生きの生命の榮えこそすれ

瀧津瀬の音にまぎれぬ言靈の

君きみの力ちからの大おほいなるかな

夜よな夜よなを夢ゆめに現うつつに汝なが面おもて

わが目めに浮うきて眠ねむらえぬかな

せめてもの思おもひ晴はらすとわれは今いま

劍つるぎの池いけの清水しみづ掬むすぶも

此この水みづは生命いのちの清水しみづ眞ま清水しみづよ

汝なが目めにふれし生命いのちの水みづよ

此この處こに來きて戀こひてふものを悟さとりけり

われも女神めがみの數かずにしあれば

朝あさ夕ゆふに宣のらす言こと靈たま響ひびかひて

わが胸むな先さきは高たか鳴なりにけり

艶あで男やかは歌うた心こころ。

□ いたづきに惱むわれなり真心の
君に報ゆる術なきを恥づ

白萩は歌ふ。

□ いたづきの身におはすとも何かあらむ
君の言靈にわが心満てり

白菊は歌ふ。

□ いたづきておはすかわれはしら菊の
戀しきままに朝を來にけり
わが心劍の池の眞清水と
澄みきらひつつ君をおもふも

戀こひしさの綱つなにひかれて朝あさまだき

君きみの住すまへる側そば近く來きつ

御聲おんこゑを聞きくにつけても勇いさましく

わが魂たましひは蘇よみがへるなり

白妙しろたへの衣ころもまとひし汝なが君きみの

御装おんよそほひはめでたかりける

時ときじくに言靈ことたまはな放はなつ琴瀧ことだきの

それにも増まして清きよき君きみはも

わが願ねがひよし叶かなはずも君きみ許がに

ありて御聲みこゑを聞きかば嬉うれしき

白菊しらぎくは山野やまのに匂におへば艶人あでびとの

御手みてに手折たをらるよすがさへなし

野のに匂におふ白菊しらぎくの花はなも御惠みめぐみの

つゆにしあへばうなだれにつつ

ひとたび 一度の露の情を浴びむとて
たき 瀧の麓にわれは來つるも
しらぎく 白菊の花は優しと思召せ
なまけ 情のつゆによみがへる身よ

あでやか 艶男は歌ふ。

いとこやの乙女の姿たしたしに
われは眺めつ心ときめく
やさ 優しかる七乙女らの御姿

さやけかりけり麗しかりけり
このしま 此島に渡り來てよりめづらしき
み 物を見る哉まなかひ清く
めしき 珍しきものの中にもとりわけて

愛らしきかな七乙女たち

水中の月に等しきわれなれば

汝が優しきかげを見るのみ

女郎花は歌ふ。

劍池底の眞砂もたしたしに

見ゆる清しき君にもあるかな

あこがれの心おさへて夜な夜なを

われは涙に袖を濡らせり

瀧津瀬のしぶきを浴びてわが袖は

涙と共に濡れにけらしな

一夜さのつゆの情をたまへかし

伊吹の裾野に咲く女郎花よ

巖を噛む瀧津瀬の音高ければ

わが言の葉も消えむとぞする

悲しさをうたふ心を打消して

落ちたぎつかも琴瀧の音

如何にしておもひの丈を語らむと

思ふも詮なし高き瀧の音に

劍池の泉を隔てて欄干に

立たす君なりわれ如何にせむ

池水の深き心を悟れかし

木石ならぬ君にあらずや

君おもふ心の糸のもつれあひて

とく術もなき小田巻の吾

艶男は歌ふ。

乙をとめ女をらの悲かなしき心こころ悟さとれども

われ國くに津つ神かみ許ゆるさせ給たまへ

千ちは早はや振ぶる神かみに誓ちかひてわれは今いま

汝なれをめぐしと言こと舉あげおくなり

さりながら夜よるの契ちぎりは許ゆるせかし

神かみに仕つかふるわれは艶あで男やか」

燕子花かきつばたは歌うたふ。

千ち萬よろづの生いく言こと靈たまを宣のらすとも

われはひるまじ寝いねずばやまじ

玉たまの緒をのよしや生いの命ちは亡うするとも

一いち夜ちやの枕まくらかはさで止やむべき

七なな乙をとめ女を悲かなしき心こころをよそにして

君は捨つるかわれらが眞心を

世の中に情を知らぬ男の子なれば

鬼よ魍魎よ魂なし男の子よ

どこまでも此眞心の届かねば

鬼となりても君悩まさむ

悩ましの心與へし君なれば

まことの鬼の姿とぞ思ふ

君よ君如何に怒らせ給ふとも

われは恐れじ飽くまで恨みむ

恨みわび玉の生命は捨つるとも

わが魂は暫しも離れじ

君なくばわれは悩まし朝宵を

玉の生命は亡せむとぞする

悩ましさ苦しさを故に朝まだき

御聲聞かむと迷ひ來つるも

君が手に打ち叩かれて罷るとも

われは恨みじ嘆かじと思ふ

いたづきの身なりと宣らす言の葉を

われは諾ふ弱き女にあらず

玉の緒の生命をかけて戀したる

君の生命はわがものなるよ

あこがれて只いたづらに亡ぶよりも

汝が生命をとりて笑まむか

かくならば最早厭はじ人の目も

神の怒りももの數かは

鬼となり雷となり魔となりて

君の生命を奪はむと思ふ

艶男は燕子花の猛烈なる戀に稍辟易しながら、悄然として歌ふ。

思ひきや此島ヶ根にかくの如

強き乙女の雄猛び聞くとは

見も知らぬ島に渡りて思はざる

人に思はれ苦しとおもふ

如何程に情の言葉宣らすとも

わが心根をかへじと思ふ

わが生命奪はるとも恨みまじ

情のこもる刃と思へば

かく歌ひながら、艶男は早や燕子花の猛烈なる戀愛に、到底反抗するの勇氣なく、彼が意に従ふべしとの覺悟を極めて居たりけるが、そしらぬ體をよそほひて、

㊦ 天地の神に願をかけし後のち

われは應へむ暫しを待たれよま

燕子花は歌ふ。

㊦ 御言葉に間違ひなくばわれとても

心安めて時を待たなむま

菖蒲は歌ふ。

㊦ 乙女等の赤き心のかたまりて

眞砂は赤く染まりけるかな

赤玉の光さやけき君故に

御池の鯉も赤く染まれり

次々つぎつぎに赤あかくなりゆく魚族うろくづの

色いろに見みえたりわれらが眞心まごころ

池いけの邊べに匂におふ菖蒲あやめの紫むらさきを

君きみに捧ささげむ受けさせ給たまへ

水底みなそこに一本ひともと生おひし白珊瑚しろさんごも

いやつぎつぎに赤あかく染そまりぬ

珍めづらしき赤あかき珊瑚さんごの梢しげには

黄金こがね白銀しろがね眞珠しんじゆの花はな咲さく

水みづの面もに枝えだをさし出し珊瑚樹さんごじゆは

見みる見みるうちに空そらに伸のび行ゆく

艶あでやか男おとこの君きみの心こころのあらはれか

乙女をとめの心こころか皆みな赤あかくなりぬ

汀邊みぎはべの瑪瑙めなうの巖いはもつぎつぎに

色いろは變かはりてわが面おもうつせり

昔むかしよりかかると例ためしもあら瀧たきの

落ちおこむ庭にはのめづらしき哉かな

及およばざる戀こひと思おもへどわが心こころ

あやめも分わかはずなりにけりしな

只ただひとりきみに語かたらふ力ちからなく

七なな人たり乙女をとめさそひて來きたれり

恥はづかしさ戀こひしさ故ゆゑにわれはただ

言こと擧あげもせず黙もだし居ゐたりき

かくなればわれは恐おそれじ只ただ君きみの

めぐしと宣のらす御聲みこゑ聞ききたし

御姿おんすがた見るにつけてもわが胸むねの

高鳴たかなり止やまらず苦くるしき朝あさなり

撫子なでしこは歌うたふ。

伊吹山尾根に麓に咲き匂ふ

撫子今日は汀邊に匂ふ

八尋殿の欄干に立たす御姿

見れば清しも白萩に似て

生命までかけて戀せし乙女子の

優しき心を君は捨つるや

よしやよし君に焦れて罷るとも

われは悔まじ恨まじと思ふ

力なく淋しくふるふ撫子の

君が御目にとまらぬ悲しさ

七乙女ここに揃ひて戀語る

悲しき心を君は知らずや

世の中に情を知らぬ益良男は

鬼の化身か悪魔の化身か

乙女をとめらのいやなき心こころ聞きし召めして
怒いからせ給たまふな真心まごころの聲こゑよ

藤袴ふぢばかまは歌うたふ。

七乙女ななをとめいやつぎつぎに真心まごころを

述のぶれど君きみは木耳きくらげの耳みみか

見みるかげもなき草花くさばなの藤袴ふぢばかま

君きみにまみえむことの恥はじかしも

花はなの香かはあまり見みえねど藤袴ふぢばかま

底そこの心こころを汲くませ給たまはれ

朝夕あさゆふを峰みねの狭霧さぎりに包つつまれて

うなかぶしつつわれは泣なくなり

かくまでも真心まごころの丈たけを繰くり返かへし

繰り返せども音なしの君
うちつけに戀の征矢をば放ちつつ
血に泣く乙女はほととぎすかも

艶男は歌ふ。

七乙女朝な夕なに集ひ來て

宣る言靈はかなしかりけり

天の下に男の子と生れしわれなれば

ひとりは許せ天地の神

乙女らの眞心聞きてわれは唯

泣くより他に術なかりけり

劍の池の金砂銀砂は、艶男の言靈によりて眞誠の金銀と變化し、水底に一本生

ひし白珊瑚は乙女の赤き心に染まりしか、次第々々に色を増して赤珊瑚と變じ、
瀧のしぶきは珊瑚の梢にとどまりて、眞珠、瑪瑙、黄金、白銀と咲き匂ひ、天地
瑞祥の氣は四邊に充滿し、孔雀、鳳凰、迦陵頻伽の泰平をうたふ聲四邊より響き
來れる。

ああ惟神靈幸倍坐世。

(昭和九・七・一八 舊六・七 於關東別院南風閣 白石惠子謹録)

第一二章 樹下の夢(一九九三)

艶男は徒然を慰めむと神苑を立ち出で、庭傳ひに百津桂樹の繁れる森かげを、
彼方此方と逍遙しながら、七乙女のかなしき聲などを思ひ出で、ひそかに歌ふ。

なげけとや神は言ふらむあひながら

あはれぬ戀こひに胸むねはをどるも

七なな乙女おとめ力ちからかぎりむらきもに村肝むらきもの

心こころのたけをあかしけるかも

わが心こころいづらにゆきしよ乙女子おとめの

かなしき言葉ことばをよそに聞ききつつ

いまとなり乙女おとめの赤あかき眞心まごころを

思おもひてかなしくなりにけらしな

桂樹かつらぎの梢うつれにさへづる小鳥ことりさへ

おのもおのみに戀こひをかたれり

蟲むしの音ねも心こころしづめて聞きくときは

みな愛かなしさの聲こゑなりにけり

世よの中なかに戀こひてふものは玉たまの緒をの

生命いのちをぬすむ鬼おになりにけり

憂うさつらさ七人乙女ななたりをとめにおもはれて

わがかへすべき術さへもなし

術もなき心いだきて桂樹の

森にさまよふ淋しき吾なり

とつおひつ思案にくるる夕まぐれ

笑ふが如き梟の聲

島根吹く風の響もかなしげに

わが耳にひびくと思へば淋し

斯の如朝な夕なをなやみつつ

樂しき吾は何の心ぞも

吾ながらわが心根をときかねて

戀の山路をゆきつもどりつ

人なくば心あくまで泣かむかと

思ひしことも幾度なりしか

乙女見れば戀ふしかなしも神苑見れば

清すがしきかもよ龍神たつがみの島しま

只ただ一人ひとり繁樹しげきの森もりをさすらひつ

乙女をとめ戀こふしく袖そでぬらすなり

大龍身おほたつみ彦ひこの命みことの御惠みめぐみに

吾われは寢殿やすどに一人ひとり寢いぬるも

眞夜中まよなかの夢ゆめにあらはれ七乙女ななをとめ

いやつぎつぎにかなしきこと宣のる

一度ひとたびは水上山みなかみやまにかへらむと

思おもふも詮せんなし今日けふのわれには

麗子うららかには王こきしとなりて吾われ一人ひとり

つれなき夜半よをかこつのみなる

七乙女ななをとめ美うららかにしけれど麗子うららかにの

花はなの姿すがたにしかじとおもふ

人ひとの身みの姿すがたならねばこの島しまの

愛めぐし乙女をとめもためらはれける

國津神くにつかみの御子みこと生うまれて龍神たつがみの

乙女をとめにあふとおもへば口く惜やしき

美うつくしき乙女をとめながらもどことなく

磯いその香かりのあるはさびしき

見みる花はなと眺ながめてここに過すぎむかと

思おもへど乙女をとめはうべなはぬらし

いぶかしやああいぶかしやこの島しまに

住すむは人ひとの面龍もりうのからだよ

鱗うろこ一面袴いちめんはかまの如ごとく見みえにつつ

肩かたより上うへは人ひとの姿すがたよ。

わづかに左右さいうの手てを振ふりて

長ながき袴はかまを着つけながら

右うわ往う左さ往わに行ゆき通かよふ

このありさまを見みるにつけ

兩りやう手て兩りやう足あし持もつ吾われは

いやおそろしくいやらしく

もの言いふさへも不ふ思議しぎなれ

人にんげん間せかい世界かいにかはなれ

龍たつの島しま根ねに永とこ久とはに

生おひ立たち來きたりし乙をとめ女子ごの

清きよきやさしき瑞みづ姿すがた

近ちか寄より來くれば藻もの香かり

鱗うろこのかをり吾わが鼻はなに

さやりにいとどもの憂うけれ

吾われは龍りう宮ぐうの島しまヶ根がねに

千代も八千代も存らへて
國土をひらくと誓ひてし
この言の葉のかなしさよ
今となりてはただ吾は
故郷にかへらむ心のみ
朝な夕なにむれおきつ
うら悲しくもなりにけり
ああ如何せむ千秋の
うらみもはるときや何時
巖の御靈や瑞御靈
わが願ぎごとを聞き召せ
一日も早く片時も
いとすむやけく救ひませ
波の上に浮くこの島に

珍うづの乙女をとめに圍かこまれて
身動みうごきならぬ苦くるしさを
あはれみ給たまへ嚴御靈いづみたま
瑞みづの御靈みたまの御前おんまへに
生命いのち捧ささげて願ねぎ奉まつる。

果はてしなき惱なやみにしづむわが魂たまを

救すくはせ給たまへ元もとの御國みくにへ
嚴御靈瑞いづみたまの御靈みたまの御心みこころに

任まかせて吾われはよき日ひ待まつべし

美うるはしき乙女をとめはあれど身からだ體たまの

みにくさ臭くささ鼻はなもちならずも

抱だきしめて肌はだにふれなばおそろしく

わが魂は戦くならむ

美しき花なりながら道の邊に

刺もつ薊の乙女なりける

如何にしてこれの島根を遁れむと

朝な夕なになやむ苦しき

われなくばこの島ヶ根にただ一人

麗子姫はなげくなるらむ

麗子の憂き目おもひてただ吾は

この島ヶ根に止まりてをるも

にあらはれ來り、百津桂樹に身を支へながら、
かかるところへ、七人乙女の中にも最も射向ふ神と聞えたる燕子花は、
忍び足

艶男の君の行方をもとめつつ

桂かつらの森もりに吾われは來きつるも

何故なにゆゑに君きみは樹蔭こかげにさまよふか

心こころもとなく吾われかなしもよ

わが宣のりし赤あかき言葉ことばを怒いからして

逃にげ給たまひしか情なさけなの君きみよ

玉たまの緒をの生命いのちをかけし君きみなれば

草くさを分わけても探さがさでおくべき

この森もりのすみずみまでも探たづねつつ

漸やっやくここに君きみに會あひぬる

わが胸むねは戀こひに燃もえつつ大空おほぞらの

月日つきひもくらくなりにけらしな

雲低くもひくう小暗をぐらく包つつむこの森もりは

君戀きみこひ渡わたるわが心こころかも

よしやよし君きみは水底みそこを潛くぐるとも

生命いのちにかけて追おひしき行ゆかむ
斯かくならば最早もはや詮せんなしわが思おもひ
はらして一夜いちやをやすませ給たまへ
□

艶あでやか男おとこはハツと思おもつたが、何なにくはぬ顔かほにて、

□
いとこやの君きみにますとは知しらざりき

この桂樹かつらぎの森もりの下したかげ

よくもまた探たづね來きしよなわが戀こふる

君きみをしみればよみがへるかも

果はてしなき思おもひ抱いだきて知しらず知しらず

吾われは樹蔭こかげにさまよひてゐし
□

燕子花かきつばたは歌うたふ。

空言そらごとを宣のらす君きみよと思おもへども

御面おんおも見みれば嬉うれしかりけり

龍たつの島しま伊吹いぶきの山やまにこもるとも

いねむと思おもふわれならなくに

和田わだの原はらうたかたの湖うみ行ゆく舟ふねも

たよりとするは風かぜの力ちからよ

君きみ戀こひて桂樹かつらぎのかけに立たちよ寄よれば

尾花をばなの末すえもわれを招まねかず

無なき名なさへ立たつ世よなりせば艶男あでやかの

君きみよ恐おそれず吾戀わがこひ許ゆるせよ

小波さざなみの静しづかに立たつや鏡湖かがみこの

その心こころを君きみは汲くまずや

よそながら君きみのみあとを慕したひつつ

もゆる心こころのままにわれ來きつ

天地あめつちの神かみを祈いのりつ吾わが戀こひの

色いろ褪あせざれと君きみにまみえし

思おもふこと遂とぐるは正まさしく天地あめつちの

神かみの心こころの戀こひにぞありける

幾いくよ夜よわれ瀧たき津つ瀬せの音おとを聽ききながら

君きみは如何いかにと眠ねむらざりしよ

君きみをおきて仇あだし心こころをわれ持もてば

鏡かがみの湖うみのそこひ乾かわかむ

いたづきの身みとはいつはり身からだ體たまも

御み魂たまも鏡かがみの如ごとく光ひかれる

曇くもりなき身からだ體たまもちていたづくと

宣のらす言こと葉はの恨つらめしきかな

生いのち命のちまで君きみに捧ささげし乙をとめ女子こを

憐あはれみ給たまふ心こころまさずや

君きみはいま遠とほく波なみの秀ほふみながら

御國みくににかへらす心こころならずや

よしやよしこの島しまヶ根がねをさかるとも

必かならず吾われを伴ともなひ給たまはれ

龍神たつがみのいやしき身からだ體たまもちながら

君きみを戀こふるははづかしきかも

恥はづかしき思おもひを捨すてて戀こふしさと

かなしき故ゆゑに君きみにつき添そふ

百津桂ゆづかつら繁しげれる森もりは人ひと目めなし

いやいねませよ草くさの褥しとねに

草枕くさまくら旅たびに立たたせる君きみならば

露つゆの枕まくらもいとひ給たまはじ

この森もりの木きの根ねを枕まくらになよ草くさを

褥しとねとなして天國みくににあそばむ』

艶男あでやかは、燕子花かきつばたの猛烈まうれつなる戀愛心れんあいしんと、押しおの強つよきその振舞ふるまひに征服せいふくされ、遂つひに
草枕くさまくらの夢ゆめを結むすぶこととはなりぬ。これより燕子花かきつばたは七乙女ななをとめの目めも怖おぢず、公然こうぜんと
艶男あでやかの寢殿やすどに朝夕あさゆふ起臥きぐわし、夫をととの歡心くわんしんを購かふべく、心こころの限かぎり身みの限かぎり、まめまめし
く仕つかへける。艶男あでやかは朝庭あさにはに立たち出いで、劍つるぎの池いけに面おもを濯すすぎながら、昨日きのふのことなど
思おもひ出いで、述懐じゆつくわいを歌うたふ。

ああ恥はづかしや情なさけなや

千引ちびきの岩いはと固かたまりし

大和男やまとをの子この魂たましひを

うち碎くだかれてなよ草くさの

生おふるがままに任まかせたり

女をんなの強つよき魂たましひは

巖いはほも射いぬく桑くはの弓ゆみ

彌猛心やたげこころのとどくまで

貫つらぬき通とほす燕かきつばた子花

姫ひめの命みことの射いむか向むかひに

吾われはもろくも破やぶれけり

天てんち地の神かみも許ゆるしませ

龍たつがみをとめ神かみ乙女いと言いひながら

獸けものの姿すがたにさまよへる

島しまの乙女をとめと嫁とつぎたる

わが身みの罪つみぞおそろしき

あ詮せんもなし詮せんもなし

斯かくまで弱よわき心こころかと

吾われとわが身みをせめれども

最もはや早やぶ破やぶれの弓ゆみの的まと

貫つらぬく術すべも波なみの上うへ

浮うきつ沈しづみつ人ひとの世よを

ここに捨つるかあさましや

これを思へば麗子の

姫もさぞかし苦しからむ

國の王と言ひながら

半ば獸の夫をもつ

如何に憂き世を過すらむ

吾は神の子人の子よ

獸に近き乙女子と

枕竝ぶる恥かしさ

憐れみ給へ嚴御靈

瑞の御靈の御前に

心恥ぢらひ宣り奉る

ああ惟神々々

わが言靈に力あれ

わが言靈ことたまに光ひかりあれ。

わが宣のらむ生言靈いくことたまの幸さちはひに

乙女をとめを全またき人ひととせよかし

わが肌はだに添そへる乙女をとめの優姿やさすがた

神かみの子ことなれ人ひとの子ことなれ

紫むらさきに匂におへる妻つまの燕子花かきつばた

まことの人ひとと現あれさせ給たまへ

一ひと二ふた三み四よ五いつ六む七な八や九この十たり

百も千ち萬よろづの神かみ、憐あはれみ給たまへ、救すくはせ給たまへ
□

斯く七日七夜間断なく艶男が宣れる言靈に、不思議や燕子花の全體忽ち人身と
變じ、荒々しき太刀膚の影もなく、全身餅の如く膚細やかに全く人身と生れ變り
ける。

艶男は歌ふ。

□ ありがたし生言靈の幸はひに

乙女は玉の膚となりぬる

拷網の白きたたむき淡雪の

若やぐ膚となりにけるかも

燕子花は歌ふ。

□ わが君の恵みの露に清められ
わが太刀膚は失せにけらしな

斯^かくならば最早^{もはや}恥^はづべきこともなし

君^{きみ}に仕^{つか}へて御^み子^こ生^うまむかも

ありがたし穢^{けが}れし吾^{われ}の身^{からだ}體^{たま}は

神^{かみ}の恵^{めぐ}みに人^{ひと}となりぬる^〆

(昭和九・七・一八 舊六・七 於關東別院南風閣 内崎照代謹録)

第一三章 鰐^{わに}の背^せ〔一九九四〕

艶^{あで}男^{やか}は燕^{かき}子^つ花^{ばた}と謀^{しめ}し合^あせ、夜^や陰^{いん}にまぎれて龍^{りゅう}宮^{ぐう}島^{じま}を立^た出^ちで、父^{ちち}母^{はは}のいます國^{くに}に歸^{かへ}らむと、決^{けつ}心^{しん}を固^{かた}めてみた。

大^{おほ}龍^{たつ}身^み彦^{ひこ}の命^{みこと}に止^{とど}められむ事^{こと}をおそれ、麗^{うら}子^{らか}の弟^{おと}姫^{ひめ}神^{がみ}にも告^つげず、郊^{かう}外^{ぐわい}の散^{さん}步^ぽにことよせ、月^{つき}照^てり渡^{わた}る眞^ま夜^{よな}中^{なか}頃^{ころ}、大^{だい}樓^{ろう}門^{もん}をくぐり第^{だい}一^{いち}門^{もん}の方^{ほう}へと急^{いそ}ぎゆく。道^{みち}

然^んをながめて、
の側^{かたはら}の百草^{ももぐさ}千草^{ちくさ}は夜露^{よつゆ}の玉^{たま}に月光輝^{げつくわうかが}き、
得^えも言^いはれぬ風情^{ふぜい}である。
艶男^{あでやか}はその自^{しぜ}

道^{みち}の邊^へに咲^さく百草^{ももぐさ}の花^{はな}にさへ

月の御靈^{みたま}は宿^{やど}らせ給^{たま}へり

草^{くさ}の上^へに戀^{こひ}を歌^{うた}へる蟲^{むし}の音^ねも

今宵^{こよひ}は清^{きよ}く月^{つき}に冴^さえたり

渚邊^{なぎさへ}に寄^よする波音^{なみおと}聞^ききながら

月^{つき}の夜路^{よみち}を二人^{ふたり}ゆくかも

しのびゆく元津御國^{もとつみくに}の旅立^{たびだち}は

蟲^{むし}の聲^{こゑ}にも驚^{おどろ}かされける

二人^{ふたり}ゆく空^{そら}を照^{てら}して月讀^{つきよみ}は

吾^{われ}を守^{まも}らせ給^{たま}ふがに見^みゆ

心安^{うらやす}く元津御國^{もとつみくに}に還^{かへ}らせ給^{たま}へ

御空みそらに輝かがやく月讀つきよみの神かみ ㊦

燕子花かきつばたは歌うたふ。

㊦ 龍神たつがみの島しまに生おひ立たちし燕子花かきつばた

吾われは水上みなかみの山やまに榮さかえむ

月見つきみれば龍りゅうの玉たまかと疑うたがはる

吾われは夜路よみちを君きみと行ゆくなり

草くさの葉はに置おく白露しらつゆに月照つきてりて

二人ふたりの袖そではぬねにけらしな

恐おそろしく又また樂たのしくも思おもふかな

君きみに引ひかれて離さかりゆく身みは

この島しまに今日けふを名残なごりの別わかれぞと

おもへば何なにか悲かなしかりけり

夜光る玉にもまさる君故に

吾は嬉しく従ひゆくも

の秀をながめて艶男は、
斯くして第一の門に着き、
鐵門を中より易々と開き、
渚邊に出で、
躍り狂ふ波

翼なき身は如何にせむ白波の

龍の島根を去る由もなし

打寄する波の白帆に照る月を

玉と仰ぎて歸らまく思ふ

さりながら翼もなければ鱗もなし

鳥にも魚にもなれぬかなしさ

大空の月も憐れみ給ふらむ

汀に立てる二人の姿を

ゆくりなく君が情の露あびて

又も汀の露にぬれぬる

天地の神よ吾等を憐れみて

水上の山へ渡らせ給へ

渡るにも御舟なければ如何にせむ

波の上に浮くこの島ヶ根を

斯く歌ふ折しも、波を分けてぬつと現はれ來る八尋鰐あり。水面に背を現し、
之に乗らせ給へと言ひたげなり。二人は天の與へと鰐の背に飛び乗れば、鰐は何
事も萬事承知の上とばかり、荒波の湖を遊ぎながら、南へ南へと走りゆく。鰐の
背に乗れる二人は交々歌ふ。

艶男 鰐の背に救はれ水上の山もとに

歸る思へば樂しかりけり

大空も湖の底ひも月照りて

その中原を行く身は清し

湖底に御空うつしてまたたける

星は眞砂にさも似たるかな

そよと吹く風に面をなでられて

こひしき君と吾歸り行くも

果てしなきこの湖原も足早き

鰐の助けにとく歸るべし

この鰐は神のたまひし賜ぞ

吾おろそかに如何で思はむ

鰐よ鰐吾を助けて元津國に

とく歸らせよ波を分けつつ

燕子花は歌ふ。

有あり難がたき神かみの使つかひの鰐わにの子こに

救すくはれ君きみが御國みくにに行ゆくかも

吾われも亦また元もとの身からだ體たをも持もち居をらば

鰐わにの如ごとくに送おくらむものを

斯かくならば吾われは人ひとの身み湖原うなばらを

渡わたらむ力ちから失しせにけらしな

惟かむ神なのが恵めぐみか大空おほぞらの

月つきは一ひと入しほ冴さえ渡わたりける

白波しらなみの立たちのまにまに月つき讀よみは

かかげをおとして輝かがき給たまふ

水底みなそこの魚族うろくづまでも見みえわたる

今宵こよひの月つきのさやかなるかも

龍神たつがみの追及おひしき來くるも恐おそるまじ

みあしの早はやき鰐わにに頼たよれば

湖原を飛び交ふ千鳥の音も冴えて

心清しき月の湖原

天地にかかる例はあらなみの

上分け走る今日の嬉しさ

斯く歌ふ折しも、後方に當りて千萬人の鬨の聲、どつとばかりに聞え來るにぞ、
艶男、燕子花の二人は後振り返り手を差上げ月光に透し見れば、こはそもいかに、
兩人が月夜を力に逃げ去りし事發覺し、大龍身彦の命は數多の龍神等に下知を降
し、二人の後を追つかげよと嚴命なしければ、龍神は吾も吾もと先を争ひ、波間
を浮きつ沈みつ、一瀉千里の勢にて追ひしき追ひまくるにぞありけり。

こは一大事と燕子花は聲を張り上げ、人身となりしを幸ひ、天の數歌を頻に奏
上する、この聲天地に響き湖も割るるばかりなり。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 百 千 萬

ちよろづ 千萬の神守り給へ
たつがみ 龍神の切先を止めさせ給へ
わに 鱧よ鱧よ力限りに走れよ走れよ
みなかみやま 水上山は霞の奥にぼんやりと浮く
はし 走れよ走れよ生命限りに

か 斯く歌ふや、
とき 鬨の聲はぴたりと止みて、
わに 鱧の足は
あし 一入速くなりける。

ありがた 有難し
わがことたま 吾言靈
わだつみ に海津見の

かみ 神の功は現れにけり

もろもろ 諸々の龍神等の襲ひ來る

やさ 矢先き逃れて安けき湖原

おほたつみひこ 大龍身彦の命の御功を

やす とどめて安き夜の湖原

艶男は歌ふ。

一輪の月は御空に輝けり

吾は一つの鰐に乗り行く

八尋鰐足はやければ龍神は

最早や追付くおそれだもなし

老いませる吾垂乳根は吾行方

探ねて日夜を歎かせ給はむ

一時も早く御顔拜まむと

思へば心いらだちにけり

水火土の神に救はれ吾生命

蘇りたる湖原はこれ

ほのぼのと水上山は見え初めぬ

月夜の空にぼんやりとして

千鳥啼くこの湖原を細女と

行くは夢路を辿るが如し

夢の世に夢を見ながら細女と

鰐の背に乗り湖原渡るも

龍宮の島もよけれど水上山

吾故郷は戀しかりけり

いとこやの麗子姫に立ち別れ

今燕子花を伴ひ歸るも

燕子花よ汝は面勝神なれば

言向けやはせ國津神等を

燕子花は歌ふ。

尊かる君の言葉をうべなひて

言こと向むけやはさむ國くに津つ神か等みを

離はなれ島じまの乙をとめ女ななれども君きみと在あれば

吾われは恐おそれじ如い何かなる人ひとにも

湖うな風かぜは強つよくなりけり波なみの秀ほは

いいや高たか々だかと狂くるひ出いだしぬ

風かぜ強つよみ波なみおこるとも何なにかあらむ

神かみの恵めぐみに抱いだかる身みは

天あめ地つちの神かみに抱いだかれ吾わが戀こふる

夫つまに抱いだかれ安やすき湖うな原ぼら

鰐わにの背せに易やす々やす渡わたる湖うな原ぼらの

風かぜも恐おそれじ波なみも恐おそれじ

白しら波なみのしづきにあはれ吾わが袖そでは

うるほひにけり濕しめらひにけり

抱だき合あひて泣なける夕ゆふの涙なみだにも

いやまさりつつ濡るる吾袖
□

斯く歌ふ折しも、波の奥より忽然として現れし一艘の舟、此方に向つて漕ぎ來る。近より見れば豈計らむや、水火土の神にましける。水火土の神はにこにこしながら、

□ 久々に歸らす君を迎へむと

吾は御舟を持ちて來れり

これよりは湖の瀬強し鰐の舟

返してこれに乗りうつらせよ

垂乳根の父と母とは汝が行方

歎かせ給ひ衰へ給へり

水上の山はほんのり見ゆれども

波路は遠し吾は送らむ
□

艶男あでやかは之これに答こたへて、

□ ありがたし水火土しほつちの神かみの御心おんこころ

生命いのち死しすとも忘わすれざらまし

龍宮りうぐうの島しまに渡わたりて求もとめたる

花はなの蕾つぼみの燕子花かきつばたはこれ

龍宮りうぐうの島しま根ねゆ移うつすこの花はなを

水上みなかみの山やまに植うゑたく思おもふ

水火土しほつちの神かみよ吾妻わがつま諸もろ共ともに

送おくらせ給たまへ水上みなかみの山やまへ
□

と言いひながら、鰐わにの背せより水火土しほつちの神かみの御舟みふねに移うつり、
鰐わにに向むかつて合掌がっしやうしながら、

□ 浪なみ猛たける大湖原おほつなばらを安々やすやすと

送りし君に感謝を捧げむ

天津神の御使ならめや八尋鰐の

今日の功は永久に忘れじ

いざさらば別れを告げむ八尋鰐よ

汝は吾身の生命なるぞや

水上山吾故郷に歸りなば

汝を守護の神と齋かむ

斯く歌ふや、八尋鰐は静々その全身を水に没し、後白波となりける。これよ
り水火土の神は波の秀を分けながら、月照る湖原を南へ南へと漕ぎ行く。

（昭和九・七・一八 舊六・七 於關東別院南風閣 谷前清子謹録）

第一四章 再生の歡び（一九九五）

葭原の國の一部、水上山を中心として約二十里四方の土地を領有ぎ、國津神の頭人となりて父祖の代よりここに君臨したる御祖の神、山神彦、川神姫の翁と姥は、天にも地にもかけがへなき二人の兄妹が、ゆくりなくも其姿を隠せしより、夜晝の區別なく慟哭して身體は日に日に衰へ、見るかげもなき憐れな姿となりたりける。

水上山に仕ふる數多の國津神等は、四方八方に馳け廻り、兄妹の所在をさがし求むれども、約一ヶ月を経たる今日、何の便りも荒波の磯に打寄すばかりなりける。

山神彦、川神姫の二柱は、玉耶湖の汀邊をさまよひながら、聲を細々と歌ふ。

□ あな悲しや

かかる歎きにあはむとは

思はざりしよ

いとし子の

行方は何處ゆくへ いづこ

今日が日までけふ ひ

三十日三十夜を探ぬれどみそか みそや たづ

何の便りも波の音なん たよ なみ おと

磯打ち寄するばかりなりいそ うちよ

萬斛ばんこくの

涙はすでに涸れ果てぬなみだ

わが聲さへもしをれけりこゑ

わが身體は日に夜にからだ ま ひ よる

痩せ衰へて力なくや おとろ ちから

この世に生きてたよりなしよ

夢になりとも兄妹のゆめ おとどい

所在知りたやあしかし

顔見たやかほ み

思へど詮なき今日のわれは
泣くより外に術もなし
この世に神のいますならば
わがいとし子の所在をば
一言われに知らさせ給へ
月日は空に照れれども
星は隈なくきらめけど
大地に草は茂れども
湖水の波は騒げども
わがいとし子の消息は
なしのつぶてや波の上
飛び交ふ千鳥の聲ばかり
ああ悲しもよ恨めしよ
生きて甲斐なきわが生命

捨つるもやすしいとし子の
生命保ちて地の上に

ありとし聞けばさぞやさぞ

蘇るらむわが心

あはれみ給へ嚴御靈

瑞の御靈の御前に

老いのやつれの身を捧げ

偏に祈り奉る

わが子は何處聞かまほし

娘は何處と朝夕に

探ぬる甲斐も荒風の

野路吹く音の聞ゆのみ。

空見れば心悲しも湖見れば

ひたに淋しも子なきわれには

天地の恵みに満つる國ながら

死なまく思ふわが子なければ

いとし子の行方探ねてわが魂は

衰へにけり絲の如くに

身體は骨ばかりなるみじめさに

力弱りて淋しきわれなり

川神姫は歌ふ。

人の世に生れてわれは年老いぬ

夫の命も衰へぬ

力と頼むいとし子は

如何なる曲の荒びにや

行方しら波立ち騒ぐ

水泡と消えしか浅ましや

玉耶の湖に浮びたる

龍神棲める魔の島に

若しも迷ひて渡りしか

何の便りもあら波の

磯打つ音の淋しさよ

われらは朝夕子を慕ひ

姫を慕ひてなく涙

早や涸れ果てて斯くの如

瘦せ衰へぬ

言葉さへ

思ふにまかせぬ苦しきよ

百神もみがみたちは二人ふたりの子この
行方ゆくへ探たづぬと山川やまかはを
騒さわぎ廻まはれど今いまにして
風かぜの便たよりも泣なく涙なみだ
乾かわく暇ひまなき袖そで袂たもと
恵めぐませ給たまへ憐あはれみ給たまへ
巖いづの御み霊たまや瑞みづ御み霊たま
神かみの御み前まへに願ねぎまつる
草くさ葉はにすさだく蟲むしの音ねや
梢こすげに轉さへづる百もも鳥とりの
聲こゑを聞ききつつ若もしや若もし
わが子この聲こゑにあらぬかと
子こを戀こふる身みの淺あさましや
まよひにまよふ老おいの身みの

今日^{けふ}は悲^{かな}しき汀^{みぎはへ}邊^へに
あらぬ望^{のぞ}みを抱^{かか}へつつ
佇^{たたず}み居^をれば夕^ゆ津^{ふつ}陽^ひは
雲^{くも}に包^{つつ}まれ遠^{とほ}山^{やま}の
尾^をの上^へに消^きえてあともなし。

いとし子^こに離^{はな}れしわれらは天地^{あめつち}の

神^{かみ}を頼^{たの}むの外^{ほか}なかるらむ

神^{かみ}よ神^{かみ}吾^{われ}等を憐^{あは}れみ給^{たま}ひまして

二人^{ふたり}の御^み子を返^{かへ}させ給^{たま}へ

眉^{みめ}目^{かたち}形^{すく}勝^{すぐ}れて清^{きよ}きいとし子^この

かげなき今日^{けふ}はひたに悲^{かな}しも

わが子^こかと近^{ちか}より見^みれば叢^{くみむじり}に

夕ゆふべを鳴なける蟲むしの聲こゑ々こゑ

陽ひは照てれど月つきは冴さゆれど村むら肝きもの

心こゝろ曇くもりてあやめも分わかず

汀みぎはへ邊へに匂におふ菖あやめ蒲めの清すがしさも

われには何なんの趣おもむきもなし

果はてしなき大おほ湖うな原ばらを打うち見みやり

御み子こと思おもへば浮うき寝ね鳥どりなる

鳥とりうたひ百もも花ばな匂におひ蟲むし鳴なけど

われには淋さびしき春はるなりにけり

山やま神がみ彦ひこは又また歌うたふ。

草くさを別わけ土つちを潜くぐるもいとまじ

わが子この行ゆく方へ突つきとむるまで

夢ゆめの世よに夢ゆめを見みながら夢ゆめの如ごと

あてなきわが子こを探たづねぬるかな

わが御子みこは湖うみの藻屑もくづとなりしかと

わがいとし子ごは彼かれならずやと

わが御子みこと名な告のるものさへあるなれば

鳥とりも獸けものもいとほざるべし

わが御子みこは鳥とりとなりしか湖原うなばらの

魚うをとなりしか心許こころもとなや

玉たまの緒をの生命いのちある閒うち只ただ一度いちど

見みまく思おもふもいとし子ごの面おも ㊦

は、あとを探たづねて追おひ來きたり、
かく夫婦ふうふは湖邊こへんをさまよひ、
歎なげきの歌うたをうたふ折をりしも、
館やかたに仕つかふる國津神くにつかみ眞砂まさご

☐ わが君はここにいませりわが君は

ここに立たせり嬉しきるかも

あちこちと君の行方を探ねつつ

眞砂の磯邊にあひにけりしな

ありがたし神の恵みに守られて

君二柱生きていませり

艶男の君は何處ぞ麗子の

姫の行方は未だ知れずや

山神彦はこれに應へて、

☐ 人草の行くべき所はことごとくに

探ね廻れど影だにもなし

この上は神に任せて歸るべし

わが子は此世のものならなくに

眞砂は歌ふ。

わが君よ淋しきことを宣らすまじ

必ず生きて歸らせ給はむ

わが見たる昨夜の夢をうかがへば

艶男の君は歸りますべし

麗子の君の行方は龍宮の

島に渡りて王とならせり

さりながら確にそれと宣りがたし

ただ臍氣の夢にありせば

川神姫は稍力得顔に微笑を浮べて、

□ 汝が言葉まことならずも生くるてふ

夢の話に心ときめくも

ともかくも館に歸り時待たむ

日は黄昏れて黑白もわかねば

山神彦、川神姫は、從神の眞砂に夜の道を護られ、一先づ館に立歸り、其夜は

とつおひつあらぬ事のみ繰返しつつ、淋しき眠りに就きにける。

曉告ぐる鷄の聲、鵲の聲に呼び覺されて、二人は寢間を起き出で、再び眞砂に

導かれて榮居の濱邊に出でてゆく。

遙か前方を見渡せば、一艘の舟、此方に向つて艫を漕ぎながら進み來る。

山神彦はこの光景を眺め、若しやわが子にあらざやと脇目もふらず湖上を打ち

まもり、

□ 若しや若しわが子に非ずや濱邊近く

漕ぎ來る舟のあしの早きも
若しや若しわが子の舟と知るならば
百神集へて出で迎へむを

眞砂は、

正しくや兄妹の舟とおぼえたり

水火土の神龕を操れば

かく歌ふ折しも、次第々に舟は濱邊に近づき來る。よくよく見れば舟を操る
は水火土の神、舷頭に立つは確に艶男と見ゆれども、いぶかしきは一人の女神な
りと、脇目もふらず眺め居たり。

川神姫は、

水みづ先さきに立たつは確たしかに艶あで男やかよ

されどをみなすがたの姿すがたはあやしき

見みなれざる女をんなを乗のせて艶あで男やかは

心こころいそいそ歸かへり來くるらし

神かみ々の厚あつき恵めぐみに護まもられて

わが子こは正まさしく生いきてありしよ
』

かく歌うたふ折をりしも、漸やうやくにして水し火ほ土つちの神かみのあやつる御み舟ふねは、三さん人にんの立たてる湖こ邊へん
に安やす々やす着つきにける。

老おいたる兩りやう親しんは、手ての舞まひ足あしの踏ふむ所ところを知らず、忽たちまち天てんに向むかつて感みや謝ひ言ごとを奏そう上じやう
し、勇いさみ進すすんで水みな上かみ山やまの館やかたをさして歸かへりゆく。

(昭和九・七・一八 舊六・七 於關東別院南風閣 林彌生謹録)

第一五章 宴遊會（一九九六）

大御祖の神夫婦は、艶男が妻まで率ゐて、龍の島根より恙なく歸り來りしを喜び、數多の國津神を呼び集へて、ここに祝賀の宴を開く事とはなりぬ。

水上山の清所には八尋殿數多建てられ、國津神等はここに國の政治を、はつはつながら執り行ひ居たりき。

御祖の神の四天王と仕へたる神に、眞砂、白砂、岩ヶ根、水音、瀬音の五柱あり、中に岩ヶ根は總ての政治を總轄し、その權威御祖の神を壓するばかりけり。水上山の聖地は、麓を流る大井川を廣く取り込み、方一里に餘る庭園なりける。

茲に神々は艶男の御子の歸り來れるを喜びて、各自歌ひ舞ひ踊り狂ひ、木の實の酒に酔ひしれて、天地革新の氣四方に漂ふ。

山神彦は今日の喜びを祝すべく、花園をさまよひながら歌ふ。

☐ 一度は死なまく思ひし老の身も

蘇りたり艶男に會ひて

艶男は歸れど妹の麗子は

龍の島根にあるは悲しき

待ちわびしその甲斐ありて嬉しくも

今日はわが子の顔を見るかな

水上山尾の上は晴れて天津日の

輝き渡る今日ぞめでたき

何もかもよみがへりたる心地して

生きの生命の榮えを思ふ

葭原の國のかたへの浦水の里に

われは久しく年ふりにけり

吾父のみあとを繼ぎて八十年を

國の司と過ぎにけるかも

艶男あでやかの御子のみこの歸りかへし今日けふよりは

浦水うらみの里さとも安やすく榮さかえむ

地底ちそこより生うまれ出いでたる心地こちして

今日けふの宴うたげにあひにけらしな

妻つまも老おいわれも老おいたり今日けふよりは

わが子こを力ちからに餘世よせいを送おくらむ

川神姫かはかみひめは歌うたふ。

例ためしなき今日けふの喜よろこびにあふ吾われは

三み十年そとせばかり若返わかがへりにけり

今日けふまでは惱なやみ苦くるしみ疲つかれはて

吾身わがみ死しなまくなりにけらしな

廣庭ひろにはに藤波ふぢなみかをり山吹やまぶき匂にほふ

紫色なすかきつばた咲くむらさきいろ」

先づ祝賀の式は簡単にすまされ、各自思ひ思ひに大井川の岸邊を傳ひて、庭園を逍遙する事となりぬ。

艶男は栗毛の駒に跨り、燕子花は白馬に跨り、川の邊を逍遙しながら、咲き亂れたる山吹の花を愛でつつ歌ふ。

艶男の歌。

蛙なく大井の川の底清くかはす

黄金に映ゆる山吹の花こがね

大井川岸に匂へる山吹はおほゐがはきし

川吹く風に水底にさゆれつかはふ

艶人と共に手折らむ蛙鳴くあてびと

大井川邊の山吹の花おほゐかはべ

あまがへるを
雨蛙惜しみて鳴けど山吹の
はな
花はすげなく川風に散る
かはかせ
ち
」

かきつばた
燕子花は歌ふ。

やまぶき
山吹の花の盛りを眺めつつ

おほみ
大井の里はよしと思へり

かはみづ
川水に蛙鳴くなりうべしこそ

きし
岸の山吹今盛りなり

はるふか
春深み大井の川の水ぬるみ

ゆたにうつるふ水底の山吹
みそこ
やまぶき
」

あでやか
艶男は歌ふ。

𠂔
駒こまとめて暫しばし眺ながめむ大井川おほゐがは

岸きしに匂におへる盛さかりの山吹やまぶきを

山川やまかはの岩いは打うつ水みづの瀬せを速はやみ

浮うきつ沈しづみつ山吹やまぶき流ながる

わが庭にはを流ながる川かはの汀みぎはへ邊へに

咲さく山吹やまぶきは清すがしかりけり

川かはの邊への春はるの暮くれこそあはれなれ

わが妹いもに似にし山吹やまぶき萎しをれつ

山吹やまぶきは水底みそこにさへも咲さきて居をり

心こころして飲のめわが乗のる駿馬はやこま

駒こまいさむ足あしの響ひびきに山吹やまぶきの

花はなは果敢はかなく散ちらむとするも

大井川おほゐがは霞かすみながれて八重やへに咲さく

水上みなかみ山吹やまぶき水みづに寫うつれり

駿馬に水飼ふ岸をふさぎつつ
岸の山吹咲き亂れたり

豊かに歌ふ。
二人は山吹の川邊を後に、藤波の花咲く方へと駒を進め、馬上より艶男はまた

萬世のかたみにせむとわが植ゑし

藤波の花咲き出でにけり

水上山麓に匂ふ藤波の

花のすがたは汝に似しかも

藤波の花の紫見つつ思ふ

汝が色かも紫にして

紫の色深ければ藤波の

花はさながら燕子花に似たるも

濡るる身は樂しかりけり春雨に

色ます汝はかきつばたなる

大井川の向つ岸邊に咲く藤も

匂ひはわれを隔てざりけり

燕子花は足下に匂ふ燕子花の花を見て、しとやかに歌ふ。

かきつばた匂へる庭に君と居て

思ふは龍の島根なりけり

かきつばた匂へる庭に藤波の

花をし見れば春は深めり

ここに來て思はぬ恥をかきつばた

わが面の色赤らみにけり

父母に清く仕へむかきつばた

君きみの政治まつりをあななひ奉まつりて
山やまも川かはもいたく變かはれる此この園そのに

君きみと立たち居ゐて榮さかえをおもふ

わが駒こまは足あ掻がきしてをり向むかつ岸きしに

亂みだる花はなを慕したふなるらむ

大井川おほゐがは駒こまに渡わたりて向むかつ岸きしの

花はなに酔よはむも樂たのしからずや

水みづぬるむ春はるの大井おほゐの川かはの瀬せを

駒こまも勇いさみて渡わたるなるらむ

艶あでやか男やかは歌うたふ。

思おもはざる龍たつの島根しまねに渡わたり行ゆきて

思おもはぬ汝なれを得えたるわれ哉かな

玉椿たまつばきの八千代やちよを契ちぎる戀仲こひなかを

祝ほぎて匂におふか紅椿花べにつばきはな

紅椿べにつばき一枝ひとえ手折たをりて床とこの邊べに

かざして一夜いちやを寢いねむとぞ思おもふ

玉たまの肌はだに抱いだかるる身みの樂たのしさを

思おもへば春はるの心こころただよふ

かかる所ところへ、岩いはヶ音がね、眞砂まさご、白砂しろご、水音みなおと、瀨音せおとの五柱いつはしらは、駒こまをはやめて入り來きたり、岩いはヶ根がねは歌うたふ。

わが君きみの御姿みすがた木の間まゆ透すかし見みて

われも遊あそぶと急いそぎ來きにけり

二柱ふたはしら樂たのしき仲なかをさまたぐる

われを許ゆるせよ禮みやなき吾われを

おほゐがははやせわた
大井川速瀬渡りて今ここに

駒をうたせる君ぞ勇まし

われは今宴の神酒に酔ひつれど

たしなみ心忘れざりけり

岩ヶ根をかみて流るる川水の

しぶきは玉と散りて砕けつ

兔にもあれ角にもあれや御館の

雲霧はれて川水清し

御館を深く包みしなげかひの

雲は散りたり霧は晴れたり

あな尊神の恵の幸深く

永久に流るる清水眞清水

艶男はこれに答へて、

㊦ わが 行きし 龍の 島根に 比ぶれば

此 花園は 清しかりけり

龍神の 細乙女に 圍まれて

われは 思はぬ 夢になやみし

悩みてし 心の 雲霧はれわたり

今は 嬉しき 水音を 聞く

國津神も 伊寄り 集ひ来て

われを 壽ぐ 今日ぞ 嬉しき

燕子花は 歌ふ。

㊦ わが 駒は 嘶きそめぬ 波の上に

そだちし われに 語らむとして

百神の 強き力に 守られて

われは御國みくにに仕つかへむとぞ思おもふ
よしやよしわが玉たまの緒をは亡うするとも
此この神苑かみぞのははなれざるべし
』

眞砂まさごは歌うたふ。

水みづ清きよく流ながる大井おほいの川波かはなみは

底そこの眞砂まさごも見みえ透すきにけり

わが君きみに長ながく仕つかへて今日けふの日ひの

祝いはひの蓆むしろにあふぞ嬉うれしき

永とこ久しへに流ながる大井おほいの川水かはみづは

國津神等くにつかみらの生命いのちなりけり

艶男あでやかの君きみにまみえて嬉うれしけれど

なほ恨うらめしき麗子つららかの君きみよ

天津日はうららに照れど姫御子の

清しきかげを見ぬぞ淋しき

さりながら天地一度に開けたる

心いだきてわれよみがへる

白砂は歌ふ。

如何ならむ神の經綸かしら砂の

浦水の里に姫は來ませり

燕子花姫の命のよそほひは

水の鏡にうつりて清し

紫の御衣まとひて駒の背に

跨り給ふあはれ姫神よ

百神は勇みつどひて今日の日を

常世もがもと祈りけるかな

水音は歌ふ。

大井川岩にくだくる水音は

君が枕に響きこそすれ

大殿の影をうつして川水は

永久に流る清しき里なり

永久に浦水の里にましまして

われらが幸を守らせ給へ

川の邊に咲く山吹のかげ見れば

春はいよいよ深みたるかも

山吹の花は咲けども實らねば

姫の爲には手折らじと思ふ

藤波ふぢなみの花はな散ちるあとにいや固かたき

豆まめは實みのりて御子みこを生うむなり

まめやかな御子みこを生うまして此里このさとの

永久とほの榮さかえを來きたさせ給たまへ

燕子花かきつばたはこれに答こたへて、

水音みなおとの御言みことうべなり山吹やまぶきの

花はなは思おもはじ白藤しらふぢめでつつ

白藤しらふぢの花はなも匂におへり紫むらさきの

藤ふぢも匂におへりうましき川かはの邊べ

かきつばた汀みぎはに咲さけど何故なにゆゑか

あそぶ蝶てふてふ々々なきが淋さびしき

蝶てふてふ々々はわが背せの君きみの朝宵あさよひに

われをかばひていつくしみますも』

水音は歌ふ。

めでたかる君の言葉にあてられて

われ言の葉もつきはてにけり

春はまだ残れど君の言の葉に

わが身體はあつくなりけり』

瀬音は歌ふ。

待ちわびし艶男の君は波の秀を

踏みて嬉しく歸りましけり

大井川水瀬の音を聞きながら

もしや君かと待ちわびしはや

水上の山に仕へて幾年を

此川水に親しみしはや

百千花咲き亂れたる廣庭の

春の眺めは華やかなりけり

百千花咲ける神苑の花として

君は川邊に光らせ給へる

斯く神々は、各自祝歌を歌ひ、今日のめでたき宴席は閉ぢられた。
天津日は西山に傾き、黄昏の幕四邊を包み、夕鳥の聲高く遠く聞え來る。

(昭和九・七・一八 舊六・七 於關東別院南風閣 白石恵子謹録)

第三篇 伊吹の山嵐いぶき やまおろし

第一六章 共鳴の庭むたなき に（一九九七）

伊吹いぶきの山麓さんろくに展開てんかいせる龍たつの島根しまねの姫神等ひめがみたちは、一夜いちやの間に雲くもと消きえる艶男あでやかの後あとを
探たづねて、上うへを下したへと騒さわぎ立たち、悲歎ひたんの聲こゑは龍たつの島根しまねに充みち満みちにける。それにつ
けても、燕子花かきつばた姫ひめの在あらざるは第一だいいちいぶかしの極きはみなりと、噂うわさとりどりに、或あるひは
怒いかり或あるひは歎なげき、恨うらみ罵ののしる女神めがみの聲こゑは、秋あきの千草ちぐさにすだく蟲むしの音ねか、木々きぎに嘖さへつる百もも
鳥どりか、形けい容ようしがたく見みえにける。大龍おほたつ身彦みひこの命みことは、艶男あでやかの影かげの見みえざるより失しつ望ぼう
落膽らくたんのあまり、奥殿おくでんに入り堅かたく戸とを閉とざして姿すがたを見みせず、麗子うららか姫ひめの姫神ひめがみも今更いまさらの
如ごとく、あわてふためき、殿内でんない隈くまなく侍女じぢよに命めいじて探さがさせたれど、何なんの手てがかりも
なきままに、

いとこやの艶男あてやかは今いまいづらなる

生命いのちの力ちからとたのみしものを

故郷ふるさとにかへる術すべなき波なみの上へを

如何いかがなしけむ艶男あてやかの君きみ

大龍身彦おほたつみひこの命みことの妻つまとなりし

われを恨つらみてかへらせ給たまふか

ともかくも君きみの姿すがたははしけやし

われは力ちからにしづまりしものを

君きみなくばわれもこの地ちに住すむ心こころ

ひたに消きえつつ悲かなしさまさる

大龍身彦おほたつみひこの命みことはいま何處いづこ

御影おんかげ見えず心こころもとなや

太刀膚たちはだの夫つまに添そへるもわが兄あにの

ここにいますと思おもへばなりけり

父母ちちははの國くににやすやすかへらむと

思おもひしことも夢ゆめとなりけり

この島しまに一年ひととせ二年ふたとせ住すみしうへ

君きみを力ちからに去さらむと思おもひしを

今いまとなり彌や猛たけこころ心こころも消きえ失うせて

生いくる甲か斐ひなきわが思おもひかな

山やまに野のに百もも花はな千ち草くさ匂におへども

われにはかなしき便たよりなりけり

わが心こころ照てらさむ術すべもなかりけり

光ひかりの兄あにに見み捨すてられしゆ

日ひに夜よるに嚴いづの力ちからとたのみてし

君きみの姿すがたのなきが淋さびしき

仰あふぎ見みる雲くも井ゐの空そらも湖うな原はらも

わが繰くり言ことに黙もだしゐるかも

たよるべき何物もなき吾にして
死すより他にのぞみごとなし
龍神の數多棲まへるこの島に
人の身ひとり住むは淋しき
太刀膚の夫に朝夕伊添ひつつ
百の悩みに耐へて來しかな。

伊吹の山は高くとも
玉耶の湖は深くとも
天津御空は澄むとても
身の置所なき身には
生命死せむと思へども
寸鐵もなき今日の身は

何と詮方なく涙なみだ

乾くひまなきわが袖そでの

重き憂うれひに沈むなり

神がこの世にましまさば

波の上なみに浮く島ヶ根しまがねに

ひとり苦しむ妾神むすめがみ

元の御國もとみくにに救はせ給へたま

とみかうみ

すればする程情ほどなさけなや

吾われに似通にかよふ人ひともなく

みな太刀膚たちはだの龍神たつがみばかり

言ことの葉はさへもろくろくに

通かよはぬ今日けふの苦くるしさよ

つらつら思おもひめぐらせば

父と母との御言葉

軽く聞きたる報いにて

夢にも知らぬこの島に

龍の使にさらはれて

渡り來つるも罪のため

許させ給へ天津神

國津神等八百萬の

貴の御前に願ぎ奉る

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

龍の島根は沈むとも

朝夕戀ふる艶男の

君に對して二心

われあるべきや兄の君よ

妾が心の赤きをば

悟らせ給へ惟神

神かけ誓ひ奉る

ああ惟神々々

恩頼をたまへかし

斯く歎きの歌を宣らす折しも、忽然としてここに現はれたる侍女神あり。よく見れば、艶男に生命までもと焦れたる白萩なりけり。白萩は弟姫神の前にじり寄り、涙片手に歌ふ。

わが戀ふる君は見えなくなりましぬ

朝夕慕ふ生命の君は

燕子花姫の姿も見えずなりぬ

二人は波の秀踏みましにけむ

波路はるか水上の山にかへります

よすがは絶えてあらざるものを

弟姫の御君如何に思召すや

艶男の君の御舍を

悲しさの涙は雨と降りしきり

わが直垂の袖の重さよ

その昔か今は現かわかぬまで

わが魂は狂ひけらしな

夢現まぼろしなるよ艶男の

君の光は闇と消えつつ

弟姫神の麗子、これに答へて、

かなしさの思ひは同じ吾とても

心こころ亂みだれて夢ゆめ現うつなる

吾われは今いま心こころ騒さわぎてありにけり

今いましばらくを奥おくにてやすまむ

と宣のり終をはり、奥おく殿でん深ふかく入いらせ給たまふ。白しら萩はぎは只ただ一人ひとり悄せう然ぜんと大おほ殿とのを降くだりて、庭てい園えんを力ちから
もなげに逍せう遙えうしながら、清きよ池いけの汀みぎ邊はへに着つき、琴こと瀧たきの漲みなり落おつる音おとを聞ききつつ、心こころ
の憂うさを晴はらさむと努つとめてゐる。

鏡かが湖みこゆ落おつる瀧たき水みづさやさやに

苦くるしき膚はだを洗あらひ流ながせよ

今いまとなり悔くむも泣なくも詮せんなけれ

かなしき涙なみだは瀧たきとおつれど

艶あ男での君きみに從したがひ燕かき子つば花は

ともにその身みを忍しのばせにけむ

如何にして君の隠家探ねむと

思ふは一人吾のみならず

この宮に仕ふる女神のことごとは

われと等しく歎きに沈まむ

かかる世に生きて歎きにあふよりも

湖の藻屑となりて果てばや

斯く歌ふ折しも、差し足抜き足、忍び寄る女神は白菊であつた。白菊はかすかに歌ふ。

瀧津瀬を眺めて泣ける姫神は

君の行方をしら萩の君か

艶男の君の行方もしら菊の

吾はかなしき乙女なりけり

瀧津瀬の音聞くさへも何かしら
今日はさみしく思はるかな
われもまた同じ思ひの白菊の
血に泣くかなしき乙女なりけり

此の聲に白萩は驚き、後振り返り、
涙にしめる目をしばたたきながら、

白菊の君にありしか瀧津瀬の
吾は涙をしばりぬにけり
わが戀ひし光の君の影消えて
心さみしき朝なりにけり
大空の雲井の外まで探ねむと
思へど詮なし翼あらぬ身よ

白菊は歌ふ。

☐ われもまた君の行方をしら菊の

花はづかしき歎きするかな

月は落ち湖はあせなむ世ありとも

この戀心永久に失すべき

掌中の玉をとられし心地して

朝夕を歎きに暮るるも

(昭和九・七・一九 舊六・八 於關東別院南風閣 内崎照代謹録)

第一七章 還元龍神(一九九八)

白萩しらはぎは白菊しらぎくと共に深ふかき憂うれひに沈しづみながら、百津桂樹ゆつかつらぎの森もりに分わけ入いり、思おもふ存ぞん分ぶん泣な
かむものと、籠樹こもりぎの蔭かげに立たちて述懐じゆつくわいを歌うたふ。

白菊しらぎく 句にほへども手折たをる人ひとなき一本ひとつもとの

あはれ野菊のぎくは吾われなりにけり

伊吹山嵐いぶきやまあらしにふるふ一本ひとつもとの

あはれ野菊のぎくはいづらになびかむ

いろいろと花はなは句にほへど白菊しらぎくの

花はなはかなしも草くさにかくれて

艶男あでやかの花はなの香かりはいづらなる

風かぜの便たよりを聞きくよしもなし

艶男あでやかの君きみの手折たをらす白菊しらぎくの

花はなはもとより枯かれむとすらむ

きせ綿わたを吹ふきはらはれし白菊しらぎくの

花は涙の露にしをれつ

吾戀ふる君の情の露もなく

あはれ白菊枯れなむとすも

瀧津瀬のしぶきの露も白菊の

吾ははかなき生命なるかも

八重に咲く龍の宮居の白菊の

花恥かしも水鏡見れば

八千年の菊の香りを樂しみし

甲斐もあらず秋風吹きぬ

白菊をかざして御前に奉ると

思ひしことは夢なりしかな

白銀の色香を保つ白菊の

薫りはあせて木枯寒し

君は淡く吾白菊の色は濃く

在^ありしその日^ひをしのべばかなし

龍^{たつ}神^{がみ}の貴^{うづ}の島^{しま}根^ねに匂^{にお}ひてし

花^{はな}ははかなく木^こ枯^{がらし}に散^ちるも

吾^{わが}思^{おも}ふ心^{こころ}の丈^{たけ}も白^{しろ}菊^{ぎく}の

君^{きみ}は雲^{くも}井^ゐにのぼりましけむ

なげきても返^{かへ}らぬものと思^{おも}ひつつ

なほ歎^{なげ}かるる森^{もり}の下^{した}かけ

君^{きみ}ゆゑに生^いきの生^{いの}命^{のち}の延^のびちぢみ

ある世^よはかなし泡^{うた}沫^{かた}の夢^{ゆめ}

會^あはざればかくも心^{こころ}をいたためまじ

君^{きみ}が色^{いろ}香^かのあせたるくるしさ』

白^{しろ}萩^{はぎ}は歌^{うた}ふ。

君は早や吾の姿にあき萩の

うてなに吹ける木枯なりしよ

白萩の露にかたむくよそほひを

君はいとひて雲がくれせしか

歎けども如何にせむすべしら萩の

吾はかなしき花なりにけり

天かけり地かけるとも戀ふる君の

後をば追はむとひたに思ふも

いたづらに死する生命の思はれて

今一度を會はむとぞ思ふ

吾心清く正しく花咲けば

想像妊娠まむ白萩の露

あざやかに御國に匂ふ白萩の

花もしをれぬ乾ける露に

白萩しらはぎの露つゆの生命いのちは惜をしまねど

想像おもひはら妊娠はらみし子こをいかにせむ

この里さとの女神めがみはことごと艶男あてやかの

御子みこをまさしく想像おもひはら妊娠はらめる

よしやよし貴うづのうまし子こ生まるとも

父ちちなき思おもへば如何いかにかなしき

来きたり、桂樹かつらぎの蔭かげに二人ふたりの女神めがみのひそめるを見て、
かかる時とき、同じ思おもひの女郎花をみなへしは長袖ながそでに面おもてを覆おほひながら、只ただ一人ひとり悄然せうぜんとして入り、
稍やや驚おどろきながら、

伊吹山いぶきやま匂におふ白萩しらはぎ、白菊しらぎくの

君きみにまさずや吾われは女郎花をみなへしよ

よもすから君きみの姿すがたの見みえぬより

吾われはい寝ねずに明あけにけらしな

姫神ひめがみはいづれも姿すがたをかくしつつ

あなたこなたの樹蔭こかげに歎なげけり

吾われも亦また人目ひとめをよぎて泣なかむかと

この森もりかげにしのび來きにけり
□

白菊しらぎく、白萩しらはぎは、女郎花をみなへしの來きたれるに驚おどろきの目めを見はりながら、恥はづかしげに歌うたふ。

戀こひすてふ心こころはおなじ友垣ともがきの

共泣むたなく今日けふはかなしき日ひなるよ

歎なげくとも及およばざるらむ天地あめつちの

神かみに祈いのりて會あふ日ひ待つべし

せむすべも泣なく泣なく吾われは森蔭もりかげに

恥はぢをしのびて歎なげかひ居ゐるなり
□

斯く歌ふ折しも、百津桂樹の森をそよがせて入り来る神あり。よくよく見れば
思ひきや、生命をかけて戀ひ慕ふ艶男の姿なりける。

三人の女神は、はつと驚きながら物をも得言はず、呆然として清しき男子の姿
を眺め居る。艶男は百津桂樹の茂枝に直立しながら靜に歌ふ。

真心の綱に引かれて吾は今

生言靈に渡り來れり

姫神の歎きは知らぬにあらねども

今日の吾身を許し給はれ

身體は水上山に歸りたり

君にひかるる御魂の吾よ

水上山遠く歸ると思へども

汝が誠の力に動けず

兔も角も吾を許せよいく年の

後のちには必かならず來きたりまみえむ

燕子かきつばた花た姫ひめは水みな上なみの山やまに在ありて

輝かがやきにけむ國くに人びとの上へに

伊吹山いぶきやま麓ふもとに匂におふ白萩しらはぎの

やさしき心こころ吾われ忘れわすれめや

白菊しらぎくの清きよきよそほひ如何いかにして

吾われは忘わすれむ暫しばしを待まちませ

女郎花をみなへしやさしき花はなの御手みて振りぶりを

戀こひしく樂たのしく心こころに止とどむる

いざさらば吾われは伊吹山いぶきやまの上へに

身魂みたま鎮しづめて御園みそのを守まもらむ

と言いひつつ、さつと吹ふく湖風うなかせに艶男あでやかは靈身れいしんをのせ、山やまの尾をの上へを取とり巻まく白雲しらくもの
奥おく深ふかくかくれける。

ここに白萩、白菊、女郎花の三女神は、艶男、燕子花の二人は肉體共に水上の山深く住めることを悟り、矢も楯もたまらず、如何にしても玉耶湖を打ち渡り、日頃の思ひを達せむと、忽ち元の龍體と變じ、ざんぶと許り湖中に飛び込み、波の面をおよぎながら、南をさして進み行く事とはなりぬ。

漸くにして三柱の龍神は、浦水の濱邊に安着せるが、恰も月照り渡る眞夜中頃なりければ、大井川の川口より竊に水上山の聖地をさして上る事とはなりぬ。一旦還元したる龍神は容易に人面を保つ事能はず、大井川の對岸なる藤の丘と言ふ樹木密生せる個所に忍び棲む事とはなりぬ。

之より艶男は三龍神の魂に夜な夜な引き込まれ、俄に大井川の川邊戀しくなりて、違ある毎に駒をうたせ川を渡りて、藤ヶ丘の谷間に遊びける。

波の花榮居の濱も龍神の

渡り來しより浦水の濱とふ。

（昭和九・七・一九 舊六・八 於關東別院南風閣 谷前清子謹録）

第一八章 言靈の幸（一九九九）

ゆくりなくも龍の島の花と稱へし艶男の君の、一夜のうち姿消え失せしより、
大龍身彦の命を始め、弟姫の神は歎かひの餘り、奥殿深く御戸を閉して入り給ひ、
七日七夜を経るも表に出でさせ給はず、流石華やかなりし黄金花咲く龍の島も、
火の消えし如き寂寥の神苑となりける。それに加へて白菊、白萩、女郎花、燕子
花の七乙女は、半ば以上この島より影をかくしたれば、寂寥ますます加はり、烏
羽玉の闇の幕は深く閉しける。
七乙女の中に取り残されし撫子、櫻木、藤袴を始め、數限りなき島ヶ根の姫神
たちは、歎きの餘り伊吹山の南面中腹に展開せる鏡湖の汀に集り來り、天を仰ぎ、
地に俯して、日夜慟哭しながら、各自に述懐を述べ居たりける。

撫子なでしこは歌うたふ。

物思ものおもふ心こころは一人ひとしほ深ふかみたり

戀こふしき君きみの姿すがたなれば

橘たちばなのあかぬ匂におひに染そまりたる

嬉うれしき夢ゆめも覺さめ果はてにけり

撫子なでしこと覺めでさせ給たまひしその君きみは

今いまはいづらの里さとにいますや

移うつりゆく花はなの香かりと思おもへども

果敢はかなきものは吾身わがみなりけり

なかなかに手折たをりかねたるはつはなの

惜をしくも風かぜに散ちりゆきしはや

別わかれ路ぢを惜をしむ心こころは湖みづうみの

鏡かがみに見みえて小波さざなみのうつも

春雨は夜の間に降りてあはれあはれ

櫻の君は散り果てにけり

一度は散るべき花と思ひつつ

なほ惜しまるる春の宵かな

幾日幾夜龍の乙女の憧れし

島山櫻はあとかたもなし

山風に誘はれて散りし初花の

行方も波の空に消えしか

櫻木は歌ふ。

散らさじと思ひ初めにし櫻木の

花恥かしき色はうつれり

心なき花の姿に憧れて

綻ほこひび初そめしわれなりにけり

やがて散ちる花はなにも蝶てふのとまり來きて

惜をしむを知らぬ山やま櫻なぐらかな

わが身みには仇あだ花ばななりと知しりながら

散ちりたるあとの惜をしまるるかな

朝あさ夕ゆふに心こころを盡つくして珍めづしみし

島しま山やま櫻なぐらあはれ影かげなし

常とこ春はるの島しまに匂におひし初はつ花はなの

露つゆの香かりは失うせにけらしな

山やまに野のに花はなは匂におへど艶あで男やかの

君きみに勝まされる顔かむはなし

かくの如ごと歎なげきの花はなと知しらざりき

嵐あらしも吹ふかて散ちりゆく君きみを

汀みぎ邊はへに伊い寄より集つどひて歎なげけども

何時いつ歸かへりますかへてだだになし

櫻さくら咲ひくこの島しまヶ根がねにのこ殘のこされて

空そらにし知しられぬ雨あめにくるも

さまのさまの望のぞみ抱いだきて今日けふまでも

あり經へしものを如いか何かにとやせむ

橘たちばなの花はなにも似にたる吾きみ故ゆゑに

戀こふしさ一ひと入しほ深ふかかりにけり

千ち早はや振ぶる遠とほき神かみ代よの昔むかしより

かくうるはしき君きみはなかりし

龍りう宮くうの寶たからの花はなと仰あふぎてし

花はな橘たちばなの香かは失うせにけり

雲くも霧きりとなりてかくれし艶あで男やかの

花はなの姿すがたの惜をしまるるかなな

藤袴は歌ふ。

現身の世は悲しけれこの島に

果敢なくわれは朽ちむとするか

玉の緒の生命の綱と頼みてし

力の君は今やいまさず

藤袴の花はもろくも夜の雨に

打ちたたかれて涙しにけり

夜もすがら地に伏しつつ歎けども

生くべき生命と思はざりけり

池の邊に紫匂ふ燕子花の

花の姿も見えずなりけり

白萩の花は夜の間に散り失せて

神苑寂しくなりにけらしな

いづ方に散り果てたるか白菊の

花の香りは早や島になし

伊吹山處狭きまで匂ひたる

女郎花今かげだにもなし

百花の匂ふも知らで逃げさりし

人の心をうらめしみおもふ

雛罌粟は歌ふ。

雛罌粟の花は萎れてかげ寂し

君の光りのかくれましてゆ

朝夕をかこち歎けど口なしの

花恥かしも君は見えなく

この島は歎きの島か雛罌粟の

露は恵みに捨てられにける

かくの如歎かひの日にあはむとは

思はざりしよ朝な夕なを

百年も千年も君にまみえむと

願ひし事は夢なりしかな

夜な夜なを夢にまみえて楽しみし

花の姿は見る由もなき

風吹かばその君思ひ雨降らば

又しのばるる花なりにけり

汀邊に打ち寄す波も淋しげに

聞え来るなり花なき島根は

百千花咲き匂へども橘の

君のよそほひ仰ぐ術なし

月も日も輝き給ふこの島に

住すみて小暗をぐらきわが思おもひかなら

島しまの女神めがみたちは、各自おのもおのまわか別れを惜をしみ、歎なげきの歌うたをうたひつつ、悄然せうぜんたる折をりもあれ、鏡湖かがみこの水みづを左右さいうに別わかちて、悠々いういうと昇のぼり來きたる女神めがみは、海津見わたつみ姫ひめの神かみに坐ましまし、以前のいぜん如ごとく二柱ふたはしらの侍女神じぎよしんを伴ともなひ給たまへり。數多あまたの姫神ひめがみたちは、はつと一度いちどに汀みきはにひれ伏ふし敬意けいを表へつしつつありけるが、海津見わたつみの神かみは汀邊みきはへにスツクと立たたせ給たまひ、儼げん然ぜんとして宣のり給たまふやう、

龍神たつがみの歎なげきおもひてわれは今いま

宮みやの大門おほどを開ひらき來きつるよ

艶男あでやかの逃にげ去さりたるも龍神たつがみの

姿すがたに怖おぢさせ給たまへばなりけむ

今日けふよりは各自おのもおのまに言靈ことたまを

宣のれよ歌うたへよ人ひととなるまで

龍神たつがみの木草きくさも土つちも悉ことごとく

生いきて榮さかえて言靈ことたまを宣のれ

言靈ことたまの光ひかりしあれば龍神たつがみの

あやしき姿すがたも世よに輝かがやかむ

太刀膚たちはだの見み苦しき姿すがた改あらためて

玉たまの肌はだ持もつ人ひとの子ことなれ

言靈ことたまの助たすくる國くにに生あれながら

怠おこたりしはやこの島人しまびとは

わが宣のらむ生言靈いくことたまに神かむならひ

時ときじく宣のらへ貴うづの言靈ことたま

一ひと二ふた三み四よ五いつ六む七な八や九この十たり百も千ち万よろづ
『

と宣り終へ、再び波を左右に引き分け、海津見の宮を指して歸らせ給ひける。
これより島根の龍神は、晝夜間斷なく、覺束なき聲を放ちて、天の數歌を宣り
ければ、約一ヶ年の後には、全き人身と生れ替り、世にも目出度き寶の島、美人
の島、生命の島と稱へらるるに至りけり。

ああ尊きかも言靈の妙用。

(昭和九・七・一九 舊六・八 於關東別院南風閣 林彌生謹録)

第十九章 大井の淵〔二〇〇〇〕

水上山の神館は、艶男の歸り來りしより、忽ち歡樂郷と化し、豊かなる木の實、
野菜等を食して、此邊りの國津神等は生活の苦も知らず、天地の恵に浴し、至治
泰平の御代を謳歌せり。艶男は燕子花を此上なきものと愛でいつくしみ、朝夕を
庭園に出で、睦まじく手を取り逍遙しつつありしが、燕子花は何故か水邊を好み、

おほゐがは 大井川の清流をじつと見詰めて浮かざるが常なりける。
あてやか 艶男は燕子花の様子を怪しみながら、歌もて姫の心を探らむと、
ひける。 聲も清しく歌

水清き此川の邊に佇みて

物思ひげなる君のあやしさ

汝が面よくよく見ればまなかひに

赤き涙を浮ばせ給へる

古里の戀しき故か汀邊に

立たせる君の面は淋しき

燕子花咲き匂ひたる汀邊も

幾度見れば飽くべきものを

川の邊のわれは遊びに飽きはてぬ

されども君は戀しげなりけり

燕子花は覺束なき聲にて歌ふ。

☐ わが君の言葉畏しわれは只

流るる水の戀しかりけり

日に一度川水の流れ眺めずば

わが身體は燃えむとするも

龍神の性を保つか吾身體

流るる水を慕はしと思ふ

わが君の御許しあらば衣ぬぎて

此川中に浸らむものを

艶男は答へて歌ふ。

☐ 汝が願いとも易けし村肝の

心のままに浸らせ給へ

月も日も流るる大井の川水は

花の香漂ふ泉なりけり

川底の眞砂も照れり行く水の

膚を透して日の流るれば

夕ざれば月の流るる大井川

居ながらに見るわが身は清しも

燕子花は歌ふ。

素裸となるは恥かし願はくば

われのみ一人川に入りたし

御心の花を散らすか知らねども

夕べの川に一人浴みたし

艶男あでやかは稍色ややいろをなしながら歌ふうた。

心こころなき事を宣のらすよ鴛鴦をしどりの

番つがひはなれぬ契ちぎりならずや

秋風あきかぜは川かはの面おもてに吹ふきつけて

汀みぎはの菼はぎは散ちらむとぞする

よしやよし汝なれの心こころは離さかるとも

われは忘わすれじ貴うづのよそほひ

燕子花かきつばたは歌うたふ。

かくまでも思おもはす君きみの眞心まごころに

そむく思おもへば悲かなしかりけり

折々をりをりは元津姿もとつすがたに立たちかへり

わが身體からだまを清きよめたく思おもふ
わが姿君すがたきみに見みらるる苦くるしさに
かくも情つれなきことを宣のりつる
背せの君きみよ廣ひろき心こころに見み直なほして
妾わらはの願ねがひをただに許ゆるせよ

艶男あでやかは歌うたふ。

汝ながなやみわれは知しらぬにあらねども
寸時すんじもはなる事ことの苦くるしき
何故なにゆゑか此川上このかはかみに聳そびえ立たつ
藤ふぢヶ丘がをかべに煙立けむりたちたつ

燕子花かきつばたは歌うたふ。

君きみを思おもふあつき心こころの燃もえ立たちて

龍神たつがみの水い火き燃もゆるなるらむ

願ねがはくば此川このかはみづ水をせきとめて

水を淀よどませ遊あそばせ給たまへ

艶男あでやかは歌うたふ。

汝なが願ねがひわれ諾うべなひて明日あすよりは

國津神等くにつかみらにせきとめさせむ

汝なれおもふ心こころの深ふかさ淵ふちとなれば

此この行く水みづをせきとめて見みむ

燕子花かきつばたは歌うたふ。

□ ありがたし君の眞心清らけく
深きを思ひて涙ぐまるる□

斯く互に歌もて語り合ひながら、月の傾く夕まぐれ、館をさして歸り行く。
艶男は數多の國津神を呼び集へ、川中に散布せる大岩小岩を集めて、大井川の水をせきとむべく、堰を造らしめた。川は次第に深まり行きて、幾十丈の深き淵とはなりける。

此堰は大井の堰と名附けられたり。大井の堰をあふれ流るる川水は、瀧となりて下流にくだち行く。その壯觀さ、恰も天の河原の一直線に地上に向つて落つるが如し。

四天王の職に仕へたる岩ヶ根、眞砂、白砂、水音、瀨音の面々は、この瀧津瀨の壯觀を見むとて、半日の清遊を試みつつ、各自心の文を歌ふ。
岩ヶ根の歌。

雄々しくもまた清しけれ大井川

漲り落つる音の高きも

水上山麓にかかると高瀧の

あれしは神代ゆ聞かずありけり

岩ヶ根につき固めたる川堰の

千代に八千代もゆるがずあれかし

川水は玉と散りつつ高堰を

輝き落つる雄々しさ清しさ

音にきく龍宮島の琴瀧も

此の瀧津瀬には及ばざるらむ

たうたうと落つる瀧津瀬の音清く

夜は殊更とどろき強し

高堰を造りし日より水深み

百の魚族集り來れる

舟ふねうけてこれの淀よどみに遊あそびなば

心こころ清すがしくはえましものを

川かは底そこも見みえわかぬまで水みづ深ふかみ

流ながれは緩ゆるくなりけらしな

此この堰せきの築きづかれしより水みな上かみやま山

貴うづの神みその苑のに川かは水みづ注そそぐも

庭にはの面もに大おほ魚なや小さ魚なは澗はつらつと

遊あそびて千ちとせ歳を祝いはふ春はるなり㊦

眞まさ砂ごは歌うたふ。

水みづ深ふかみ堰せきの音と深ふかく川かは底そこの

眞まさ砂ごは見みえずなりにけらしな

大おほ岩いはを高たかく疊たたみて築きづきたる

此この高堰たかせきは見るもさやけし

日け竝ならべて大雨おほあめ降ふらば如何いかにせむと

思おもひわづらふわれなりにけり

瀧たき瀬つせの音おとは晝ひる夜よる響ひびかひて

水みな上かみ山の神苑みそのにぎはし

川かは水みづは俄にはかに淵ふちとなり行ゆきて

底そこひも見みえずなりにけるかも

龍たつ神がみの棲すむによるしき此この淵ふちは

一ひと目め見みるさへ怖おぢ氣け立たつなり

あをあをと水みづを湛たへし此この淵ふちの

深ふかき秘ひ密みつを知るしや知しらずや

燕かき子つば花た姫ひめの命みことの願ねが事ごとに

なりし淵ふち瀬せと思おもへば床ゆかし
㊦

白砂しらさじは歌うたふ。

大井堰おほゐせきの上かみて手の水みづは淵ふちなせど

底そこの白砂しらさじありありと見みゆ

白砂しらさじの色いろあをむまで湛たへたる

これの淵ふち瀬せの深ふかくもあるかな

燕子かきつばた花はな姫ひめの命みことの眞ま心こころは

此この淵ふち瀬せより深ふかかりにけむ

思おもふ事こと一ひとつも成ならぬ事ことのなき

艶あでやか男おとこの君きみの設し計くみかしこし

水音みなおとは歌うたふ。

大井堰おほゐせき高たかくかかかりて落おちたぎつ

水音とみに強く響けり

水の音高く響きて大井川

汀の葦もそよぎはげしき

藤波や山吹の花は水底に

簾の如くかかれるが見ゆ

水音を消して鳴きたつ汀邊の

河鹿の聲は高まりにけり

此淵の汀に河鹿集りて

ここを清所と鳴きたつるかも

岩を噛みし水音さへもをさまりて

水たかまりし大井の淵かな

日も月も静かに浮ぶ大井ヶ淵の

ながめよろしも花もうつらふ

瀬音は歌ふ。

大井川水もどよみて朝夕に

響かふ瀬音消えにけるかも

水浅く清く流れし大井川も

堰の高さに深まりにけり

瀬の音はいづらに行きし今は只

鴨の羽ばたき聞ゆるのみなる

水鳥はいより集ひて魚族を

食まむとするか浮きつ潜りつ

兔も角も神代にもなき此川の

堰のなりしはめでたかりけり

おのもおのもつかさがみら
各自司神等は此瀧水を賞めそやしなから、
たそがるる頃家路を指して歸り行く。

夕月ゆづきのかげは銀色ぎんいろの光ひかりを放はなつて、高光山たかみつやまの尾根をねより昇のぼり給たまへば、時ときこそよしと燕子花かきつばたは、大井おほいの川瀬かはせに遊あそばむと、艶男あでやかの前まへに默禮もくれいし、必ずかなら後あとをつかせたまふまじと、言葉ことば残のこして出いで行ゆきぬ。

艶男あでやかは燕子花かきつばたの言葉ことばの、如何いかにしても腑ふに落おちぬより、そしらぬ顔かほをよそほひながら、うんと一聲ひとこゑうなづき居ゐたりしが、時移ときうつれども妻つまの歸かへり來きたらざるに心こころを焦いらち、ひそかに月下げつかの庭園ていえんを傳つたひて、川かはの邊べの葦草あしぐさの中なかに身みをひそめ、妻つまの舉動きよどうを窺うかがひ居ゐたりける。

燕子花かきつばたは眞裸まっぱだかとなりて水中すいちゆうに飛とび込こみ、首くびのみを出だし、元もとの太刀膚たちはだとなりて、鱗うろこの間に密生みつせいせる蟲むしを洗あらひ落おとしつつありしかども、淵深ふちふかければ其姿そのすがた、艶男あでやかの目めは見えみえず、ただ頭部とうぶのみ月下げつかに輝かがやけり。

燕子花かきつばたは久方ひさかたぶりに淵水ふちみづに浴あびながら、その爽快さうくわいさに打うたれて知らしらず知らしらず歌うたふ。

□ ああたの樂たのし

月の浮べる此淵に

わが身體を浸し見れば

日頃なやみし膚の蟲も

眞水におそれてはなれちる

今日ははじめて生きたる心地よ

淺ましの

わが身の姿若しや若し

わが背の君の目に入らば

妹背の契りは忽ちに

破れむもの今日までも

耐へ耐へ苦しさを

わが背の君の御情

これの清淵與へられ

夕べ夕べをたのもしく

遊ぶも嬉しわが魂は
よみがへりつつ歡ぐなり
これの川淵なかりせば
わが身の生命は維げまじ
日に三熱のなやみある
われには一度の水浴も
天國淨土の思ひなり
ああたのもしや清しさや
此高堰のいつまでも
破れずあれや永久に
大井の川の水清く
流れ流れて永久の
露の生命を保てかし
わが背の君のわが姿を

眺^{なが}めて恐^{おそ}れ給^{たま}ひつ

縁^{えにし}の絲^{いと}のきれぬかと

案^{あん}じわづらふ年^{とし}月^{つき}を

安^{やす}けく流^{なが}す川^{かは}水^{みづ}の

いさをは實^げにもめでたけれ

あ^{かむ}惟^{ながら}神^ス主^{かみ}の神^{かみ}の

恵^{めぐみ}に生^いきてわが姿^{すがた}

幾^{いくち}千^よ代^せまでも背^{きみ}の君^{きみ}の

御^{おん}目^めに觸^ふれずあれよかし

縁^{えにし}は永^と久^はに繁^{つな}げかし

天^{あま}津^つ御^{おん}神^{かみ}國^{くに}津^つ神^{かみ}

川^{かは}底^{そこ}守^{まも}る水^{すい}神^{じん}の

御^み前^{まへ}に謹^{つつし}み願^ねぎ奉^{まつ}る

御^み前^{まへ}を謹^{つつし}み願^ねぎ奉^{まつ}る
』

と愉快げに歌ひ居たりける。艶男は此愉快げなる姫の姿を見ていたく喜び、月清
けれど、さすがに夜なれや、水上の優しき面のみ見えければ、龍體に還元せし事
は少しも心づかず、葦草を分けて汀邊に立ち出で歌ふ。

君のかけ氣長く待てど歸りまさぬ

夜を淋しみ迎へ來つるも

汝が面清き波間に浮び出でて

眞白く見えぬ月の如くに

水の面に浮べる月は汝が面に

まがひて清し玉と映えつつ

新しきこれの淵瀨に浴み給ふ

君は龍宮を思ひ出さずや

燕子花は水の面に白き顔を浮かせたるまま、身體をかくして應への歌をうたふ。

龍宮りゅうぐうの島根しまねはもはや飽あきにけり

花はななる君きみのおはしまさねば

此この清きよき淵ふちに夜よな夜よな襖みそぎして

あらたまりゆくわが魂たま嬉うれしも

空そら見みれば月つきは冴さえたり水底みそこ見みれば

眞ま砂さは白しろく輝かがきにけり

此この清きよき淵ふち瀬せに夜よな夜よな襖みそぎして

生いきの生いの命ちを樂たのしむわれなり

背せの君きみは早はや歸かへりませよ今いま暫しばし

妾わらわは襖みそぎすまして歸かへらむ

裸はだ身かみを見みらるる事ことの恥はづかしさに

情つれなき言こと葉ばを許ゆるさせ給たまへ

艶あ男では妻つまの言こと葉ばに、何なんの疑うたがふ色いろもなく、

いざさらば早や歸りませわれは今

汝に先立ち館に歸らむ

と言ひつつ足ばやに、月下に匂ふ花の徑を辿りて歸り行く。後見送りて燕子花は、
稍安心したものの如く、忽ち水底を前後左右に駆け巡り、暴れ狂ひ、太刀膚の尻
尾を以て水面をはたきながら、鱗の間に棲息せる蛆を一匹も残らず拂はむとして、
高き水煙を立てるが、漸くにして汀邊に這ひ上り、恭しく呪文を唱へ、
全き人體と化して白衣を身に纏ひ、下半身は緋の長袴を穿ち、何喰はぬ顔にてし
づしづと、夫の館をさして歸り行きぬ。月は皎々として大井の淵の水面を照し、
波も靜かに瀧津瀬の音の高く響くばかりなりける。

（昭和九・七・一九 舊六・八 於關東別院南風閣 白石恵子謹録）

艶男の別名を橘と言ふ。艶男の橘は妻の燕子花と共に、空澄み渡り風清き夏の初めを、大井ヶ淵に新しき舟を浮べて半日の清遊を試みた。水は洋々として夏陽に輝き、流れゆるやかにして、そよ吹く小波を立て涼味津々たり。

艶男は歌ふ。

橘の花散る里の夕暮は

風も匂ひて清しかりけり

橘の香り床しく水の面に

ただよひにけり夏の初めを

橘の匂へるかげをふむ足に

かをりのこるか舟の上清しき

燕子花は歌ふ。

香かに匂にほふ花はな橘たちばなをしるべにて

龍たつの島しま根ねゆ吾われは來きにけり

龍宮りゅうぐうの花はな橘たちばなにくらぶれば

香かり床ゆかしき君きみにもあるかな

わが戀こふる情なさけの君きみのよそほひは

あから橘たちばな匂にほへる如ごとし

五月さつき闇やみあかして匂にほふ橘たちばなの

君きみはわが身みの光ひかりなりけり

ただならぬ花はなの匂にほひにあこがれて

水面みのもに夕ゆふべを橘たちばなのわれ

橘たちばなの花はなは床ゆかしもその實みさへ

花はなさへ一ひとしほ入いれめでたくあれば

橘たちばなの枝えだにふれにし心地こころして

君きみがみ袖そでにすがりぬるかな

水清き大井ヶ淵の川ぞひに
みづきよ おほゐがふちのかは

紫匂ふかきつばたあはれ
むらさきほ

朝夕の香り清しき橘の
あさゆふ かをすがたちばな

君に生命を任せけるかな
きみ いのちまか

夜な夜なを君が香りにひたされて
よよ きみがかを

花橘を偲びぬるかな
はなたちばな

わが袖は床しく香れり舟の上の
そで ゆかかをふね

川吹く風にさらされながらも
かはふかぜ

夜な夜なの夢の枕もかむばしや
よよ ゆめまくら

花橘の君が袖の香
はなたちばな きみそでか

久方の雲間の星も降り来て
ひさかた くもまほし

橘の上に輝き給へる
たちばな へかがやたま

わが宿の朝夕を匂ひたる
やど あしたゆふへ

岩燕子花と伊添ひるるかも
いはかきつばた

燕子かきつばた花はな匂におふ川かは邊へに棹ささして

思おもふことなし今日けふの遊あそびは

花はなの香かはうつららずあれと神かみかけて

二人ふたりが幸さちを祈いのりけるかなら

艶あでやか男おとこは歌うたふ。

大井川おほいづな波なみの綾あや織おる燕子花かきつばたの

君きみと樂たのしく川かは遊あそびすも

小波さざなみの色いろも紫むらさき匂におふなる

君きみは床ゆかしく龍宮りゅうぐうの花はなかも

川水かはみづに影かげをしたせる橘たちばなの

花はな美うつくしき汝なれが面おもかけ

袖そでにしむ花橘はなたちばなの香かりすも

愛めぐしき君きみと舟ふねに遊あそべば

燕子かきつばた花はな匂におへる妹いもが手たまくら枕まくらを

思おもへば春はるは久ひさしかりけり

夕ゆふ風かぜに契ちぎる二ふたり人の眞まごころ心を

月つきもゆるすかほほ笑ゑみ給たまへる

村むら雨さめの露つゆにしをれてうなだるる

君きみのよそほひ愛めぐしかりけり

うたた寝ねの枕まくらに通かよふ燕子かきつばた花はなの

夢ゆめは夜よな夜よなあたらしきかも

橘たちばなの下した吹ふく風かぜのかむばしさも

汝なれが色いろ香かに如しかざりにけり

わが庭にはに清すがしく匂におふ燕子かきつばた花はな

水みづに寫うつして見みるはさやけし

燕子花は歌ふ。

わが君の情の言葉にほだされて

わがまなかひに五月雨の降る

眞清水を深く湛へしこの淵に

思ふことなく二人遊ぶも

白萩は水底に清く咲きにつつ

二人が影を眺めゐるかも

尾の上吹く風にゆられて女郎花

花は水底にうつろひゐるも

水上山斜面に匂ふ女郎花の

やさしき姿うつれる川水

宵々を君に許されこの淵に

遊ぶわが身は樂しかりけり

いとこやの君の情はこの淵の

水底にまして深かりにけり

千重の波ふみて渡りし燕子花の

わが身を永く愛でさせ給へ

龍神の島より植ゑし燕子花の

花は常世に捨てさせ給ふな

艶男は歌ふ。

男の子吾花橘の香りもて

幾千代までも君を守らむ

汀邊に清しく匂ふ燕子花

見るもさやけき舟の上かな

水底にうつらふ花の影見れば

わが魂たましひもうるほひにけり

水上みなかみの速瀬はやせを見れば藤ヶ丘ふぢがをかの

あたりにあやしき煙けむり立つ見ゆ

何人なんびとの住すめるか知らず藤ヶ丘ふぢがをかの

けむらふ見れば人ひとのあるらし

近寄ちかよりて尋ねみむかも燕子花かきつばた

汝なれが心こころを知らまほしけれ

燕子花かきつばたは稍驚ややおどろきの色いろをうかべて歌うたふ。

水上みなかみは瀬せの速はやければ危あやふからむ

これの淵瀬ふちせにあそばせ給たまへ

藤ヶ丘ふぢがをかのけむらふ見みつつ何故なにゆゑか

わが魂たましひは戦をのきやまぬも

龍神たつがみの棲すめるにやあらむ朝夕あさゆふに

藤ヶ丘ふぢがをかべ邊へに雲霧くもぎり立つも

世よの中なかに恐おそるることなき身みながらも

藤ヶ丘ふぢがをかべ邊へはもの憂うかりけり〆

艶男あでやかは歌うたふ。

さもあれば吾われは行ゆかまじ燕子花かきつばた

いとへる丘をかに登のぼると思おもはず

吾われもまた心こころあやしく思おもひけり

朝夕あしたゆふべに立たつ雲霧くもぎりを

天津陽あまつひは傾かたむきにけりいざさらば

花園はなぞのをぬひて館たちにかへらむ〆

斯くて二人は汀邊に舟を繋ぎおき、花咲く丘を右へ左へたどりながら、館をさして歸りけり。二人は睦じく夕飯をすませ、四方山の話にふける折しも、俄に陣痛激しく産氣づきければかねて設けし産屋に、眞砂、白砂は、送り行きて柴の戸を堅く閉ぢ、館に歸り來り、山神彦、川神姫の御前に、御子生れませる時の迫りしを傳へければ、二人の老神はいたく喜び給ひて、直ちに神殿に參詣で、祈の言葉葉を捧げまつりぬ。

掛巻も綾に畏き久方の天にまします主の大御神、この國內を開き給ひし大御祖の御前に謹み敬ひ願ぎ奉る。あはれあはれわが子艶男と、先の日妹背の契を結びたる燕子花はも、日足らひ月をみたして御子産まむ時の迫りければ、主の神等の深き廣き厚き大御恵みに依りて、安く穩かに美子を産ませ給へ。生れし御子は此の國の永久の司として、喪無く事なく永久に命を保ち、國津神の安きを守らせ給へ。吾等夫婦は既に年老いて唯一柱艶男を力と頼みみたりしに、幸なるかも龍の島根より迎へ來りし燕子花姫の御腹満ちて、今日目出度き日とはなりにけり。仰

ぎ願ねがはくば燕子かきつばた花は姫ひめの産屋うぶやは安やすく平たひらけく清きよくさやけく貴うづの子こを産うみ了おほせ給たまへと、
大前おほまへに御幣みてぐら帛ら奉たてまつり山川やまかは海野うみのの種々くさくさの甘美物うましもの、八足やたりの机代つくゑしるに横山よこやまの如ごとく置おき足たらは
して奉たてまつるさまを、平たひらけく安やすらけく聞きこし召めせと申まをす』

と敬々うやうやしく祝詞のりとを宣のり終をへ、静々しじしじと艶男あでやかが居間ゐまに來きて見みれば、艶男あでやかは腕うでを組くみ、
默然もくねんとして顔青かほあをざめゐたりけり。山神彦やまがみひこ夫婦ふづはいぶかりながら、

『我國わがくにの司生つかさあれますよき日ひなるを

汝なれは何故なにゆゑ沈しづみ居をるにや

水上山みなかみやまひらき初そめてゆ今日けふの如ごと

目出度めでたきよき日ひはあらざらましを』

艶男あでやかは漸やうやく面おもをもたげ、重々おもおもしき口くちにてわづかに歌うたふ。

☐ 嬉うれしさの限かぎりなれどもわが妻つまの

産うみの惱なやみをおもひて沈しづめる

玉たまの緒をの生いのち命の峠たつげふみ越こえて

御み子こを産うますと思おもへば苦くるしき

わが爲ためにならむと思おもへば燕かきつばた子ばた花た

心こころかなしくなりにけらしな

生あれし子こは健すこやかなれと祈いのりつつ

他ほかに一ひとつのわれなやみもてり

若もしや若もし龍たつの御み子こをば産うまむかと

思おもへば苦くるしき今こよひ宵ひなりけり

川かは神かみ姫ひめは艶あでやか男こころの心こころを慰なぐさめむとして歌うたふ。

☐ 天あめ地つちの神かみの恵めぐみのふかければ

安やすく生うまれむさかしき神かみの子こ

村むら肝きもの心こころ惱なやますことなかれ

美うつしき御み子こは安やすく生うまれむ

わが家いへの寶たからの御み子この生うまれ來く

今け日ふの目め出で度たき日ひがらを祝いはへよ

燕かき子つば花た姫ひめは雄を々をしくふるまへば

今け日ふの産うぶ屋やはうら安やすからむら

笑あはみを湛たへながら、
かかる折をしも、遠とほく看かん守しゆの役やくを務つとめたる眞ま砂さごは、あわただしく入いり來きたり、
滿まん面めん

美うつくしき玉たまの御み聲こゑは柴しばの戸との

中なかより清きよくひびき來きたれり

わが君きみよ喜よろこび給たまへ貴うづ御み子こは

今産聲をあげさせ給へり
戸をあけて入らむと思へば姫神は
いたくこばませ給ひたりけり
天地の開けし心地ただよひて
勇み喜び知らせ奉るも

山神彦は喜び歌ふ。

ありがたし神の恵みの幸はひて
わが孫安く生れたりけり
今しばし産屋の御戸を開くまじ
産婦は姿見らるるをいとふ
七日七夜産屋に近づくことなかれ
未だ血の若き産婦なりせば

驚きて生命死せむもはかられず
必ず産屋の戸はひらくまじ

と戒めおきて再び神殿に額き、燕子花の安産せし事を感謝し、川神姫と共に、夜も更けたればとて寢殿に進み入る。艶男は餘りの嬉しさに、妻は如何に、わが子は如何にと、たとへ父の厳しき戒めなればとて、最愛の妻や待ち設けたる御子の顔を見ずして止むべきやと、月照る庭を忍び忍び、産屋に近寄り戸の外よりすかし見れば、豈計らむや、姿優しき妻の燕子花は、全身太刀膚の龍體となりて、玉の子を抱き安々と眠り居るにぞ、艶男は一目見るより膽をつぶし、あつと叫びながら逃げ行く音に、燕子花は目をさまし、わが淺ましき此姿を夫の君に見られたるかと恥らひの餘り、戸をおし開けて驀地に大井ヶ淵の底深く飛び込みにける。生れたる子の名は龍彦と名づけたり。

(昭和九・七・一九 舊六・八 於關東別院南風閣 内崎照代謹録)

第二章 汀の歎き〔二〇〇二〕

燕子花は初産の苦しさに疲れ果て、御子を抱きしまま、ぐつたりと前後を忘れ
て眠り居たりしが、最愛の夫艶男に吾醜き元の姿を見つけられしをいたく恥らひ、
斯くなる上は何時まで夫の愛を保つ由なく、又吾身のうら恥かしさを案じ煩ひ
の餘り、大井ヶ淵に身を投じて、全く元の龍體と變じ、とこしへに此淵に沈みて、
艶男の聲を忍び忍びに聞きつつ樂しまむものと覺悟を極めたりけるが、燕子花は
最早龍體と還元したる以上、人語を發する由なく、心の中にて思ひのたけを歌ふ。

背の君の情の露のかがやきて

いとしき御子は今生れたり

さりながら産みのなやみの苦しさに

後前忘れて吾は眠りし

眠る間を元つ姿を背の君に

見られし後はせむすべもなし
歎くとも及ばざるらむ吾姿

君の眼にふれたる上は

よしやよし元つ身體に還るとも

君の情は永久に忘れじ

夜な夜なの親しき枕も夢なりし

今は現幽所をへだてて

大井川水清ければとこしへに

吾身の棲處にふさはしく思ふ

背の君は言ふも更なり生れし子は

肥立つにつけて吾を恨まむ

國津神の妻とはなれど元つ身は

いやしき獸の吾身なりけり

背の君の幸を思ひて吾は今

惜しき生命を捨てむとぞする

吾魂のいのちは永久にこの淵に

深く沈みて君を守らむ

よしやよし浮名はいかに龍の身の

恥を忍びて淵に沈まむ

御父もおどろき給はむ御母も

歎かせ給はむ今日の吾身を

恐ろしき妻を持ちしと背の君は

夜な夜な憂ひに沈み給はむ

背の君の心思へばかなしけれ

獸を抱きしと謗られ給へば

斯くの如くに忍び忍びに述懐を終へて、

大井の川底深くその靈身は以前の龍體

を保ちける。

ここに山神彦、川神姫の神は、夜半の出来事を聞き、驚きと歎きに包まれ、人に顔見らるるも恥かしと、表戸を堅く閉して七日七夜をさし籠りけり。
艶男は突然の出来事に、且驚き且あきれ且歎かひつつも、さすがは夫、妻のかなしき心を憐れみ、朝な夕な大井の川の汀邊に立ちて、追懐の歌をうたふ。

あはれあはれ吾戀ふる妻は今いづこ

朝な夕なを汀邊に

立ちてし見れど影もなく

涙は雨と降りしきり

吹き來る風もさみしげに

涙の頬をなでてゆく

いかなる宿世の因縁か

獸の身を持つ燕子花の

やさしき姿にほだされて

妹背いもせの契ちぎり八千代やちよまでと

誓ちかひしことの今は早いまは早はや

淵ふちの水みな泡なわと消きえにけり

ああ戀こひしもよかなしもよ

汝なが魂みたまこの世よに生いきて

只ただ一言ひとことのいらへごと

つばらに述のべよ燕かき子つ花ばた

よしやよし龍たつの姿すがたになれとも

吾われはいとはじ

汝なれと吾われと

露つゆの情なさけに凝かたまりし

貴うづの御み子こなる龍たつ彦ひこの

日ひ々の生おひたち玉たまの肌はだ

汝なれに見みせたく思おもへども

今はせむなし幽界かくりよの

神かみとなりつる汝なれなれば

さはさりながら吾心わがこころ

汝なれが情なさけを忘わすれかね

朝夕あさゆふ川邊かはへに迷まよひ來きつ

くだらぬくり言ことくり返かへし

せめては心こころのなぐさめと

憂うき年月としつきを送おくるなり

ああ燕子花かきつばたよ燕子花かきつばたよ

汀みぎはに清きよく紫むらさきに

匂におへる花はなのそれならで

同おなじ名なを負おふ汝なれが身みは

今いまは敢あへなくなりしかと

思おもへばかなしさ堪たへがたく

吾も汝が後追ひて

これの淵瀬に入らむかと

夕べ夕べをとつおひつ

思案にくる惱ましさ

汝は知らずや聞かざるや

ああ悩ましもかなしもよ

生命死せむと思へども

老いたる父母のおはすあり

歩みもならぬ吾子あり

せめて吾子の生ひ立ちを

見とどけし上汝が後を

慕ひて淵に沈むべし

待たせ給へよ吾妻よ

あたりに人なければ、千萬無量の思ひを並べて歎き居る。

四天王の司等は、餘りの異變に驚きの餘り物も言はず、假殿に集り青息吐息の態にて、この後は如何なり行くならむと歎き居にけり。斯くて在るべきにあらねば、艶男の君に今後の處置を計らむと居間を訪ぬれば、蛻の殻、驚きて、もしやもし若君は姫の後を追ひしにはあらずやと、岩ヶ根は眞砂、白砂、水音、瀨音の四天王を伴ひ、大井川の淵瀨に急ぎ來て見れば、艶男は兩眼をはらし、涙の袖を絞りて何事かかこち居る。

岩ヶ根は差足拔足しながら艶男の側に近づき、背後よりむんずと身を抱へ、

□ 若君はここにいますか必ずや

弱き心を持たせ給ふな

姫君は水の藻屑となり給ひ

君が心の苦しさを知る

さりながら父母います御身なり

夢魂ゆめたましひを曇くもらせ給たまひそ

愛あいらしき稚ち子の生おひ立たち見みる迄までは

止とどまり給たまへ彌や猛たけ心こころを

いとこやの妻つまに別わかれし君きみなれば

心こころを亂みだし給たまふも宜うへよ

罷まがりたる人ひとは呼よべども歸かへらまじ

御國みくにの爲ために思おもひ直なほせよ
□

艶男あでやかは之これに答こたへて、

□
岩いはヶ根がねの厚あつき心こころは悟さとれども

今いまの吾わが身みは死しより外ほかなし

姫ひめの後あと追おひて一ひと道みちに向むかはむと

吾われは心こころを定さだめたりける

さりながらよくよく思へば父母の
歎きは吾より深かるものを

眞砂は、

龍神の島より来たす姫なれば

斯くなるべしとかねて思ひぬ

さりながら世繼の御子の生れませば

水上の館は永遠に榮えむ

この國の榮え思ひて若君よ

暫し生命をながらへ給はれ

若君に過ちあれば吾とても

館に仕ふる顔はなし

大井川底の心は知らねども

深ふかきは吾われ等らが歎なげきなりけり
若わか君ぎみの歎なげき宜うべよと思おもへども
神かみの御おん爲ため忍しのばせ給たまへ〆

艶あで男やかは之これに答こたへて、

㌶
汝なが言こと葉ば宜うべよと聞きけど吾わが魂たまは

震ふるひをののき死しなまく思おもふ

汝な等たちが心こころなやませ吾わが魂たまは

惡あく魔まの群むれに馳はせ入いりにけむ

龍たつ彦ひこは二ふ人たりが仲なかの遺か兒たみぞと

思おもへば安やすし生いの命ち死しすとも

汝なん等ぢらは吾われに代かはりて龍たつ彦ひこを

育はぐみくれよ御み代よを繼つぐまで〆

眞砂は答へて、

川底の白砂までも透きとほる

大井ヶ淵の今日は濁れる

天津空に雲かさなりて小雨ふる

淵の面に波紋描けり

天地の神も歎かせ給ふらむ

天津陽光も見えまさずして

歎かひの雲に包まれ水上山

貴の館は小雨降るなり

春雨のしとしと降れる今日の日

君の涙か吾身の涙か

吹く風も冷たくさみしこの朝を

吾は川邊に袖しぼるなる

水音は歌ふ。

大井川上津瀬に立つ岩ヶ根を

うつ水音も細く聞え來

大井川水音静めて今日の日を

歎くか御空ゆ細雨の降る

かかる世にかかる歎きを見ることは

水音吾も思はざりしを

兔も角も若君の心和めむと

探ねてここに吾等來にけり

神々のかなしき心を憐れみて

一先づ館に歸らせ給へ

貴の子の御顔つらつら御覽し

今日の歎きをなくさめ給へ

艶男は之に答へて、

川水の流るる見れば吾心

死にたくなりぬかなしさ餘りて

さりながら吾も人の子情をば

知らぬ岩木にあらずと知れよ

瀨音はかなしき聲を張り上げて、

瀧津瀨の音も淋しく聞ゆなり

燕子花姫の身罷りし日ゆ

汀邊に咲ける菖蒲の紫も

今日の歎きにしをれ顔なる

兔にもあれ角にもあれや死は易し

重おもき生命いのちを捨すてさせ給たまふな

天地あめつちの今いまや開ひらけし心地こころかな

君きみの心こころの岩いはと戸あ開あければ

吾等われら又また心安こころやすんじ國くにの爲ため

館やかたに長ながく仕つかへ奉まつらむ

歎なげかひの雲くもを拂はらひて永久とこしへに

これの館やかたを照てらさせ給たまへら

行く。
ここに岩いはヶ根がね他ほか四人よにんは、艶男あでやかの前ぜん後ごに附つき添そひ、いそいそとして貴うづの館やかたに歸かへり

(昭和九・七・二〇 舊六・九 於關東別院南風閣 谷前清子謹録)

第二二章 天變地妖〔二〇〇三〕

艶男は、岩ヶ根他四天王等の言葉を盡しての諫めに、死を思ひとどまりたれども、何故か大井ヶ淵の戀しくて堪らず、朝な夕なの區別なく、淵に舟を浮べて遊ぶを唯一の慰みとなしむたりける。

岩ヶ根は、若しや艶男に間違ひ無きやと案じ煩ひながら、眞砂、白砂を左右に看視兼接待役として従はしめたり。小雨ふる夕べ前、かたの如く艶男は眞砂、白砂を伴ひ、大井ヶ淵に暫時の舟遊びを試みにける。黄昏の幕稍迫らむとする折しも、不思議なるかな、微なる聲何處ともなく響き来るを、よくよく耳をすまして聞けば、以前龍の島根にて、艶男に思ひをかけし白萩の悲しげなる聲にぞありける。

白萩の聲。

秋風を待つ間の長き白萩は
遠き思ひに尋ね來にけり
生命までもと思ひし人は影もなく

あと白萩の花と散りけり

添はまくと思ひし夢の悲しさに

身もしら萩の花は萎れつ

恨めしき君なりにけり燕子花の

花のみ手折りて露もおくらず

この思ひ何時の世にかは晴らさむと

戀ふるも悲しき萩の仇花

現世に生くる甲斐なきわが身ぞと

思へば苦し君に捨てられて

百花の多かる中に汝が君は

燕子花のみ愛づるは恨めし

朝な朝な露重げなる萩が枝に

君は心をかけて見ざりしよ

故郷の龍の都の白萩を

藤ヶ丘邊に移して匂へり
ふぢがをかべ うつ にほ

白萩は情の露に捨てられて
しらはぎ なさけ つゆ す

細き生命を汀邊に保てり
ほそ いのち みぎはべ たも

橘と香れる君のよそほひは
たちばな かを きみ

われを思はず種にぞありける
おも たね

荒波をかき別け乗り切りこの淵に
あらなみ わの きき

伊寄り來りて君に焦るる
いよ きた きみ こが

御聲を朝な夕なに聞かまほしと
おんこゑ あさ ゆふ き

白萩われは淵に潜むも
しらはぎ ふち ひそ

太刀膚のわが身に怖ぢていとこやの
たち はだ み お

君は島根を離りましけむ
きみしまね さか

いとこやの君を生命と頼みてしを
きみ いのち たの

つれなき心恨めしみ思ふ
つれなき こころ にくしみ おも

龍神の身にしあれども人戀ふる
たつがみ み ひとこ

心に變りあるべきものかは
恨めしさ悲しさ此處に凝まりて
戀の淵瀨に悲しみ泣くなり」

艶男は微にこの聲を聞きて、白萩の心の憐れさに兩眼をうるほしながら、

☞ われとても木石ならぬ身なれども

一つの身なり如何に報いむ

われも亦歎きの淵に沈みつつ

胸晴らさむと此處に遊べる

黄昏を君の歎きの聲聞きて

悲しく淋しくなりにけらしな

戀故に生命惜しまじわれはただ

垂乳根の爲めながらふのみなり」

かくいふ折しも、
又もや上手の方より悲しき
聲聞え來る。

☐ われこそは汝を慕ひし白菊の

露に露ふ蕾の花よ

一本の花橘と思ひしを

君は百花千花を手折れり

恨めしく悲しく生命堪へがてに

われは湖路を渡り來しはや

わが思ひいや深ければ此の淵の

底に潜みて龍となりぬる

萬代の末にも枯れぬ白菊を

枯らし給へる君ぞ恨めし

千早振る神代の事も人ならば

問はましものを白菊の花

君きみケ代がよをいと長なが月の空そら清きよく

咲さかむ白しろ菊ぎくあはれと思おもへ

水みな上山かみやま菊きくの下水したみづ如い何かなれば

流ながれて淵ふちに沈しづむなるらむ

祈いのりつつ待まつ長なが月の菊きくの花はなを

何いづれの時ときか君きみの手た折をるや

山やまの端はを出いでゐる月つきの顔かむばせは

君きみの面おもてと白しろ菊ぎくの花はな

わが思おもひいや深ふかければ八やち千ひ尋ろの

湖うみを渡わたりて慕したひ來きつるも

類たぐひなき君きみのよそほひ見み染そめてゆ

白しろ菊ぎくわれは亂みだれむとせり

玉たまの緒をの生いの命ち惜をしまじ君きみ許がりに

近ちかく棲すみなば淵ふちの底そこひも
』

艶男はこの聲を聞き、狂氣の如く胸を燃やしながら、

☞ 今日(けふ)は又(また)悲(かな)しき聲(こゑ)を聞(き)く日(ひ)かな

今(いま)は前(ぜん)後(ご)も白(しら)波(なみ)の上(うへ)

秋(あき)されば白(しら)菊(ぎく)の花(はな)手(た)折(た)らむと

われは心(こゝろ)を替(か)へずありける

白(しら)菊(ぎく)の匂(にお)ひめでたくわが袖(そで)に

香(か)りて時(とき)じく忘(わす)らへなくに

惜(を)しまるる生(いの)命(ち)ならねど今(いま)しばし

わが子(こ)の生(お)ひたち待(ま)たせ給(たま)はれ

白(しら)菊(ぎく)の聲(こゑ)として、

☞ 御(おん)言(こと)葉(は)偽(いつはり)りなくばわれとても

なやみ晴らして時を待つべし

かかる折しも、稍下流に當りて、
まして聞き居れば、
女をみなへし郎花の細ほそき聲こゑひびき來きたる。よくよく耳みみをす

わねこそは龍たつの島根しまねに育そだちたる

か弱よわき花はなの女をみなへし郎花をみなへしぞや

君きみ戀こひてわが身みやつれぬ玉たまの緒をの

生いのち命し死しせむと幾いくたび度おも思おもひし

八やしほぢ潮路をわたを渡りてここに大井川おほゐがは

淵ふちせ瀨せに沈しづむも君きみおもへばなり

細ほそ々と降ふり來くる雨あめは君きみ思おもふ

悲かなしきわれの涙なみだなるぞや

如何いかにして悲かなしき思おもひ晴はらさむと

波路なみぢを分わけて此處ここに來きつるも

水上山みなかみやま斜面なぞへに匂にほふ女郎花をみなへしの

やさしきよそほひ見みそなはさずや

君戀きみこひてここに幾日いくひを重かさねけり

露つゆの情なさけの雨あめに濡ぬれむと

われは今見いまみるに堪たへざる醜神しこがみの

龍たつと思おもへば悲かなしかりけり

幾千代いくちよもこれの淵瀨ふちせに沈しづみゐて

君きみが御幸みさちを護まもらむと思おもふ

白萩しらはぎも白菊しらぎくの君きみもわれも亦また

藤ヶ丘ふぢが邊をかへに君きみを待まつなり

玉たまの緒をの君きみが生命いのちの果はつるまで

なやみ苦しくるみ待またむとぞ思おもふ

龍神たつがみの悲かなしき心こころを思おもひやり

夢の枕にも俣ばせ給へ

かく響く折しも、淵の水は俄に大なる波紋を描き、水煙とともに立ち昇りたるものあり。よくよく見れば人面龍身の燕子花なるに、艶男も眞砂、白砂も一度に驚き、茫然として、あちらこちらと立ち狂ふ水煙を眺めぬ。波紋は益々激しく、遂には舟も覆らむばかりの荒波となりければ、艶男は意を決して立ち上り、

わが戀ふる燕子花姫の荒びにや

われはとどむる力だになし

かくなれば何をいなまむわれも亦

水の藻屑となりて消ゆべし

眞砂、白砂の兩人は驚きて、艶男の左右の手をしつかと握り、涙ながらに、

□ 若君よはやらせ給ふ事なかれ

君には父母と御子いませずや

玉の緒の生命死するはいと易し

重きは國の務めなるぞや

思ひきや大井の川の舟遊びに

かかる歎きの身に迫るとは

上津瀬にはた中津瀬に下津瀬に

聞ゆる聲は魔神なるらむ

若君よ魔神の甘き言の葉に

かかりて生命捨てさせ給ふな

若君の生命はわれ等があづからむ

眞砂、白砂力限りに

白砂はあわてて、

風荒れて波高まりぬいざ舟を

岸邊に寄せむ眞砂よ舟漕げ

眞砂はこたへて、

艦も櫂も波に浚はれ如何にして

岸邊に着かむこの荒川を

斯くいふ折しも、一天俄にかき曇り、暴風吹き荒み、大地は震動して、荒波の
猛りに舟諸共に三人の姿は水中深くかくれける。

これより日夜の震動止まず、雷轟き、稲妻閃き、暴風吹き荒み、雨は盆を覆せ
し如く、地鳴震動間斷なく、さしもに平穩なりし水上山の聖場は、阿鼻叫喚の巷
と化し去り、岩ヶ根は龍彦を一大事と背に負ひ、高殿に上りて、難を免れみたり
ける。

國津神たちの右往左往に泣き叫ぶ状、目も當てられぬ慘状なりける。
かかるところへ、天より降り來ませる容姿端麗なる女神、四柱の侍神を伴ひ、
此場に降らせ給ふ。

(昭和九・七・二〇 舊六・九 於關東別院南風閣 林彌生謹録)

第二三章 二名の島〔二〇〇四〕

水上山方面の地は、數日の間天災地妖打ち續き、雷鳴轟き電光閃めき、暴風雨
しきりに臻り、驟雨沛然として瀧の如く、地鳴震動連續的に起り、大井ヶ堰は濁
水滔々と流れ落ち、鬮々たる水勢は雷鳴に和して、耳も割るるばかりの大騒動と
はなりぬ。

大井の淵には四頭の龍神互に眼を怒らし、一人の艶男を奪はむと、間斷なく格
闘を續け、龍體より流るる血汐は、濁水に和して朱の如く、さすがに廣き玉耶の

湖も紅の湖と變りけり。水量は日に日に増さり行きて、低地に住める國津神等は住家を流され、生命を奪はるる者多く附近の山にのぼりて難を避けつつありけるが、暴風雨と地鳴との爲に振り落され、水中に没して生命を失するもの、その數を知らざりき。

山神彦、川神姫は岩ヶ根、瀨音、水音と共に、幼き乳兒を抱へ、頂上の神殿に參籠して、一時も早く天變地妖のをさまらむ事を祈願すれども、如何ともせむ術もなく、慘状は益々その度を加ふるのみ。

かかるところへ大空の黒雲を分け、四柱の侍神を従へ、嚙曉たる音楽と共に、水上山の頂さして降り給ひし神は、御樋代神の朝霧比女の神に坐しましける。侍神は大御照の神、朝空男の神、國生男の神、子心比女の神に坐しましける。朝霧比女の神は、天變地妖をもものともせず、儼然として宣らせ給ふ。

☞ われこそは主の大神の神言もて
御樋代神と降り來つるも

葭原よしはらの國くに土には獸けものに汚けがされて

天あめと地つちとの怒いかりを招まねけり

龍たつヶ島がしまの乙女をとめを汚けがせし罪つみによりて

國魂くにたまがみ神かみは怒いからしにけり

われは今いま葭原よしはらの國くに土にを治しらさむと

降くだりて見みれば淺あさましき状さまよ

天津あまつかみ神かみ生うませ給たまひし食をす國くにを

わが物もの顔がほに振ふる舞まひし罪つみなり

山やま神がみ彦ひこ、川かは神かみ姫ひめが今けふ日ひの日ひの

歎なげきにあふも神かみの心こころよ

今けふ日ひよりはたかぶる心こころを振ふるりすてて

正ただしく清きよく神かみに仕つかへよ

此この國くには汝なれが治をさむる國くにならず

御み樋ひ代しろ神がみの治しらす國くになり

玉耶湖たまやこの中なかに浮うかべる龍たつがしまヶ島は

今いまは全まく備そなはらぬ國くに

人ひとの面おもなしつる女神めがみも身からだ體たまの

そおほの大方かたは獸けものなるぞや

神かみの子この御魂みたまをも持もちて獸けものなす

姫ひめをめと娶めとるは罪つみとこそ知しれ

艶あでやか男やかは神かみの律おきてに叛そむきたる

報むくいによりて亡うせにけるかも

今けふ日ふよりはいづれの神かみも村むら肝きの

心こころ清きよめて改あらためよかし。

一ひと二ふた三み四よ五いつ六む七な八や九こ十の
百も千ち萬よろ八つ千や萬よろ

風かぜも早はや凧なげ雨あめも降ふるな
 雲くもよ退しりぞけ地な震み振ふる止とまれ
 これの神みくに國は主スの神かみの
 依よさし給たまへる御み樋ひ代しろ神がみの
 永と久はに鎮しづまる清すが所どなり
 雨あめはれ國くにはれ雲くもはれよ
 葭よしの島しま根ねは今日けふよりは
 黄こが金ね花はな咲さく食をす國くにと
 宣のり直なほしつつ開ひらくべし
 ああかむ惟ながら神かむ々ながら
 わが言こと靈たまに力ちからあれ
 生いく言こと靈たまに光ひかりあれ
 〇

と宣のらせ給たまふや、さしも烈はげしかりし雷らい鳴めいは鎮しづまり、
 電でん光くわうは影かげを没ぼつし、
 暴ほう風ふう雨うは跡あと

形かたもなく尾をの上への雲くもと消きえ、地震ないふるはひたと止とまりて、安あん静せいの昔むかしにかへりしこそ畏かしこけれ。

山やま神がみ彦ひこは濁だく流りゅうの次し第だい々し々だいに減げんじ行ゆくを眺ながめながら、恐おそれ畏かしこみ歌うたふ。

御み樋ひ代しろの神かみの光ひかりの畏かしこけれ

百もものなやみも消きえ失うせぬれば

大おほ御み祖おや神かみのみあとを繼つぎて來こし

われは御み國くにの仇あだなりしかも

治をさむべき神かみの治をさむる國くになりしと

今いま更さらながら悟さとらひにけり

御み祖おやより重かさね來きたりし罪つみ科とがを

許ゆるさせ給たまへ御み樋ひ代しろの神かみ

わが倅せがれ水みづの藻も屑くづと消きえ果はてしも

御み祖おやの罪つみのめぐり來きつるか

畏しや貴の言靈幸はひて

國のなやみは消え失せにけり

今日よりは心清めて御樋代の

神の教にまつるひ奉らむ

川神姫は恐る恐る御前にひれ伏して、述懐を歌ふ。

はしけやし嚴の御神天降りまして

われらが悩みを救はせ給ひぬ

知らず知らず罪を犯せしわれなりし

許させ給へ天降ります神

御顔を仰ぐもまぶしくなりにけり

曇りきりたるわがまなかひは

まなかひの眩むばかりに思はるる

神かみのよそほひ尊たふときろかも

今いまとなりてわが子この生命いのちは惜をしむまじ

ただ惟かむながらかみ神かみに任まかせむ

よしやよしわれらの生命いのち召めさるとも

罪つみし消きゆれば悔くゆる事ことなし

昔むかしより此この丘をかの上へに鎮しづまりて

國くにを守まもりしことのはづかし

主スの神かみの御み許ゆるしなくばよき事ことも

罪つみなりといふ事ことを悟さとりぬ
』

御み樋ひ代しろ神がみの朝あ霧さぎ比り女ひめの神かみはうなづきながら、

㊦
汝なが言こと葉は澄すみてありけり宜うべ
宜うべ

國くにの司つかさとありし身みなれば

汝が罪をここに改め許すべし
水上の山に永久に鎮まれ

山神彦は涙を袖に拭ひながら、

再生の思ひするかな御樋代神の

なさけの言葉かたじけなみつつ

天地の神は怒りて國原は

修羅の巷となりけりしな

常闇の世を照しつつ天降りましし

神の御前に戦くわれなり

岩ヶ根は恐る恐る歌ふ。

二柱神ふたはしらかみに仕つかへて今日けふまでも

安やすく暮くれにしわが身み恥はづかし

御み樋ひ代の神かみの御み前まへを伏ふし拜をがみ

わが身からだ體たまはいすくみにける

主スの神かみの御み許ゆるしなくて仕つかへたる

われは悲かなしも罪つみを重かさねて

目め路ぢの限かぎり國くに津つ神かみらの住すむ家いへは

跡あと形かたもなく失うせにけるかも

かくの如ごとなげきの種たねを培つちかひし

われは禮あやなき罪つみ人びとなりける

わが生いの命ちよしや死しすとも厭いとはまじ

なやめる神かみを許ゆるさせ給たまへ

此この館たちに古ふるく仕つかへて年とし老おいぬ

著しるきいさをのあともなくして

水音は歌ふ。

久方の雲井を分けて天降りませし

神の御前にわれ戦きぬ

常闇の醜の國原伊照らして

天降り給ひし尊き神はも

瀧津瀨の水音とみにしづまりて

漲る水は低みたるかも

つぎつぎに漂ふ水も流れ行きて

狭霧立ちたつこれの國原

如何して貴の恵に報いむと

思ふはわれらが眞心なりけり

瀧音は畏み歌ふ。

☪ 常闇とこやみの歎なげきに泣なきしわが魂たまも

神かみの光ひかりによみがへるける

幾いくちよ千代すゑの末すゑの末すゑまで忘わすれまじ

神かみの恵めぐみのいやちこなるを

あはれあはれ水みな上山かみやまの聖せいぢやう場ばは

蘇よみがへりつつ朝あさひ日照てらへり

草くさも木きも歡えらぎよろこぶ世よとなりぬ

光ひかりの神かみの天あ降もりましてゆゝ

大御照おほみてらしの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

☪ 天津日あまつひも大御照おほみてらしの神かみなれば

御樋みひ代しろ神がみに添そひて降くだれる

今日けふよりは御空みそらの雲霧くもぎり吹ふき拂はらひ

葭原よしはらの國くに土にを生いかさむと思おもふ
光ひかり闇やみ行ゆきかふ世よなりわれあらば

夕ゆふさりくるも國くに原はら明あかるし

龍たつ神がみの島しまの乙をとめ女に心こころせよ

彼かれ等らは全まつたき神がみにあらねば

御み樋ひ代しろの神かみの渡わたらせ給たまひなば

龍たつの島しま根ねは生いく國くにとならむ

伊い吹ぶき山やま尾を根ねに集あつまる曲まが津つ見みは

百もも花ばな千ち花ばなと化なりて匂におへるよ
』

岩いはヶ根がねは頭かしらを地ちにすりつけながら、

㊦
あありまがたし天あま津つ御み神かみの御み宣こと示のり

心こころに刻きみて忘わすれざらまし

歎なげかひの日ひを送りおくつつよるこびの
今日けふはよき日ひにあひにけらしな
」

朝空あさぞら男をの神かみは御歌みうた詠よませ給たまふ。

悩なやましき水みな上かみの山やまのありさまを

われあはれみて降くだり來きつるも

御樋みひしろ代の神かみのみあとに従したがひて

天あも降りしわれは朝空あさぞら男をの神かみ

朝津あさつひ日は御空みそらに昇のぼり夕月ゆふつきは

尾をの上へにかかりて國くに土に照てらしまさむ

主スの神かみの貴うづの食をす國くにを美うまし國くにと

治をさめて永と久はの礎いしず固かためむ

山やま神がみ彦ひこよ岩いはヶ根がね、瀨せ音おと、水みな音おとと

ちからあは
力協せて御子を育てよ
お
生ひ立ちし御子を此地の司とし
ちか
近き邊りを安く治めよ
やす
をさ

やまがみひこ
山神彦は嬉しさのあまり、
らくるい
落涙しながら地に伏して歌ふ。

つみふか
罪深きわれらが孫をかくまでも
ゆぐ
恵ませ給ふと思へば悲しき
まごころ
真心のあらむ限りを捧げつつ
みひしろがみ
御樋代神に永久に仕へむ

かはかみひめ
川神姫は同じく伏して歌ふ。

とこやみ
常闇の世は晴れにけり隈もなく

御樋代神の光によりて
わが夫と共にかしこみ此國の
近き邊りを謹み治めむ

國生男の神は御歌詠ませ給ふ。

葭原の國土は涯なく廣ければ
われは力の限りを盡さむ
はてしなき此國原に天降りまして
都つくると思へばいさまし

御樋代の神は再び歌はせ給ふ。

朝霧は四方に立ちたつ夕霞

棚たなび引き初そむるこれの國くに原はら

水みな上山なみやまこれの清すがど所とは年とし老おいし

二ふたり人を休やすませ岩いはがヶ根ねにあづけむ

此この御み子の生おひ立たちまさば岩いはがヶ根ねは

國くにの政まつり治りを御み子こに返かへせよ

此この御み子こは龍たつが神みの腹はらに生なりませば

國くに津つか神かみらの手てには育そだたじ

子こ心こころ比ひ女め神かみに嬰みづこ兒こを守まもらせて

安やすく雄を々をししく育そだてむと思おもふ

岩いはがヶ根ねは地ちに伏ふして歌うたふ。

ありがたし老おいます君きみのあとうけて

水みな上の山やまに仕つかへ奉まつらむ

貴御子の生ひ立ちまさば吾は直に

これの御國を返し奉らむ

貴の子の生ひ立ち頼みまゐらす

御樋代の神子心比女の神に

子心比女の神は御歌詠ませ給ふ。

御樋代の神の仰せをかしこみて

朝な夕なを恵み育てむ

斯く歌ひ給ひて、龍彦の御子を御肌みはだに抱かかへさせ給ひ、

貴の子よ愛しき御子よ汝こそは

國の柱よすくすく育てよ。

神かみの恵めぐみはいや廣ひろし

汝なれの生命いのちの永ながかれと

朝夕あさゆふ祈いのりて育はぐまむ

山やま神かみ彦ひこよ川かは神かみ姫ひめよ

心こころ安やすかれ岩いはケ根がねも

すくすくこのこ此こ子の生おひ立たちを

樂たのしみ待まてよ惟かむ神ながら

われはこれより高たか光みつの

御みやま山を指さして御み樋ひ代しろの

神かみに從したがひ出いで行ゆかむ

あかむあながら惟かむ神ながら々々

恩みたまの賴ふゆは永と久はにあれ

恩みたまの賴ふゆは永と久はにあれ

と歌はせ給ひつつ、悠然として雲を起し、御樋代の神の他四柱は、高光山の方面指して出で給ひける。

因ちなみに言いふ、高光山たかみやまを境さかひとして、東ひがしに御樋代神みひしろがみの貴うづの御舎みあらかは建たてられ、土阿とあの宮きう殿でんを造つくり、改あらためて土阿とあの國くにと名付なづけ給たまひ、高光山たかみやま以西いせいを豫讚よさの國くにと名付なづけ給たまひ、葭原よしはらの國くに土を總稱そうしようして貴うづの二名島ふたなじまと稱たたへ給たまひけるぞ畏かしこけれ。

（昭和九・七・二〇 舊六・九 於關東別院南風閣 白石恵子謹録）

（ ）

靈界物語 第七九卷 天祥地瑞 午の卷

終り